



神奈川県  
衛生研究所

平成 13 年

# 神奈川県感染症

---

平成15年2月

## はじめに

感染症対策は、明治30年制定の伝染病予防法等により様々な施策が講じられ、近年の公衆衛生の向上と医療技術の発達とともに、大きな成果を遂げてきました。

しかし、国内では、地球温暖化や交通技術の発達により、結核、マラリア等の再興感染症、そして、後天性免疫不全症候群、腸管出血性大腸菌感染症等の新興感染症等、新たな問題が生じています。また、国外では、炭疽菌によるバイオテロやウエストナイル熱の流行等、私達は、時代の変化とともに常に感染症の脅威にさらされています。特に、ウエストナイル熱については、我が国でも平成14年10月29日付けで、感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律の4類感染症に指定されたところでございます。

神奈川県内においても、平成14年10月に大量のカラスが不審死するという事件があり、死因についてウエストナイル熱も疑いを持ち、検査を行いました。検査結果は陰性でしたが、この事件を機に、神奈川県としても健康危機管理という観点から、マニュアルの徹底、適宜見直しをはじめとして体制作りをより一層強化し、感染症対策に努めているところでございます。

また、結核については、依然として我が国最大の感染症であり、平成11年には結核緊急事態が宣言されたところです。これを受け、神奈川県といたしましても、結核の蔓延防止に向けて、発生状況の把握に努めるとともに、情報解析の強化を図り、今後もより一層、結核対策に取り組んでいく所存でございます。

この冊子は、平成13年の本県における感染症発生動向調査、微生物検出情報、関連調査及び研究報告等を収録したものであります。

今後の感染症対策の参考に多少なりともお役にたてれば幸いに存じます。

最後に、本冊子の作成にあたり、関係各方面の多数の方々から、貴重な研究資料をご提供いただきましたことを厚くお礼申し上げます。

平成15年2月

神奈川県衛生研究所長

益川邦彦

# 目 次

はじめに

I 感染症発生動向調査	1
II 細菌性感染症	
1 腸チフス・パラチフス	21
(1) 神奈川県内（横浜・川崎市を除く）チフス菌等のファージ型別結果	21
(2) 横浜市の腸チフス菌等のファージ型別結果	21
2 その他の感染症	22
(1) 横浜市における海外渡航者下痢症からの病原菌分離状況	22
(2) 散発下痢症からの病原菌分離状況について	23
(3) 腸管出血性大腸菌（O157：H7）感染症の集団発生事例	24
(4) 淋菌の薬剤感受性について	25
(5) 川崎市の下痢症患者からの腸管系病原菌検出状況	26
(6) 横須賀市の散発下痢症からの腸管系病原菌検出状況	28
(7) 河川等の環境調査	29
(8) バイオテロに伴う炭疽菌検査	41
III ウイルス性感染症	
1 日本脳炎	43
(1) 日本脳炎の感染源調査結果	43
(2) 日本脳炎ウイルス（JEV）調査	43
2 インフルエンザ	44
(1) 神奈川県の発生状況	44
(2) 神奈川県域のインフルエンザの動向	45
(3) 横浜市のインフルエンザの動向	46
(4) 川崎市のインフルエンザの動向	50
(5) インフルエンザの感受性調査	51
3 その他の感染症	53
(1) 神奈川県（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く）における麻疹抗体保有状況	53
(2) 神奈川県（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く）における風疹抗体保有状況	54

(3) HIV 患者・感染症の状況について	55
-----------------------	----

#### IV その他の感染症

1 神奈川県で発生した恙虫病（つつが虫病）について	67
---------------------------	----

#### ～ 資 料 ～

1 平成13年分1～3類及び全数把握対象の4類感染症	71
2 細菌検出状況	72
3 ウイルス検出状況	77
4 予防接種実施状況	83
5 神奈川県感染症機関分布図	85
6 神奈川県感染症機関一覧表	86

# I 感染症発生動向調査

# I 平成13年感染症発生動向調査

## 1 類感染症

### エボラ出血熱

県内報告なし。

### クリミア・コンゴ出血熱

県内報告なし。

### ペスト

県内報告なし。

### マールブルグ病

県内報告なし。

### ラッサ熱

県内報告なし。

## 2 類感染症

### コレラ

横浜市内、厚木からそれぞれ1例、計2例の報告があったが、昨年同様すべて海外渡航による国内持ち込み例であった。菌の型別では、すべてエルツール小川型であった。

### 細菌性赤痢

県内では合計51例の報告があったが、昨年の73例から比べ少ない発生数であった。その内訳は、横浜市内19例、川崎市内は14例、横浜市・川崎市を除く神奈川県内地域（以下「県域」という）で18例であり、昨年同様その多くは、海外渡航者による国内持ち込み例であった。

### 腸チフス

県内で5例の報告があった。その内訳は、横浜市内2例、川崎市内、横須賀市、相模原市がそれぞれ1例であった。すべて海外渡航者による国内持ち込み例であった。

### パラチフス

県内では3例の報告があった。その内訳は、横浜市内、川崎市内、県域からそれぞれ1例の報告があった。

### 急性灰白髄炎

県内報告なし。

### ジフテリア

県内報告なし。

## 3 類感染症

### 腸管出血性大腸菌感染症

県内で合計300例の発生が報告された。その内訳は、横浜市内89例、川崎市内31例、県域が180例であった。昨年の205例に比べ増加の傾向が見られたが、これは、首都圏で「ローストビーフ」および「牛のたたき」を原因とする腸管出血性大腸菌感染症患者が多発した影響によるものと思われる。

## 4 類感染症（全数把握対象疾患）

### アメーバー赤痢

県内で43例の報告があった。内訳は、横浜市内28例、川崎市内8例、県域が7例であった。

### エキノкокクス症

県内報告なし。

### 黄熱

県内報告なし。

### オウム病

川崎市内から5例の報告があった。これは、川崎市立の動物園のヘラジカ出産に立ち会った獣医師、飼育員などの集団発生によるものである。

### 回帰熱

県内報告なし。

#### 急性ウイルス性肝炎

県内では59例の報告があった。その内訳は、横浜市内26例、川崎市内3例、県域で30例の発生が報告された。

#### Q熱

県内で1例、横浜市内から報告があった。

#### 狂犬病

県内報告なし。

#### クリプトスポリジウム

県内から4例の報告があった。その内訳は、横浜市内3例、川崎市内1例で、県域からは報告がなかった。

#### クロイツフェルト・ヤコブ病

県内から7例報告があった。その内訳は、横浜市内3例、川崎市内2例、県域2例であった。

#### 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

県内で2例報告があった。その内訳は、横浜市内1例、県域から1例であった。

#### 後天性免疫不全症候群

県内で82例の報告があった。昨年の62例から比べて増加している。内訳は横浜市内35例、川崎市内23例、県域が24例であった。

#### コクシジオイデス症

県内報告なし。

#### ジアルジア症

県内で13例の報告があった。その内訳は、横浜市内8例、川崎市内1例、県域が4例であった。

#### 腎症候性出血熱

県内報告なし。

#### 髄膜炎菌性髄膜炎

相模原市から1件の報告があった。

#### 先天性風疹症候群

県内報告なし。

#### 炭疽

県内報告なし。

#### ツツガムシ病

県内で9件の報告があった。その内訳は、横浜、川崎両市を除く県域からの報告であった。

#### デング熱

県内から7例の報告があった。内訳は、横浜市内4例、県域から3例であった。患者のすべては、海外渡航者による国内持ち込み症例であった。

#### 日本紅斑熱

県内報告なし。

#### 日本脳炎

県内報告なし。

#### 乳児ボツリヌス症

県内報告なし。

#### 梅毒

県内で17例の報告があった。その内訳は、横浜市内2例、川崎市内5例、県域10例であった。

#### 破傷風

県内から5例の報告があった。その内訳は、川崎市内1例とそのほかの県域から4例であった。

#### バンコマイシン耐性腸球菌感染症

県内から8例の報告があった。その内訳は、横浜市内3例、川崎市内1例、県域4例であった。

#### ハンタウイルス肺症候群

県内報告なし。

#### Bウイルス病

県内報告なし。

#### ブルセラ症

県内報告なし。

#### 発疹チフス

県内報告なし。

#### マラリア

県内から7例の報告があった。その内訳は横浜市内7例、川崎市内1例、県域が1例であった。すべての症例が、海外渡航者による国内持ち込み症例であった。

#### ライム病

県内報告なし。

#### レジオネラ症

県内で2例の報告があった。その内訳は、川崎市内と横浜を除く県域のそれぞれ1例の報告であった。

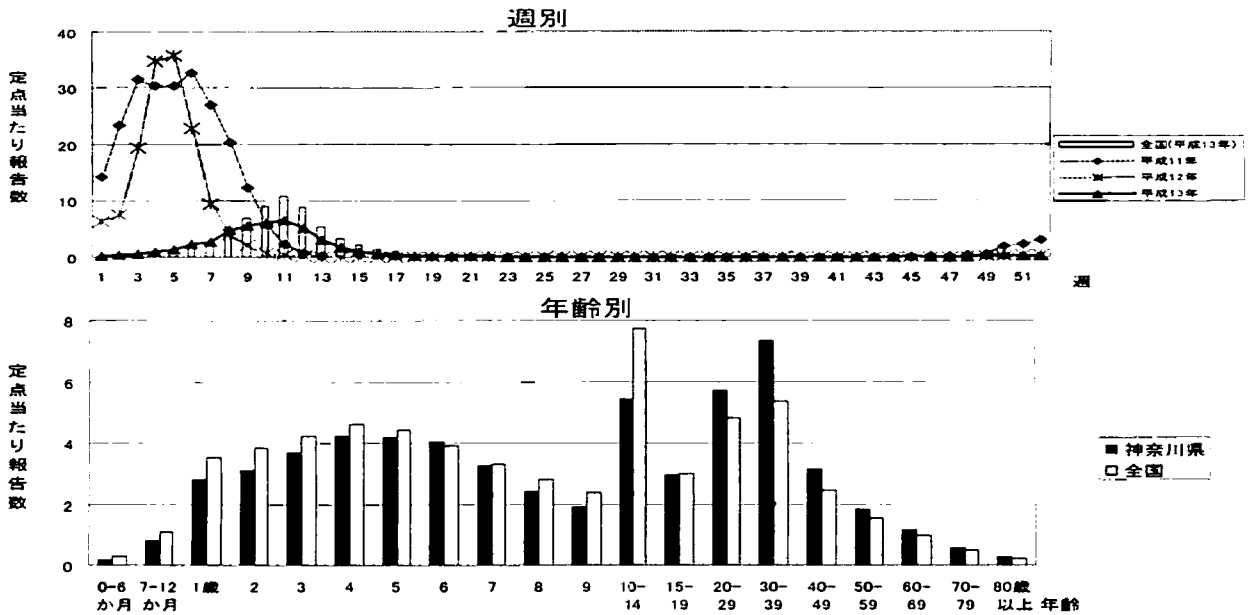


## 週報対象疾患

### インフルエンザ

平成13年の流行は、過去3年間で最低の水準にあった。流行のピークも例年に比べ1か月から1か月半遅れた流行であった。この傾向は、全国

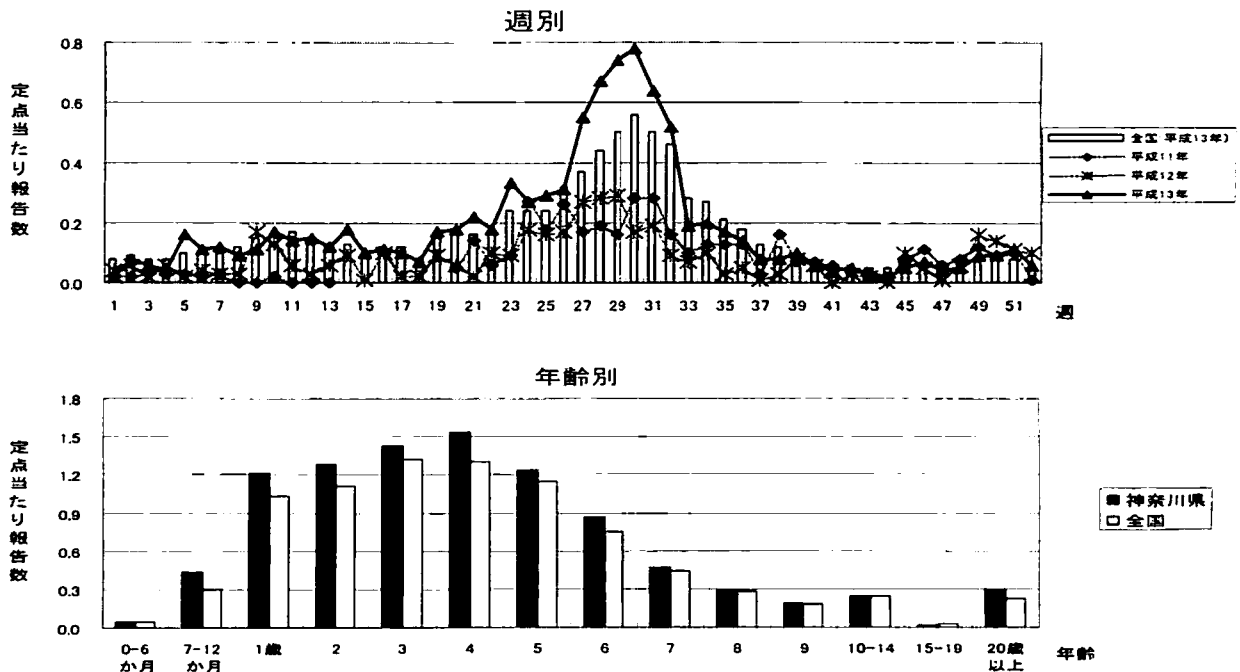
と比べてほぼ同じであった。流行株は、A/H1(ソ連)型で、10年、11年がA/H3(香港)型で12年がA香港とAソ連の混合であったことから、13年がソ連型であったことが興味深い。



## 咽頭結膜熱

平成11年、12年でやや高い流行を示していたが、13年は、30週で定点あたり全国平均0.6弱であったのに対して同じ週に0.8であった。こ

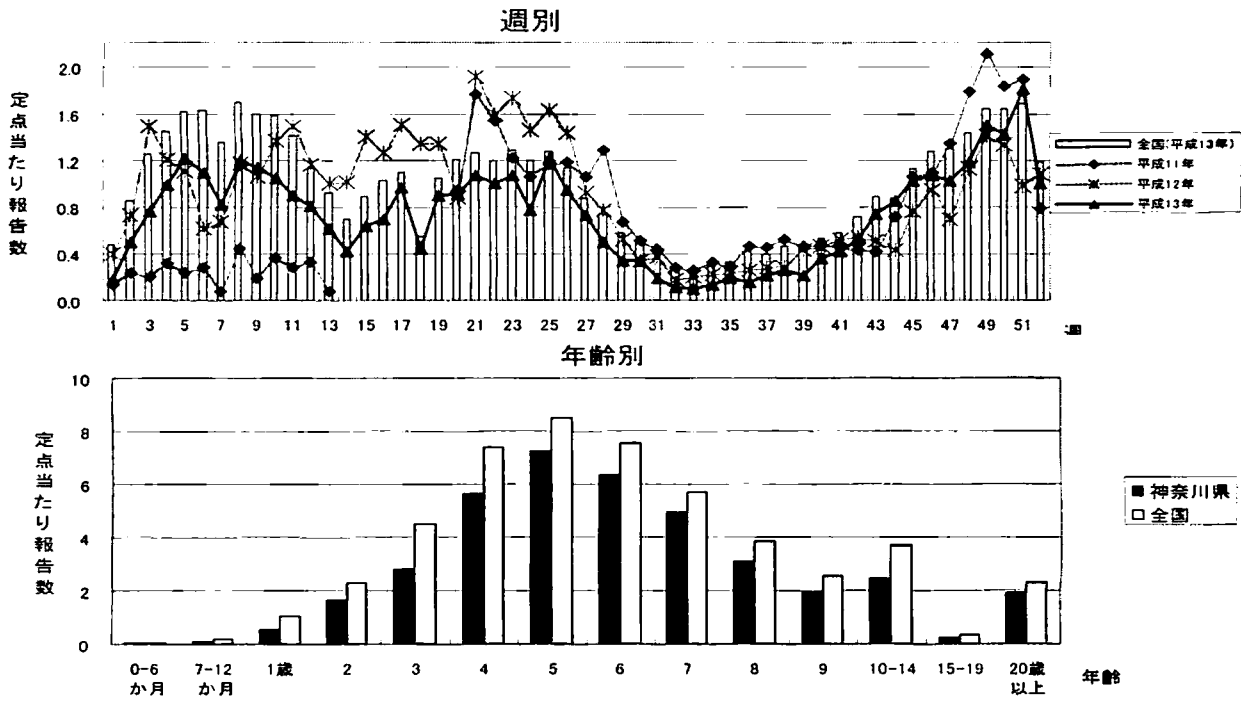
れは昨年同月に比べて3倍近くに増加していた。年齢別にみても、6歳以下ですべての年齢層で全国平均を上回っていることがわかった。



### A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

平成12年に13週から26週にかけて断続的な小流行がみられたが、13年は全体に低調な流行状態

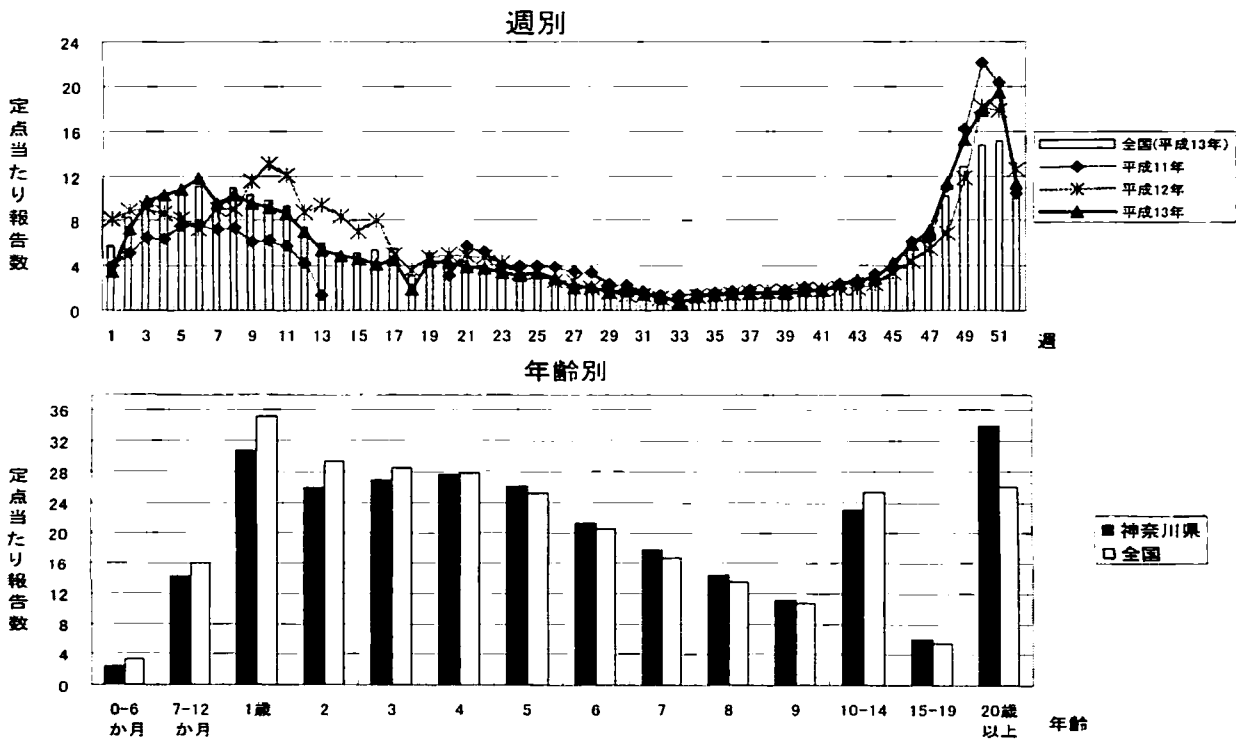
であった。年齢別にみても、各年齢層で全国平均を下回っていることがわかった



### 感染性胃腸炎

例年と同様、平成13年も45週頃から急速な流行がみられたが、流行の状況は、全国の状況とほ

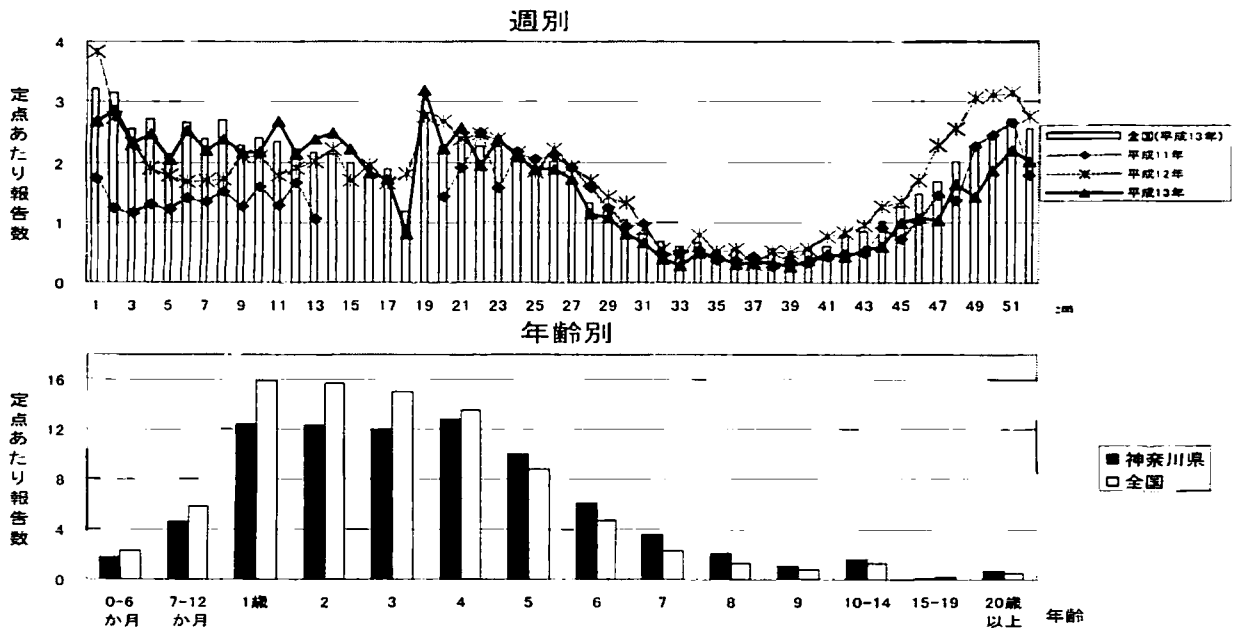
ぼ同じであった。年齢別でも同様の傾向にあったが、20歳以上の症例が全国に比べて高い傾向がみられた。



水痘

年末から初夏にかけて毎年流行する。平成13年は、年初めは全国とほぼ同様の発生傾向を37週

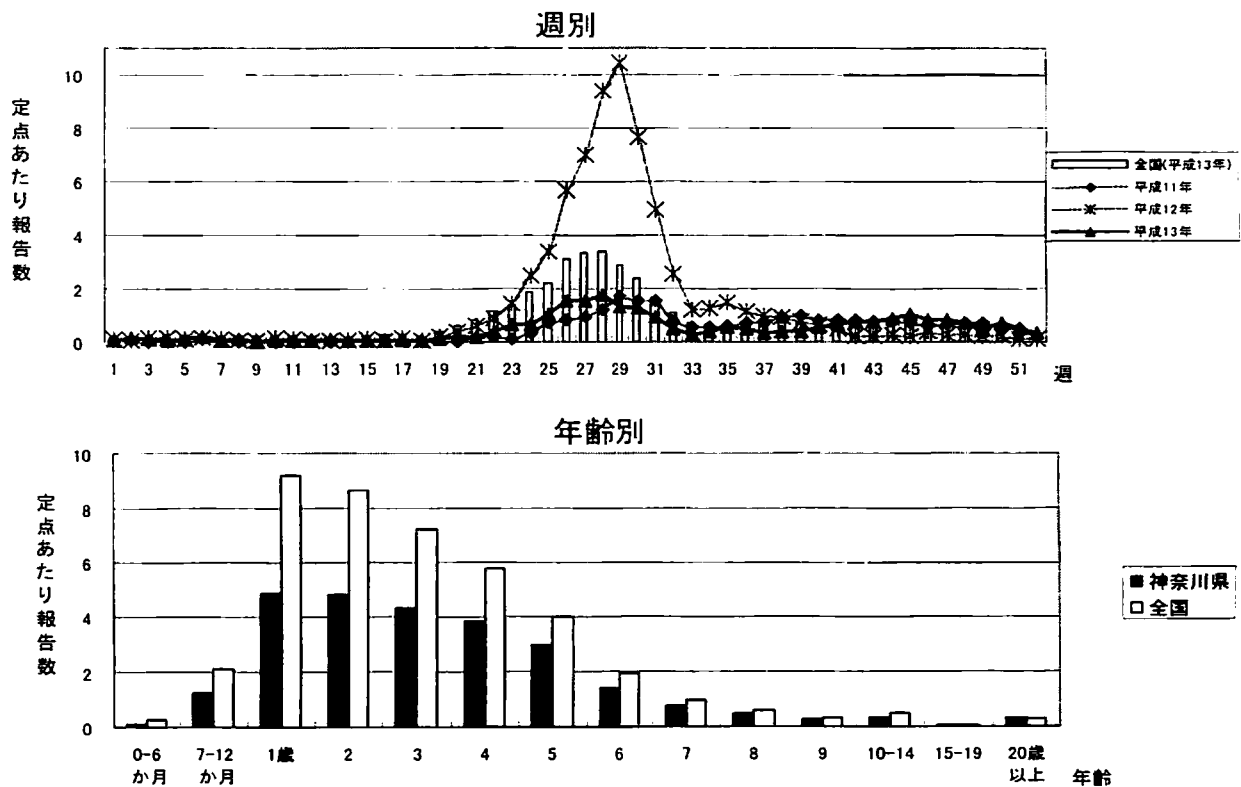
まで推移してきたが、年末の流行時期になり全国平均よりやや低い傾向で推移した。



手足口病

平成12年に高い流行を示していた本疾患は、13

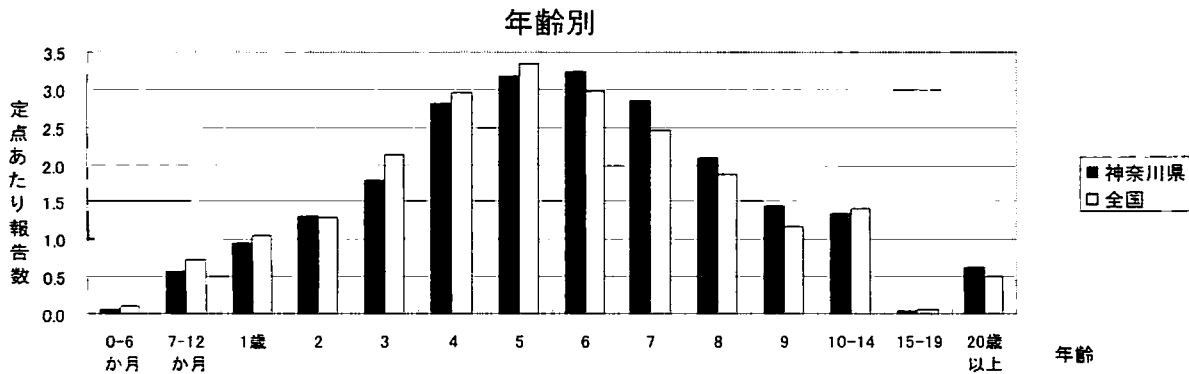
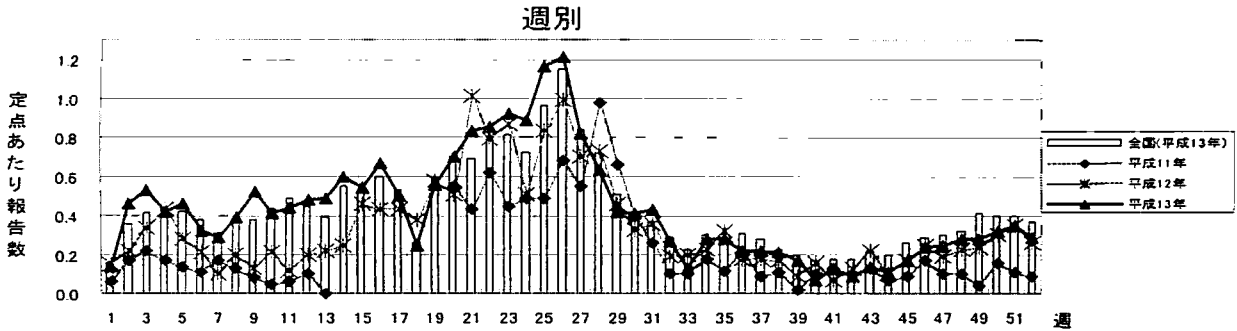
年には一転して沈静化し、全国の発生状況と比べてもやや低い発生率にとどまっていた。



**伝染性紅斑**

本疾患は、春から初夏にかけて例年流行がみら

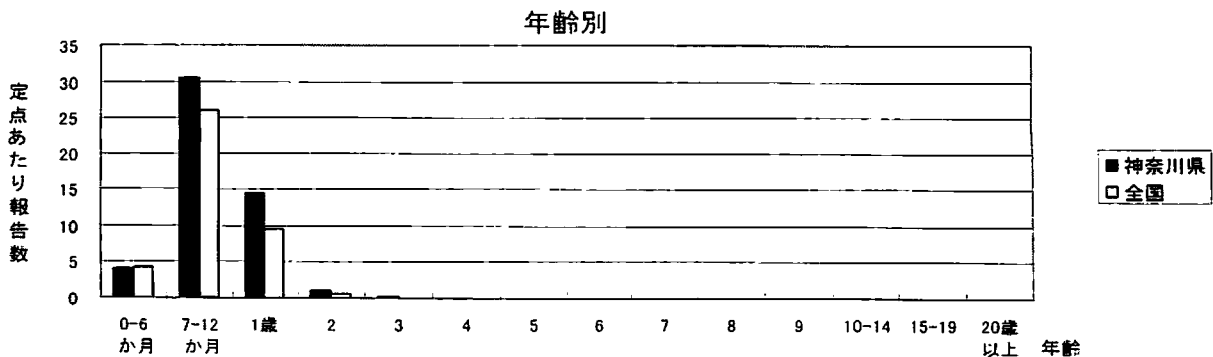
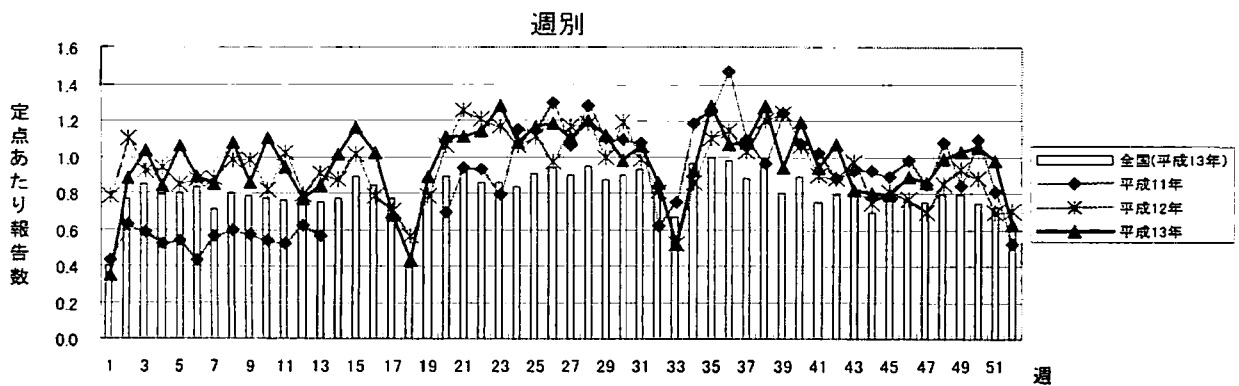
れている。平成13年も同様な傾向ではあったが、12年に比べてやや高い傾向にあった。



**突発性発疹**

本疾患は年間を通じて流行がみられ、ほとんど季節変動はみられない。平成12年からやや減少

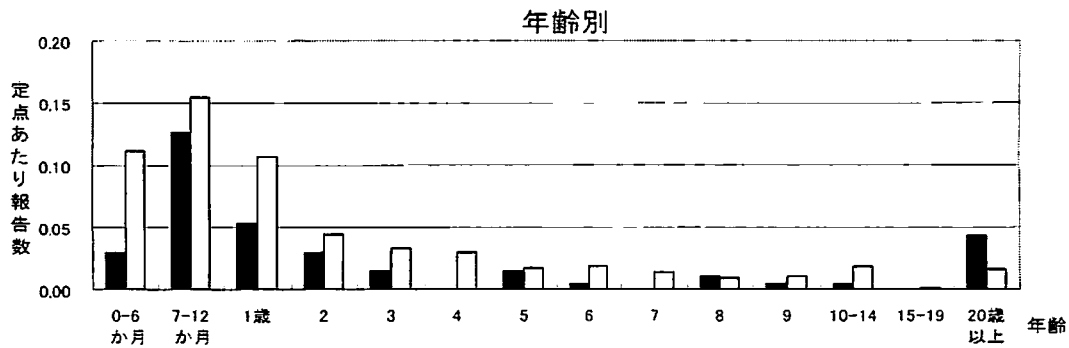
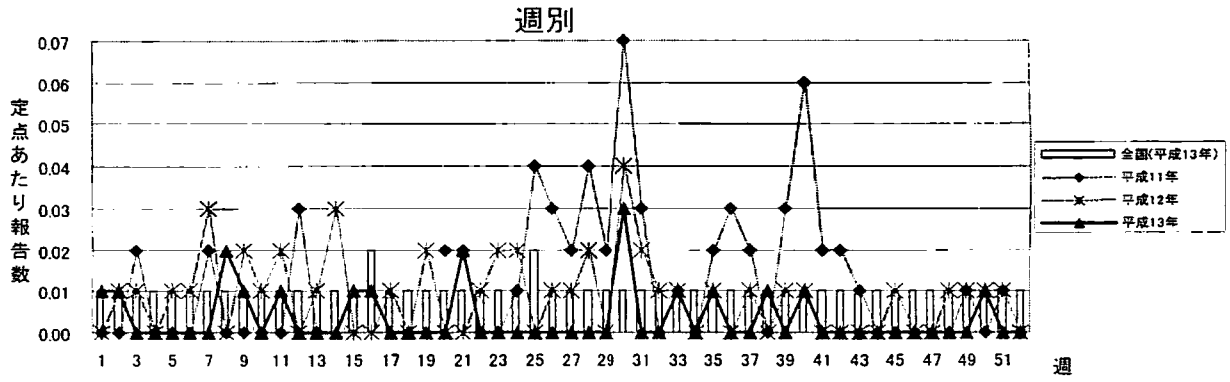
に転じたかにみえたが、13年には増加の傾向にあり全国平均から比べてやや高い傾向がみられた。



百日咳

平成13年は、例年通り年間を通じて散発的な発

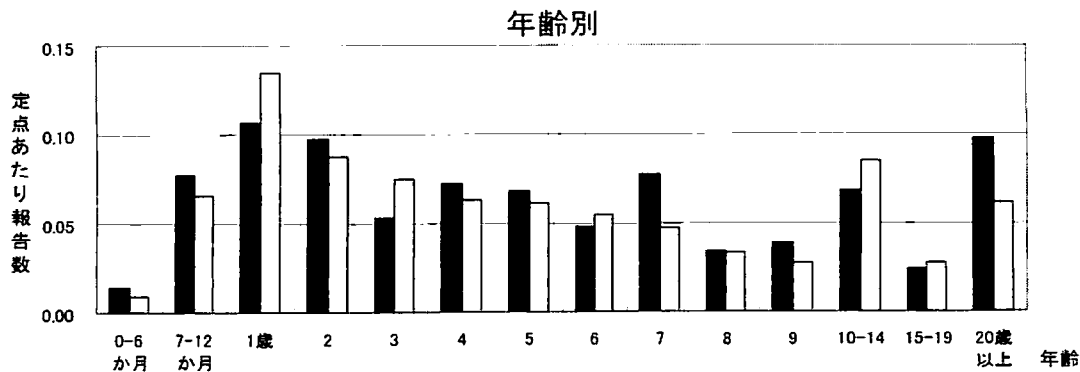
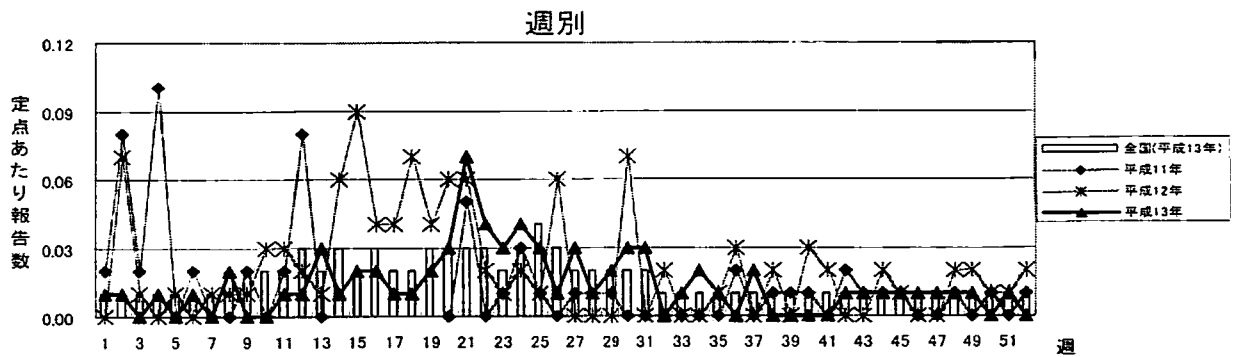
生がみられた。全国平均もほぼ同様に年間を通じて低い流行に推移していた。



風疹

平成13年の本疾患の大きな流行報告はなかったが、第21週に全国平均で定点あたり0.03であっ

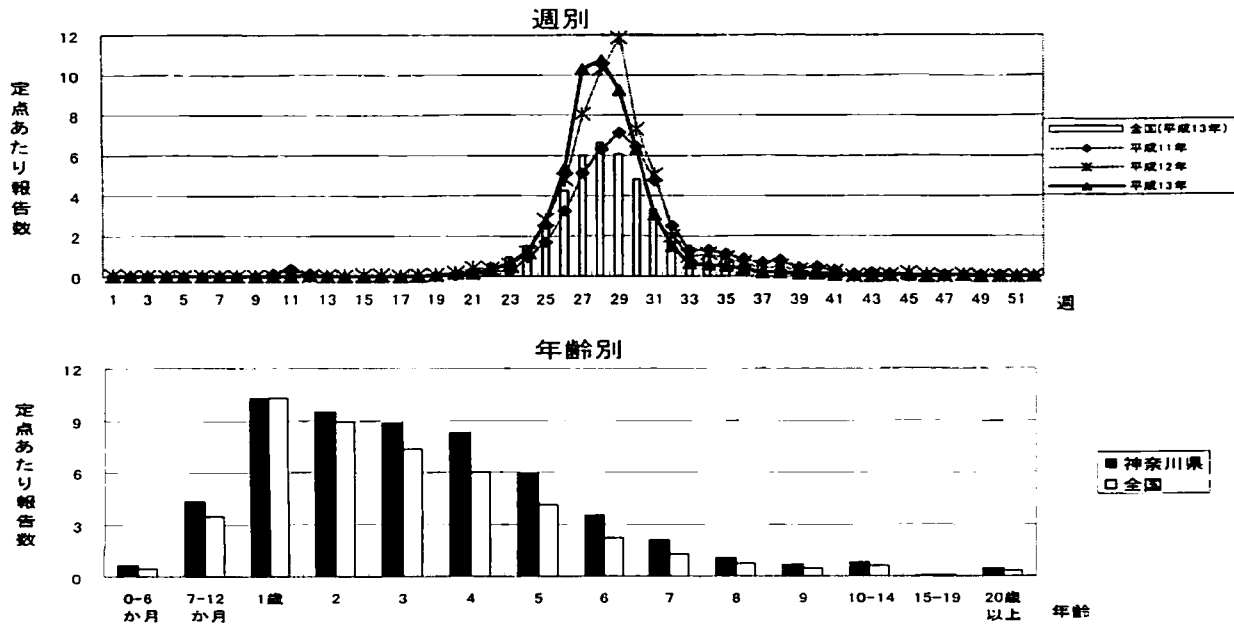
たに対して0.07と2倍強の報告がみられた。そのほかは目立った流行はみられなかった。



## ヘルパンギーナ

毎年夏場に大きな流行を繰り返す本疾患ではあるが、平成13年も前年同様大きな流行を引き起こした。全国平均が、第28週で定点あたり報告数が

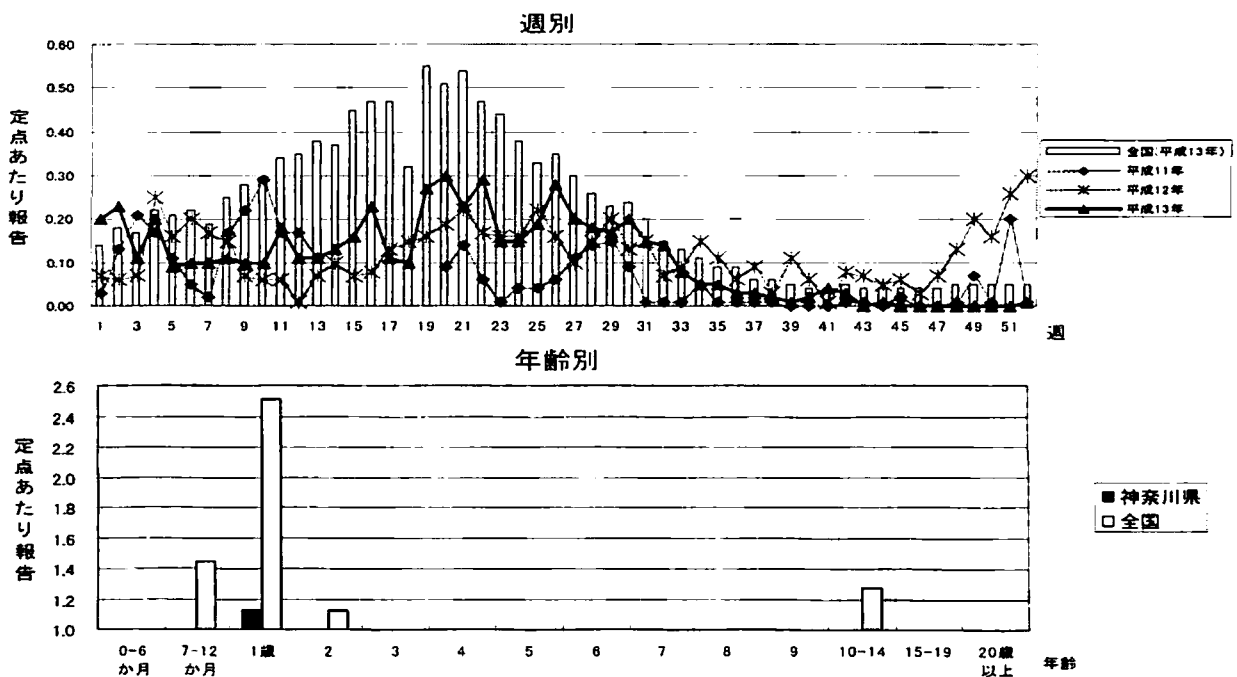
6であるのに対し、同じ週で10とほぼ倍近い流行が報告された。年齢別でみると、全国平均は年齢増加に従い漸減する傾向にあるが、4歳までほとんど減少がみられないのが特徴的であった。



## 麻疹（成人麻疹を除く）

昨年よりやや増加の傾向にあった本疾患は、平成13年に全国的にはかなり大きな流行があった。しかし神奈川県では、前年に比べてもさほど大きな流行はなかった。年齢別にみると全国の傾向で

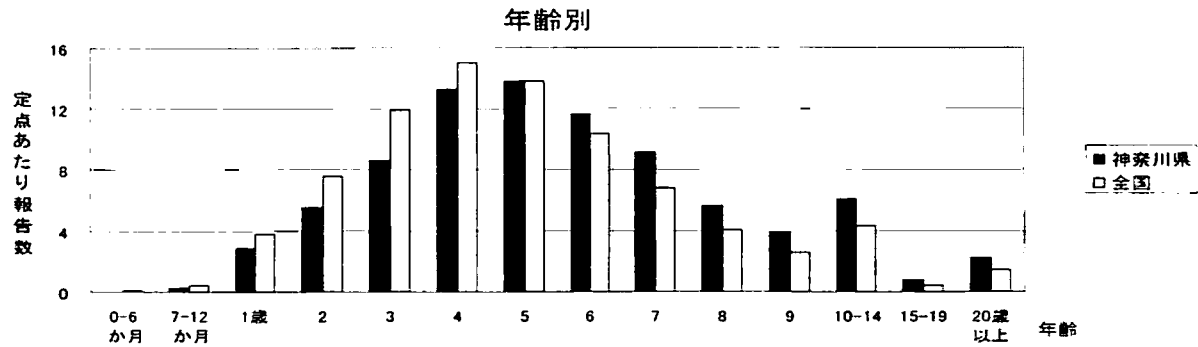
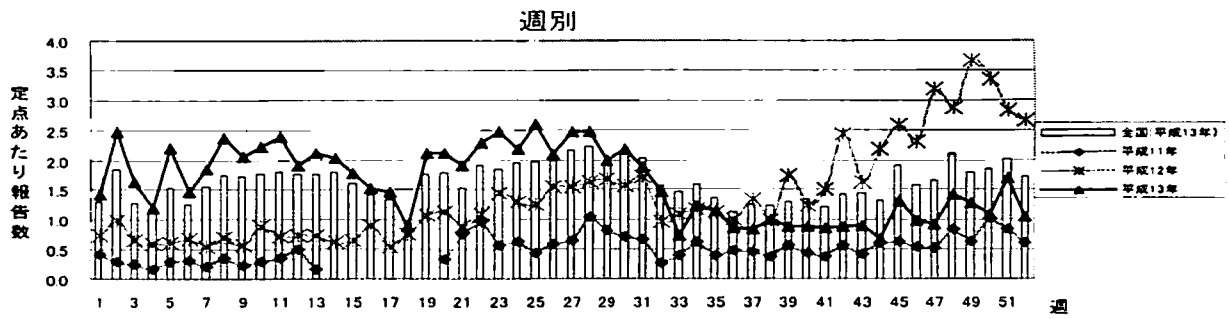
は1歳に集中しており、神奈川でも少ないながらこの年齢層に限定していた。神奈川県域では報告例はなかったが、全国で10～14歳の年齢層に報告例があったことに注目したい。



**流行性耳下腺炎**

平成12年晩秋から初冬にかけて流行の兆しがみられたが、13年に入ってから沈静化し、大きな

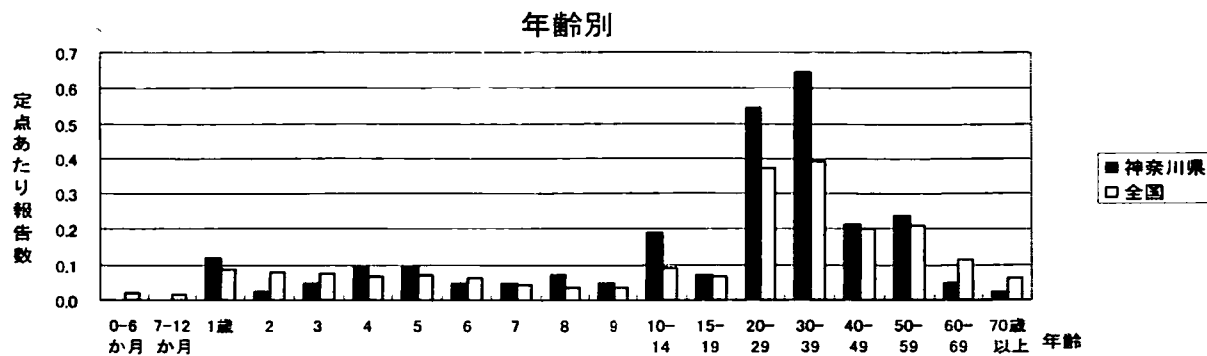
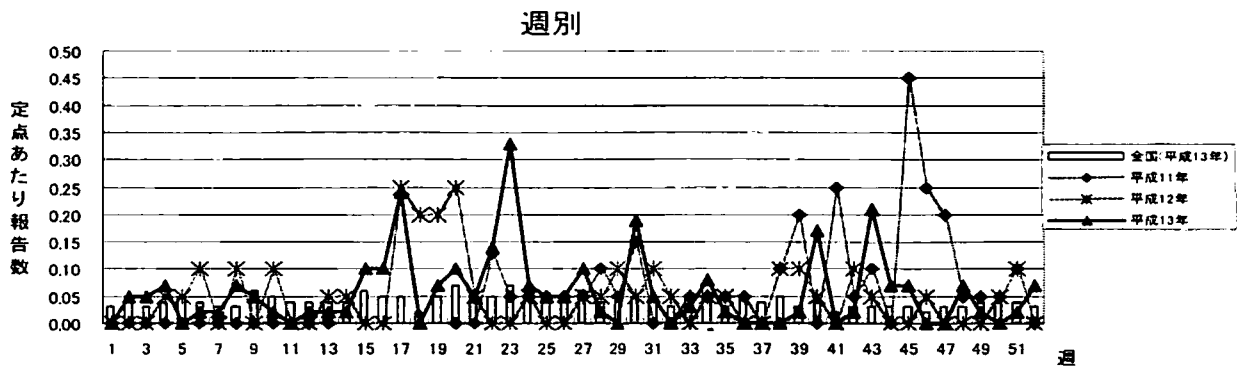
流行にはつながらなかった。年齢内訳は、ほぼ全国と同様4、5歳がピークであった。



**急性出血性結膜炎**

全国的にはほぼ沈静化していたが、本県では流

行としての報告ではなく、散発的な報告がみられた。年齢別では、成人での流行が特徴的である。



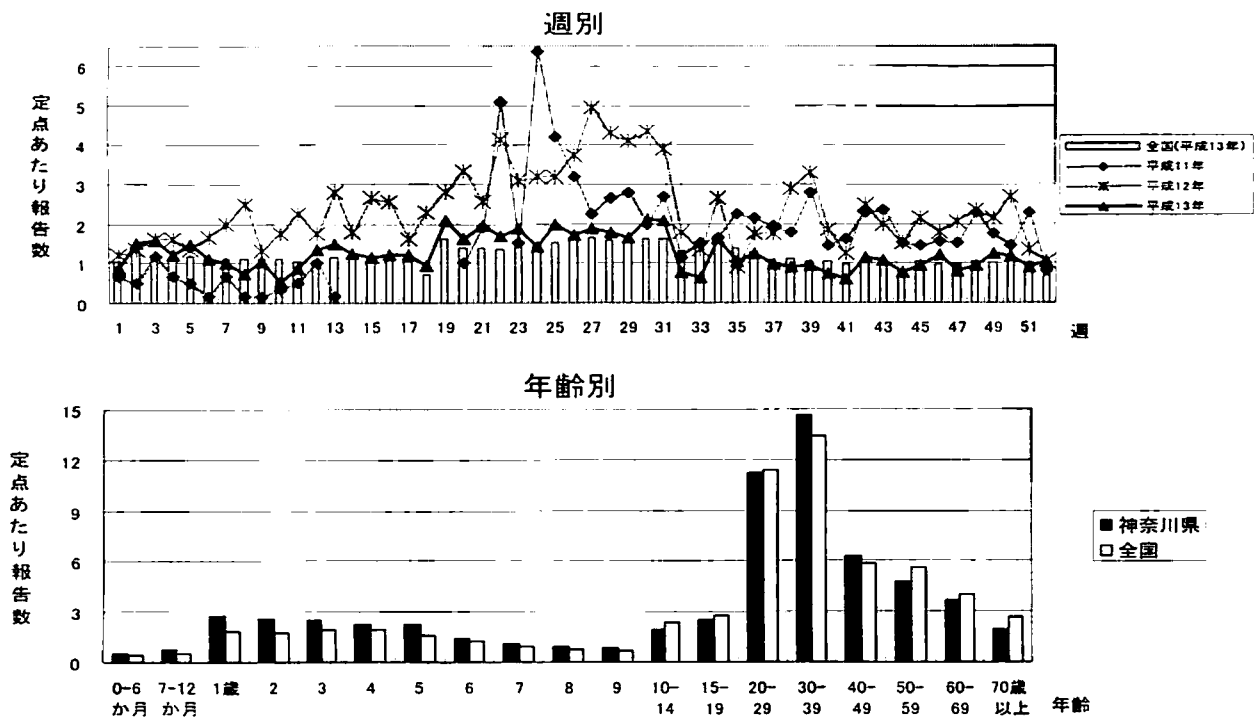
流行性角結膜炎

平成12年の流行に比べ13年は沈静化していた。

全国の発生数もほぼ低調に推移していた。年齢別

にみると20、30代に集中している傾向がみられ、

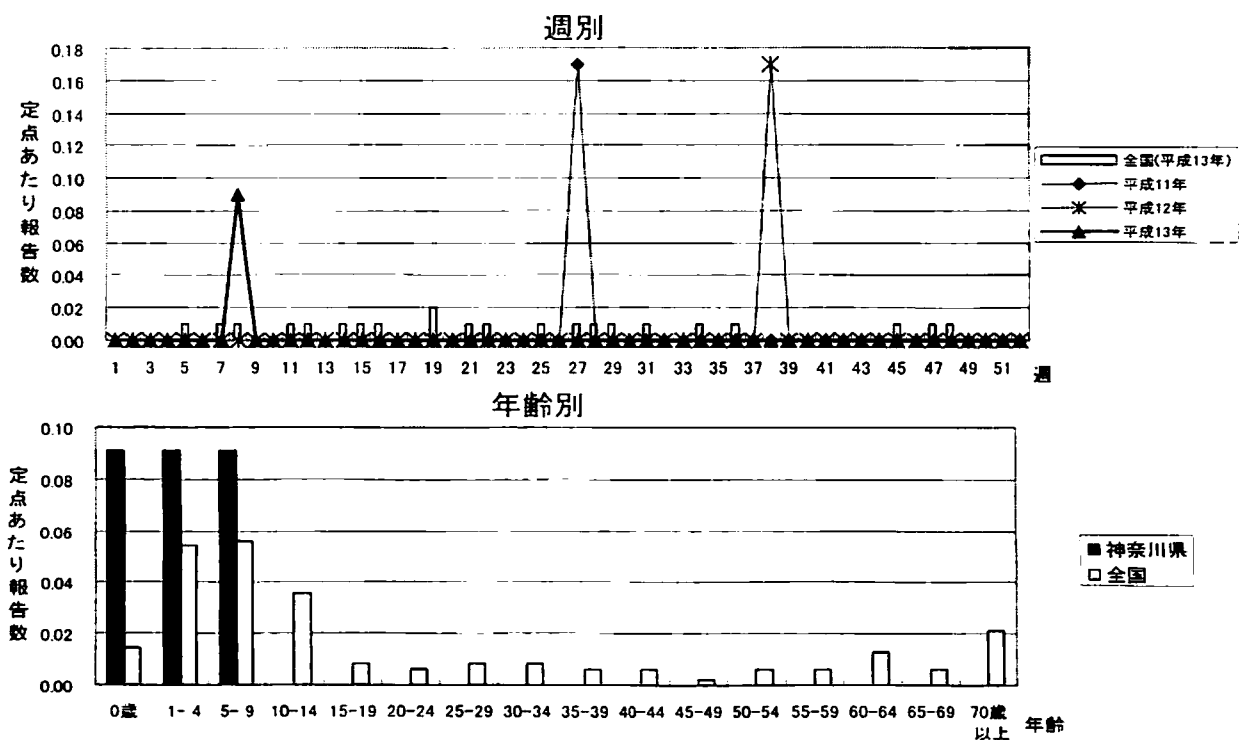
これは全国の傾向と同様であった。



急性脳炎（日本脳炎を除く）

本疾患の季節的な傾向はないが、散発的に集中する傾向は平成11年、12年に次いで同様であった。

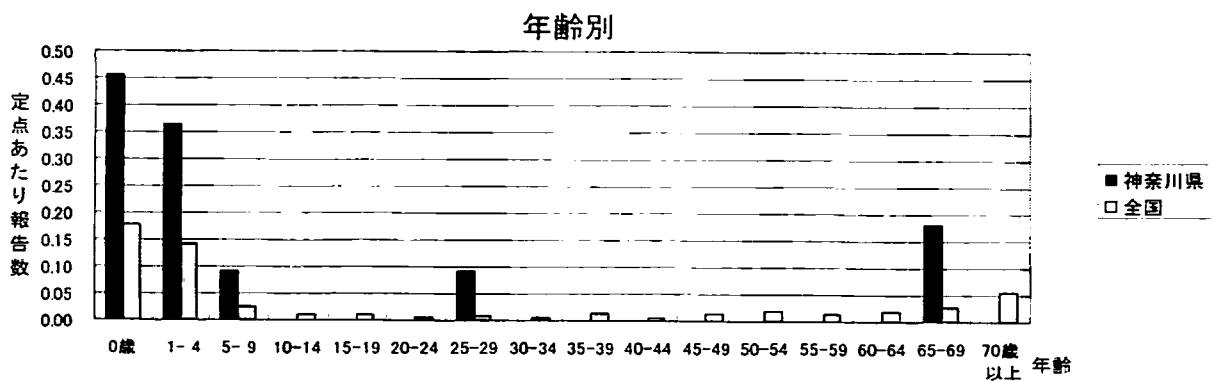
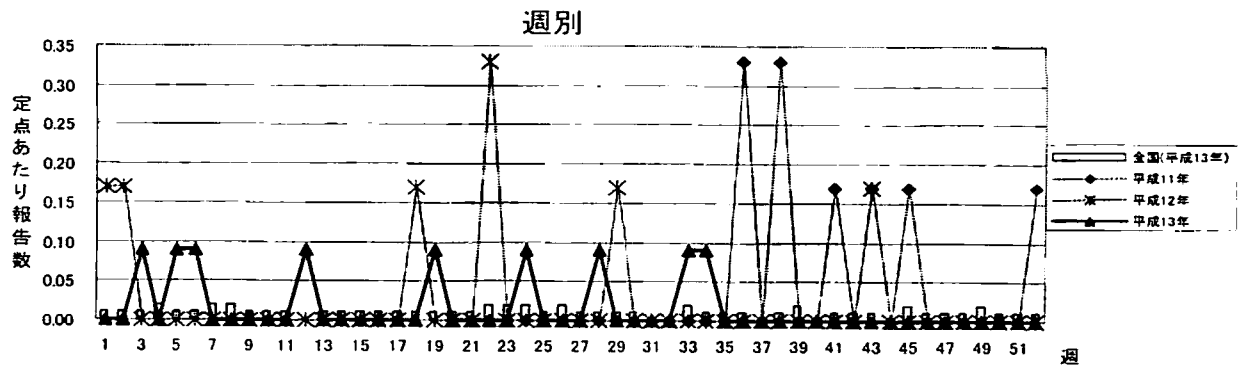
た。年齢的にも10歳未満に集中する傾向は、全国の傾向と同様であった。





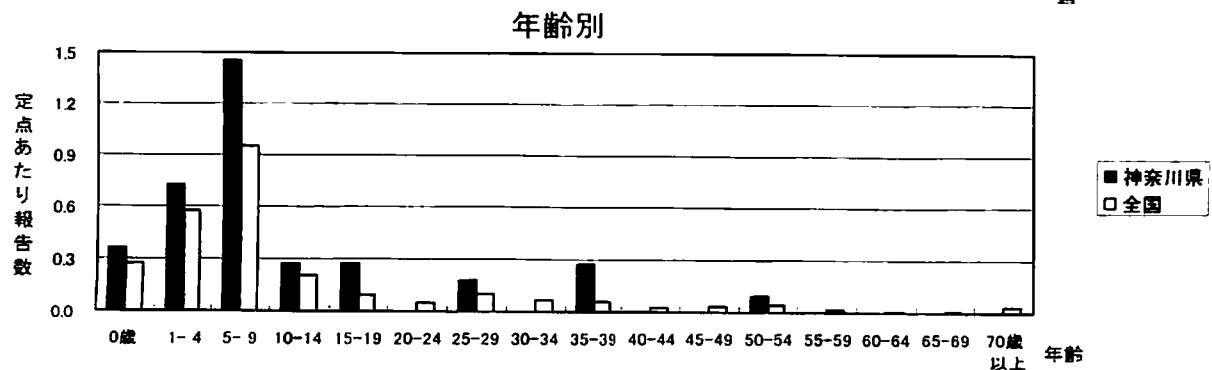
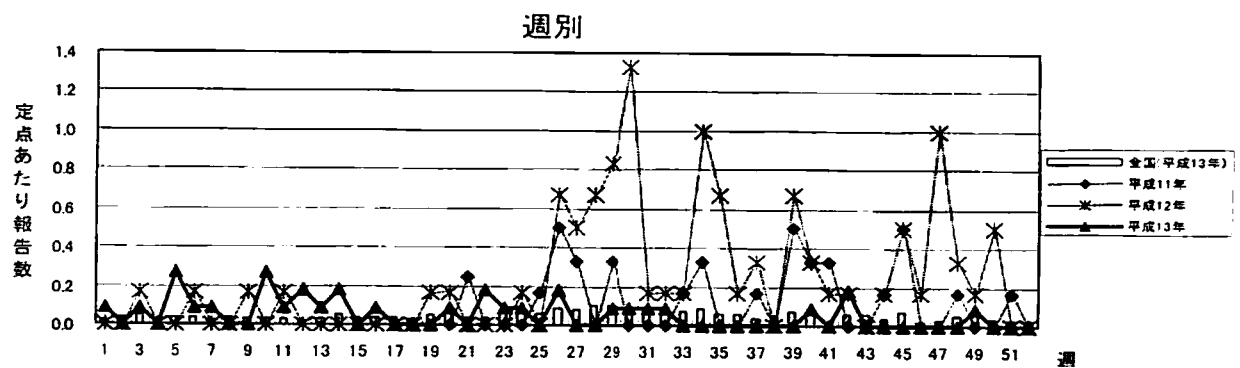
細菌性髄膜炎（真菌性を含む）  
平成12年同様年間を通じて発生し、全国的にも

同様の傾向がみられた。年齢的には、10歳未満と  
高年齢層に発生する傾向がみられた。



無菌性髄膜炎  
平成12年に大きな流行が報告されたが、13年

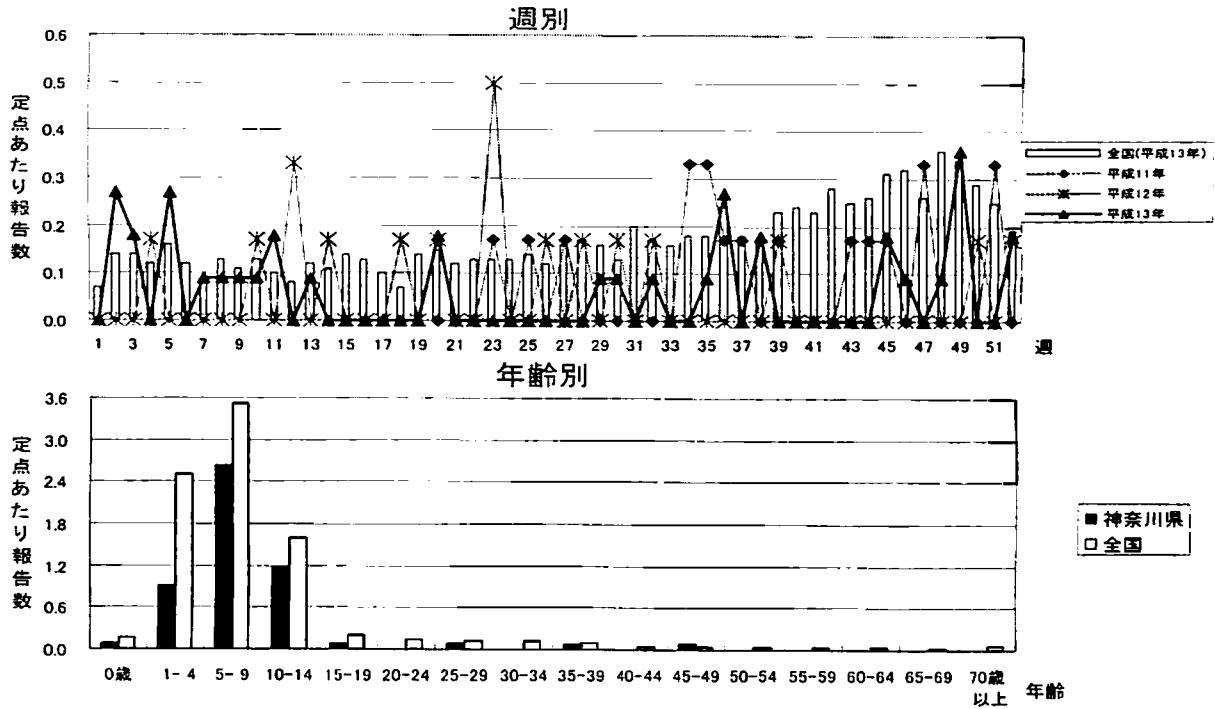
ではほぼ沈静化していた。年齢的傾向もほぼ全国  
の報告数と同様の傾向がみられた。



### マイコプラズマ肺炎

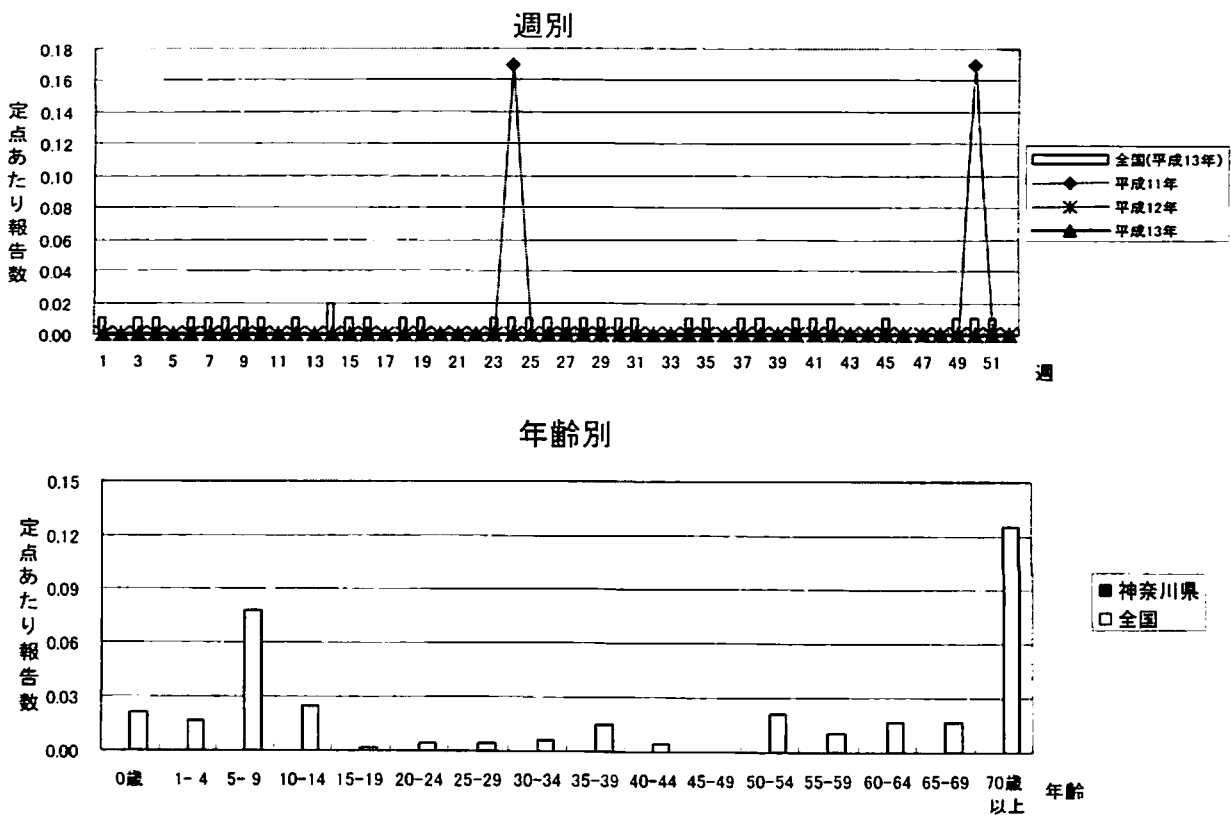
年間を通じて発生する疾患ではあるが、秋から初冬にかけて発生が増加する傾向は、平成13年も

同様であった。年齢的には若年層に多い傾向も全国と同様であった。



### クラミジア肺炎

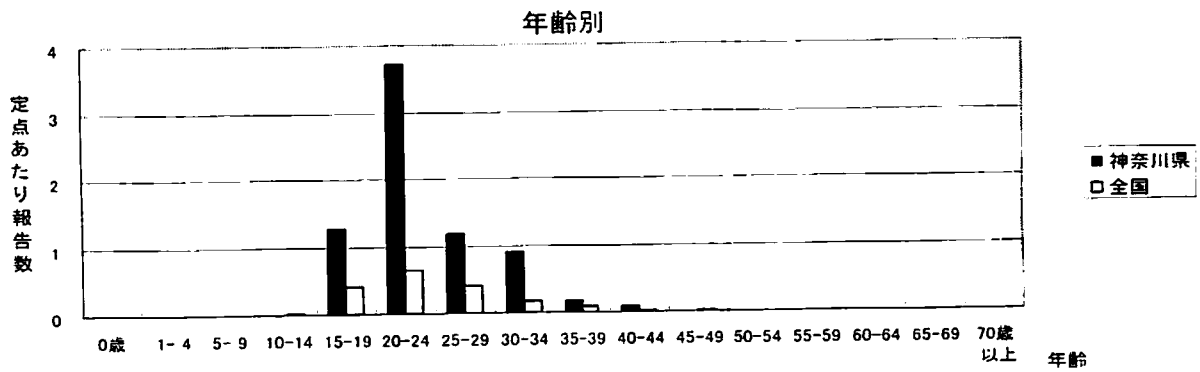
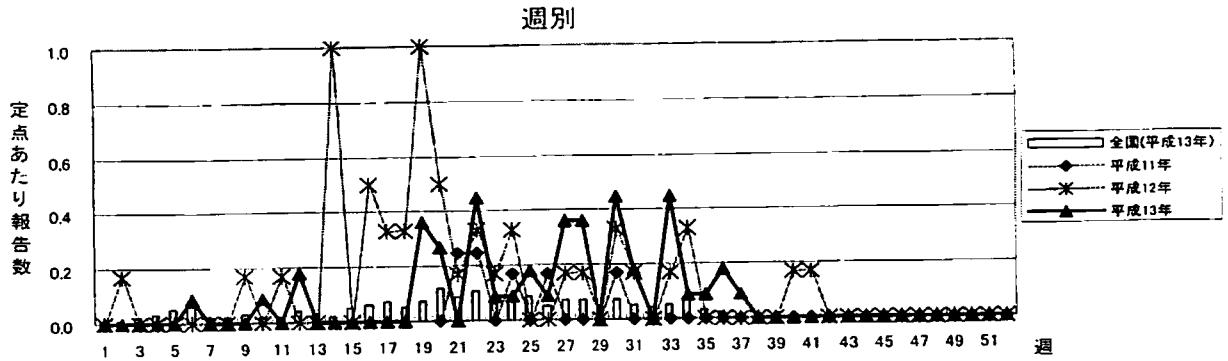
平成13年は県域での発生報告はなかった。



成人麻疹

幼児の麻疹発生のピークが第21週で徐々に減少する傾向にあるが、成人麻疹では31週までほぼ

同じ報告が行われている。県域での発生も9週から35週くらいまで散発ではあるが報告がみられた。年齢別にみると20～24歳に集中していた。



## 月報対象疾患

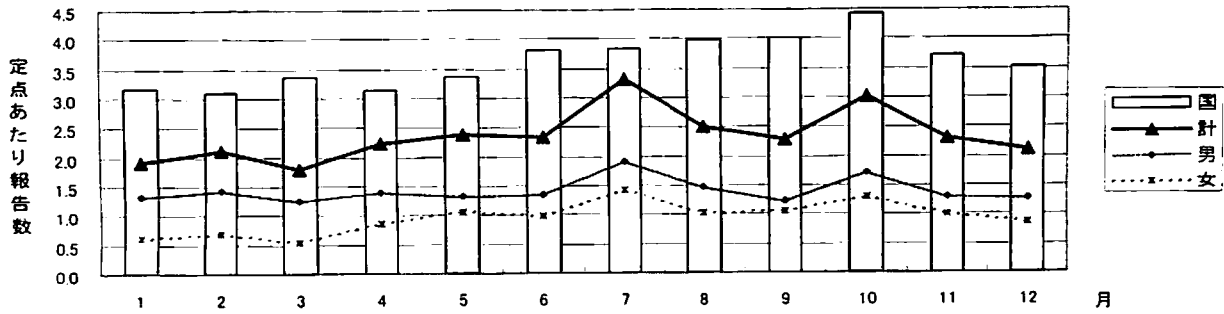
(横浜市・川崎市のデータを除く)

### 性器クラミジア

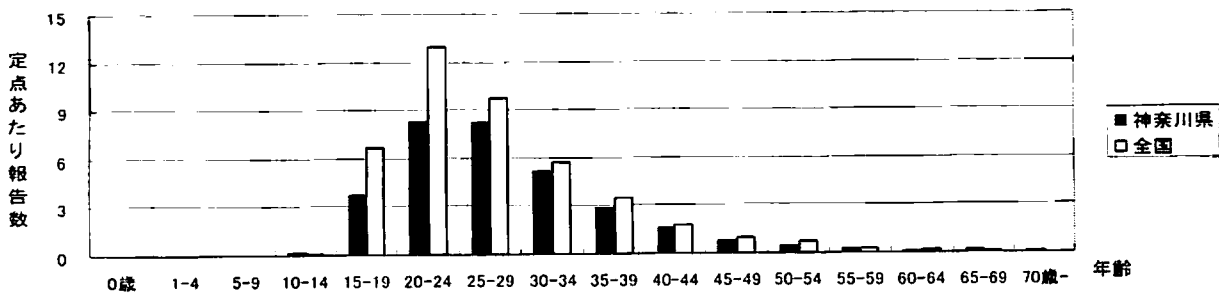
定点あたりの報告数では、平成12年に男性の報

告が多かったのに対し、13年は男女比が平準化する傾向にあった。季節変動は夏期に多い傾向にあった。年齢別にみても全国の傾向と同様、青年層に多い傾向であった。

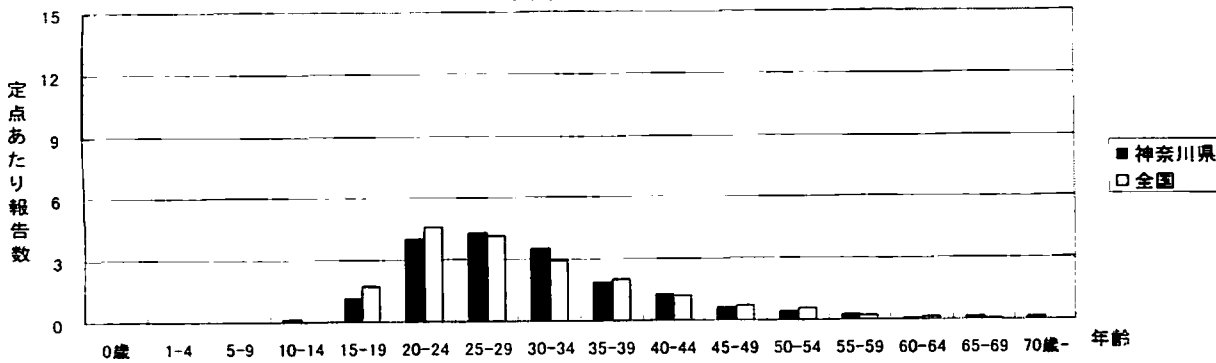
月別



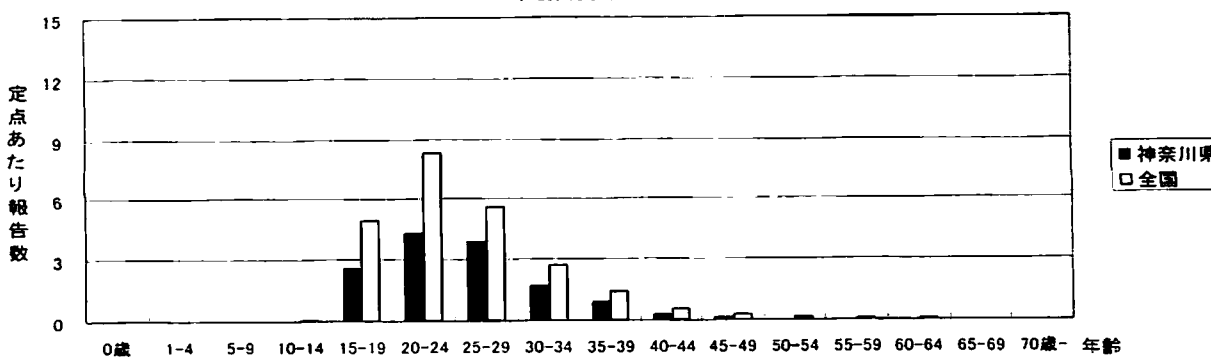
年齢別(男女合計)



年齢別(男)



年齢別(女)

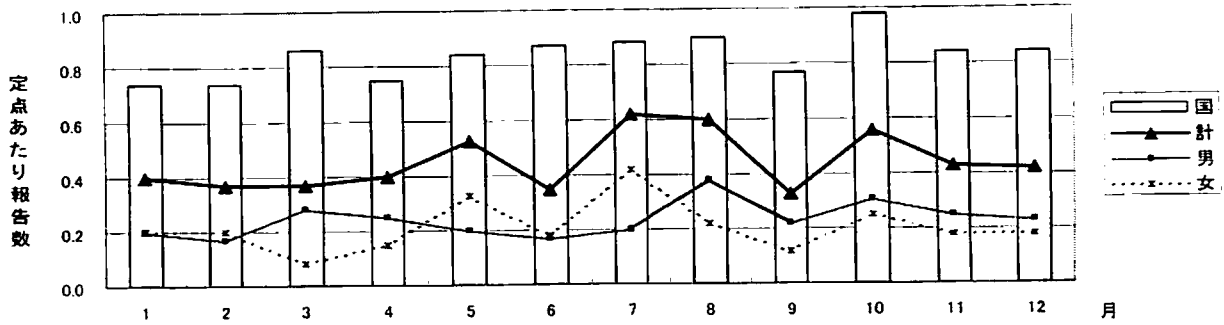


性器ヘルペスウイルス感染症

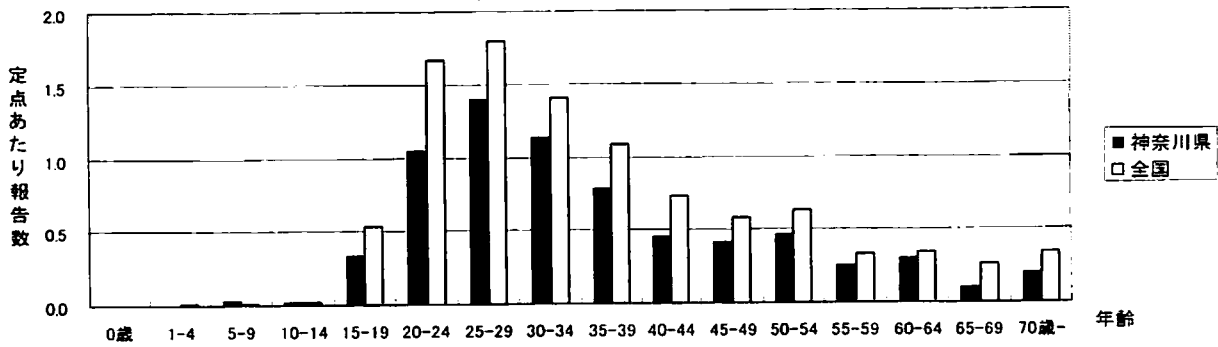
定点あたりの報告数を月別にみると6月と9月に若干の減少はあるものの、7月、8月に報告数

のピークがみられた。男女別では、大きな差はみられなかったが、年齢別に比較すると女性の年齢が、男性に比べて若年化している傾向がみられた。

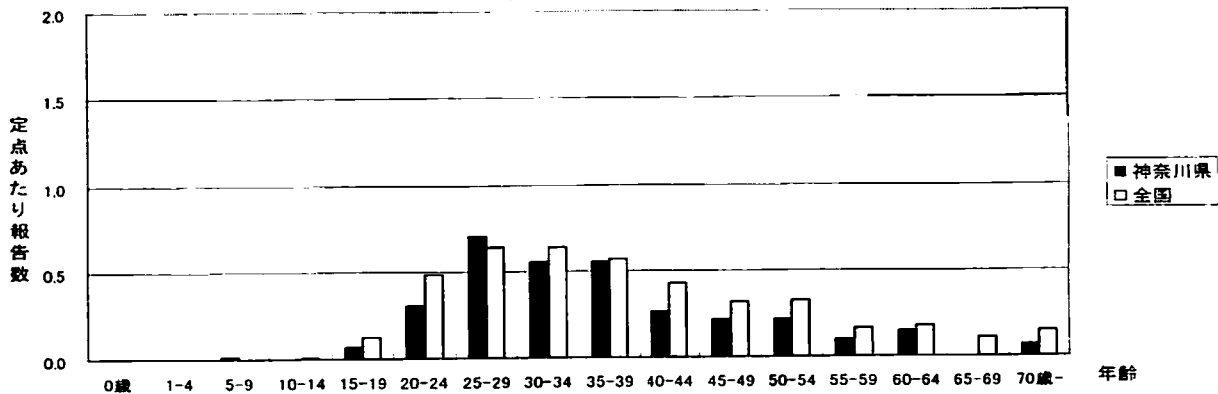
月別



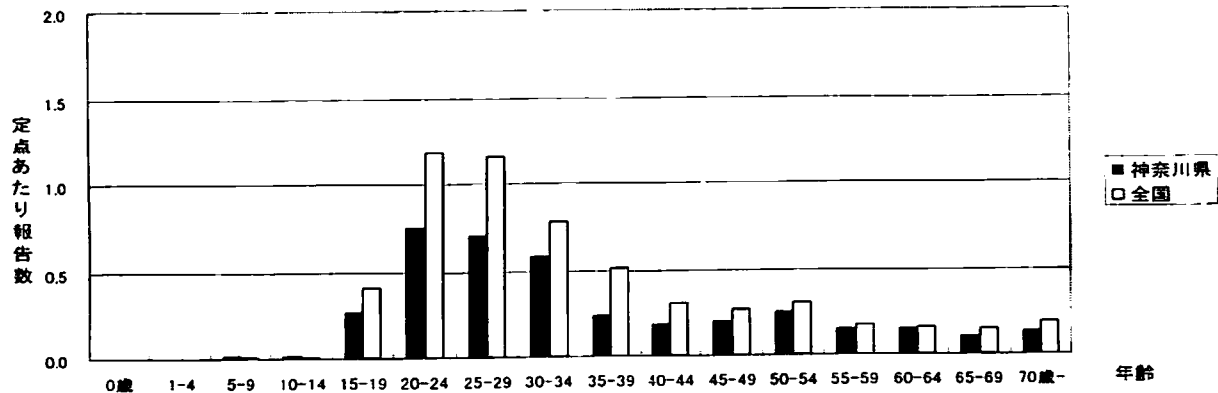
年齢別(男女合計)



年齢別(男)



年齢別(女)

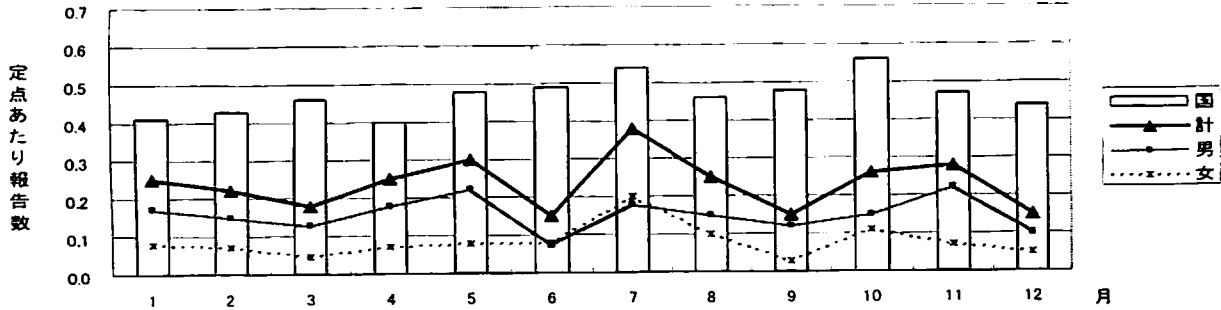


### 尖形コンジローム

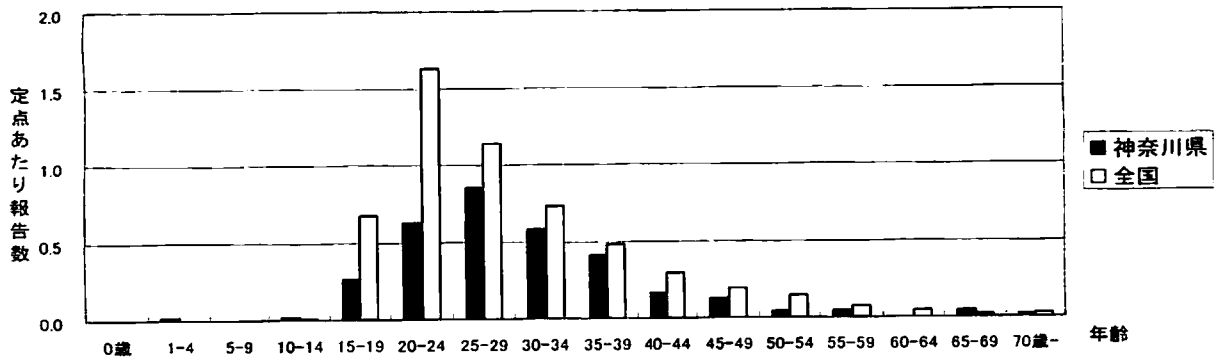
定点あたりの患者報告数を月別にみると年間を通じて大きな差はみられないが、男女別にみると、

ほぼ全体に男性が女性を上回っていることがわかった。年齢別では、女性で若年化が進み、15～19歳でも報告数が多くみられている。

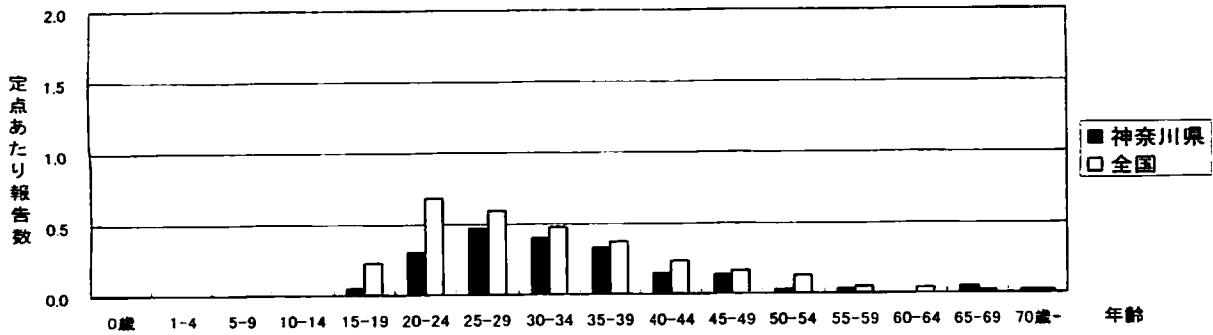
月別



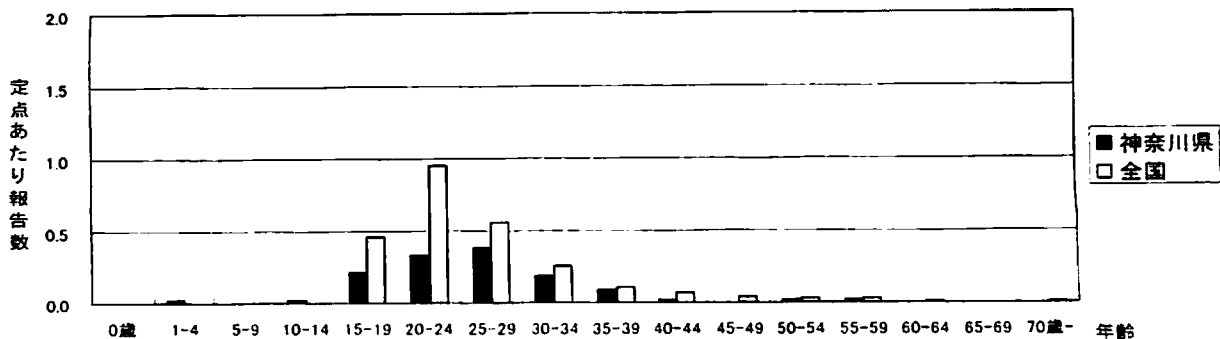
年齢別(男女合計)



年齢別(男)



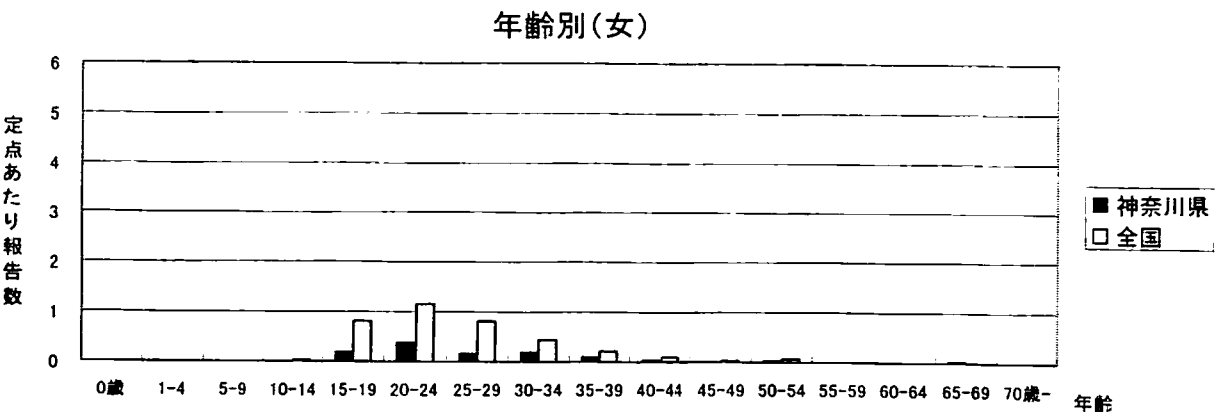
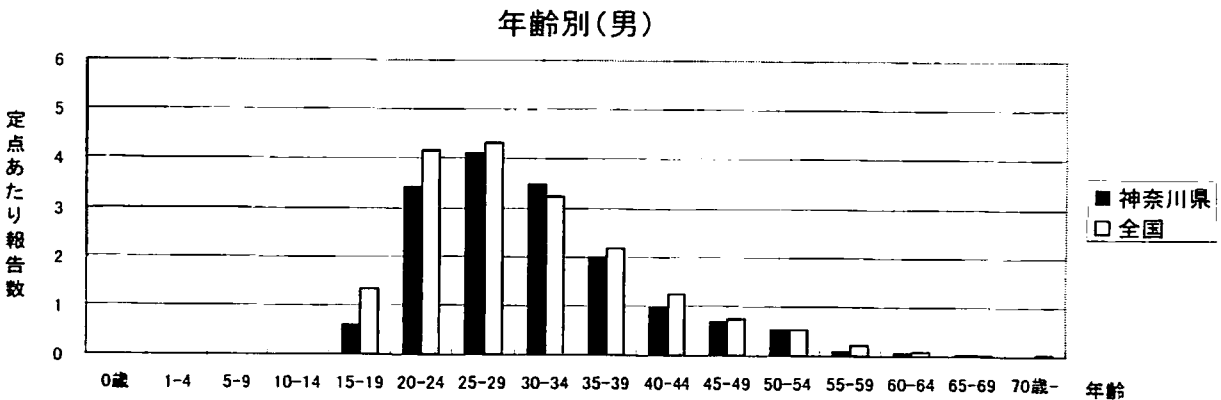
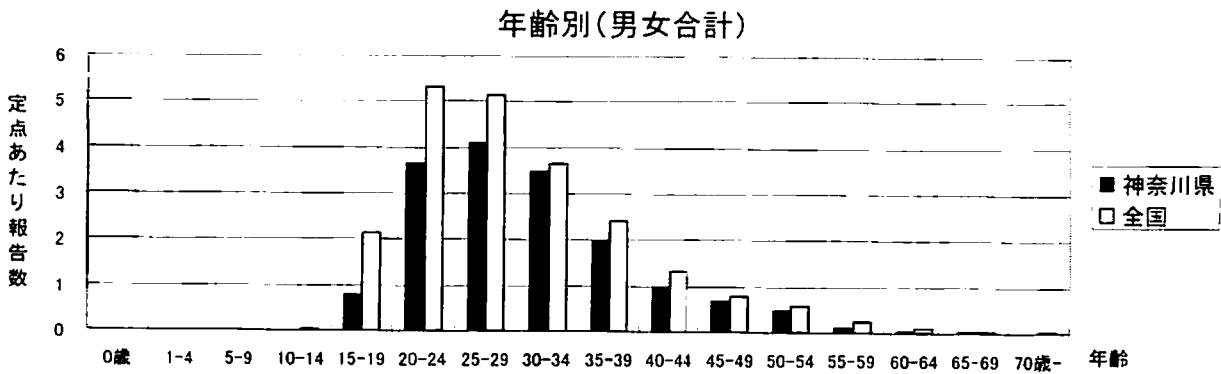
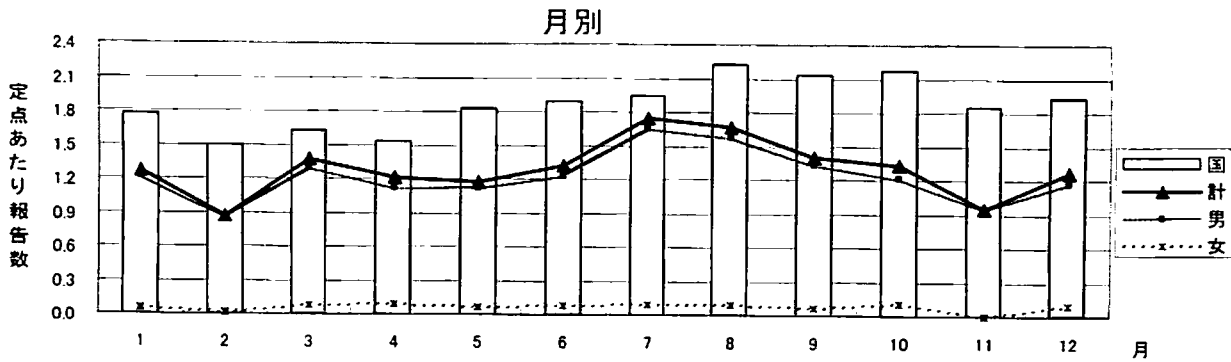
年齢別(女)



淋菌感染症

定点あたりの報告数を月別にみると通年ほぼ患者の発生が報告されている。男女別では、圧倒的

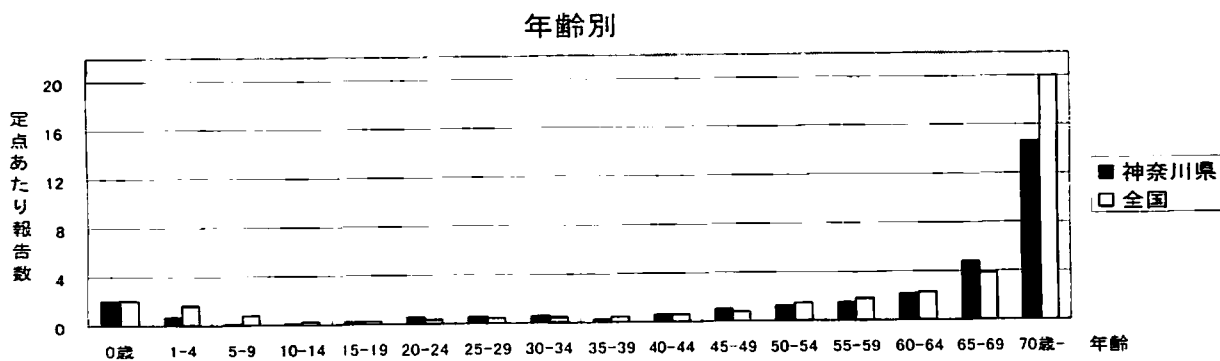
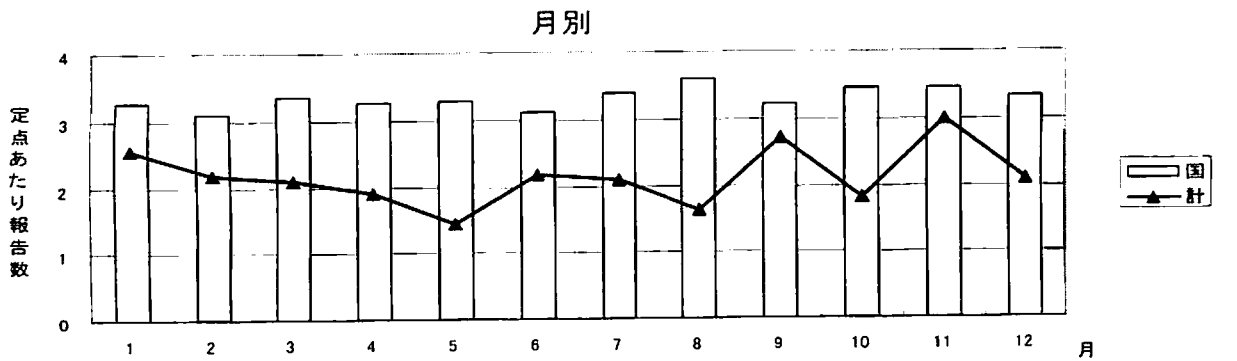
に男性患者の報告であり、女性の患者報告は非常に少ない傾向にあった。



メシチリン耐性ブドウ球菌感染症

定点あたりの患者報告数は、通年平均して報告

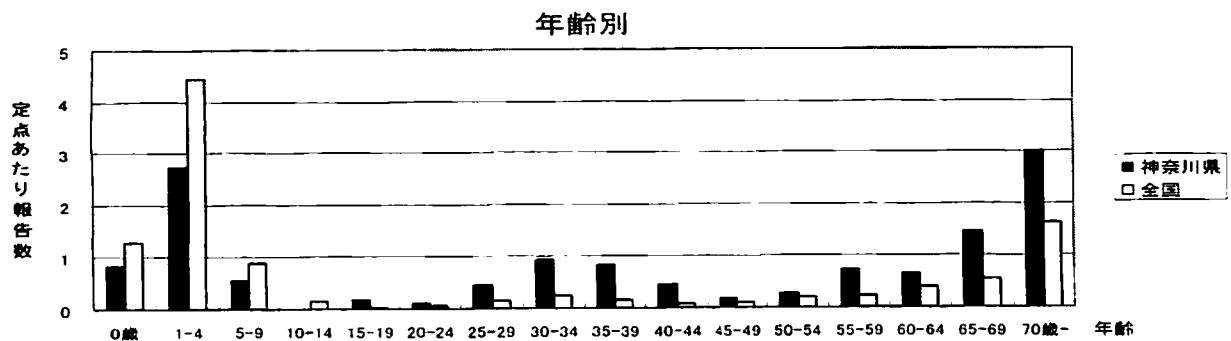
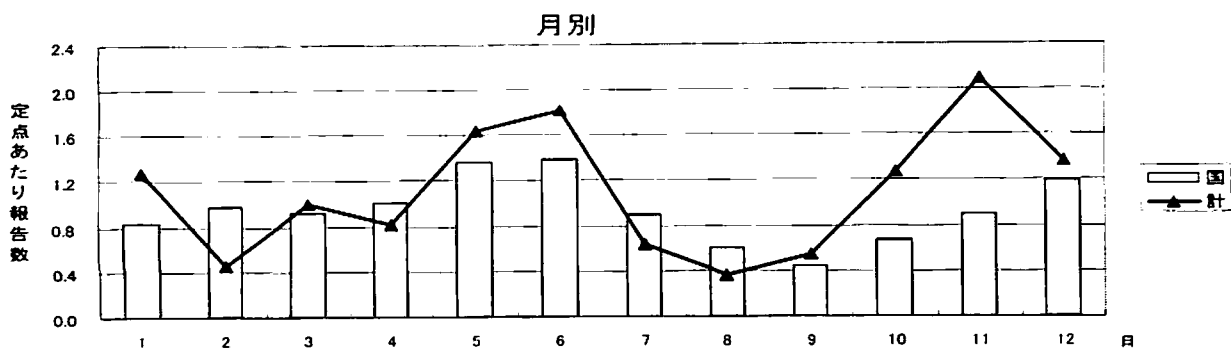
がみられた。年齢別では、ほぼ2極化が進み幼児と高齢に患者発生の報告が分かれていた。



ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

定点あたりの発生数を月別にみると5月、6月に一つのピークがみられ11月にもう一つのピーク

クがあった。この傾向は全国の報告数でも同様であった。全国の定点あたりの患者報告数に比べ県域の報告数では30代にも多い傾向にあった。

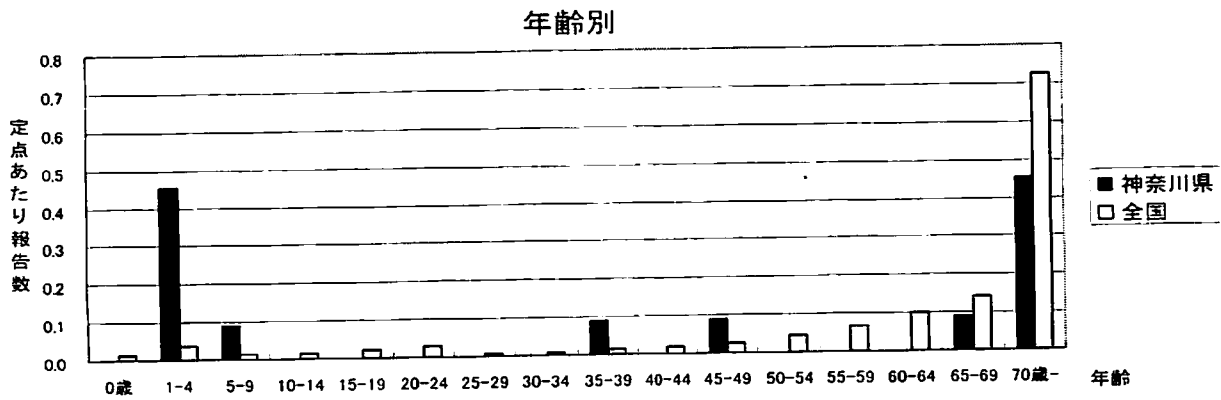
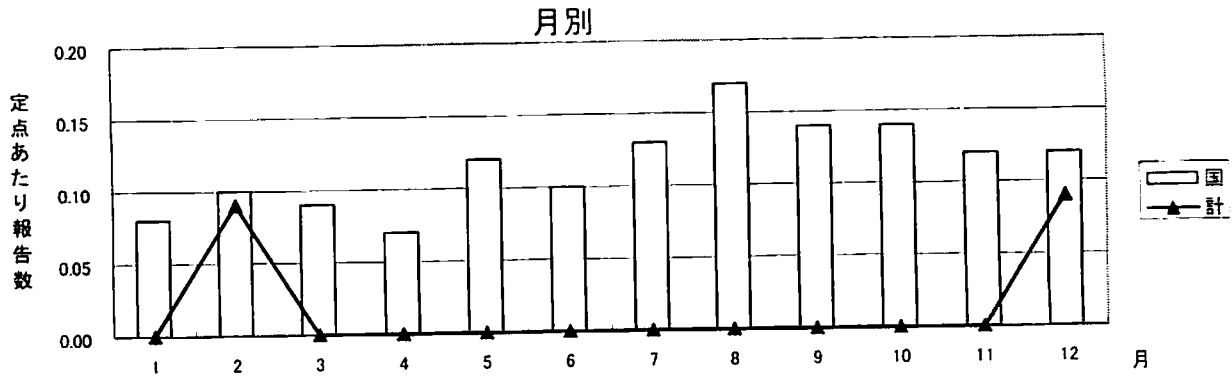




### 薬剤耐性緑膿菌感染症

定点あたりの発生数を月別にみると2月に一つのピークがみられ12月から上昇がみられた。年

齢別にみると全国では高齢者になるほど報告が増える傾向にあるが、県域では1～4歳の若年層も高齢者同様の報告数がみられた。



## II 細菌性感染症

## II 細菌性感染症

### 1 腸チフス・パラチフス

#### (1) 神奈川県内（横浜・川崎市を除く）のチフス菌等のフェージ型別結果

神奈川県衛生研究所

平成13年1～12月の間に分離されたチフス菌等は2件で、内訳は腸チフス患者から分離されたチフス菌1件、保菌者より分離されたパラチフスA菌1件であった（表）。

腸チフスまたはパラチフスAの発生地区と件数

表 分離されたチフス菌等のフェージ型別結果（平成13年）

番号	発生地区	月日	性別	年齢	分離菌株	フェージ型	備考
1	平塚	5月9日	男	81	パラチフス菌	4	渡航歴なし
2	相模原	12月26日	女	32	チフス菌	E 1	ベトナム・タイ・ネパール・インド旅行

は、相模原市および平塚保健所管内において各々1件で、分離菌株のフェージ型はチフス菌がE 1型、パラチフスA菌が4型であった。チフス菌は患者血液から分離され、患者は発症前に東南アジア地域への渡航歴があった。パラチフスA菌は保菌者の尿より分離され、患者の渡航歴はなかった。昨年分離された、患者由来のチフス菌は、CP、TC、SM、ABPC および SXT の5薬剤耐性1株、ABPC耐性2株であったが、本年の患者由来株はCP、KM、TC、SM、ABPC、NOR および ST 合剤の7薬剤すべてに感受性であった。

（鈴木理恵子 沖津 忠行）

#### (2) 横浜市の腸チフス菌等のフェージ型別結果

横浜市衛生研究所

平成13年1月～12月の間に横浜市内で分離されたチフス菌は2件で、パラチフスA菌は1件分離された。3件とも海外旅行歴のある患者で、旅

行先はパプアニューギニア、ミャンマー、インドネシアであった。患者情報とチフス菌のフェージ型別内訳は表に示したとおりである。全て静脈血からの検出事例であった。

（武藤 哲典、山田三紀子、松本 裕子）

表 チフス菌等のフェージ型

番号	診定年月	性別	年齢	菌種	フェージ型	備考
1	13. 7	男	35	チフス菌	D 2	パプアニューギニア
2	13. 10	男	22	チフス菌	43	ミャンマー
3	13. 10	男	35	パラチフス菌	UT	インドネシア

#### (3) 川崎市のチフス菌等のフェージ型別結果

川崎市衛生研究所

平成13年1～12月に川崎市内で分離されたの

は腸チフス1件、パラチフス1件であり、詳細は、表に示したとおりである。

（小嶋 由香）

表 チフス菌等のフェージ型

番号	分離年月	性別	年齢	菌種	フェージ型	備考
1	4. 13	男	26	パラチフス菌	1	インドネシアからの留学生
2	8. 16	女	27	チフス菌	D 2	インドネシアへ旅行

## 2 その他の感染症

### (1) 横浜市における海外渡航者下痢症からの病原菌分離状況（平成 13 年）

横浜市衛生研究所

昭和 54 年以来海外渡航者による腸管系病原菌の持ち込みを調査する目的で、市内在住の海外渡航者とその家族を対象とした病原菌検索を行っている。今回は、平成 13 年 1 月から 12 月までの 1 年間に取扱った検体 30 件のうち、2 回以上検査した者および家族を除く 29 件の病原菌検査結果を報告する。

#### 1. 検査方法

各種病原菌の分離・同定検査は前年と同じ検査方法で、大腸菌のエンテロトキシン検索は逆受身ラテックス凝集法および PCR 法で行った。なお腸管病原性大腸菌は、血清型のための検査である。

## 2. 結果および考察

29 件中 1 件（3.4%）から *Plesiomonas shigelloides* が分離された。タイ、シンガポールへの旅行者で赤痢菌が検出された同行者であった。今年には毒素原性大腸菌、組織侵入性大腸菌、腸管病原性大腸菌、コレラ菌、腸炎ビブリオ、NAG ビブリオ、ビブリオ・ミミクス、赤痢菌、サルモネラ、エロモナスは検出されなかった。

以上の成績は実際に海外から持込まれていると予想される病原菌の一部に過ぎないと思われる。海外渡航者によってもたらされる腸管病原菌の国内における下痢症の流行への影響を考慮し、今後も検査を続けていきたい。

（山田三紀子、武藤 哲典、北爪 晴恵）  
（鈴木 正樹、松本 裕子）

表 1 海外渡航者からの腸関係病原菌検出状況（平成 13 年）

被 検 者	種別下痢現症者	下痢申告者	健 康 者	合 計
件 数	0	4	25	29
陽 性 者 数	0	1	0	1
毒素原性大腸菌	0	0	0	0
組織侵入性大腸菌	0	0	0	0
腸管病原性大腸菌	0	0	0	0
コレラ菌	0	0	0	0
腸炎ビブリオ	0	0	0	0
NAG ビブリオ	0	0	0	0
ビブリオ・ミミクス	0	0	0	0
赤痢菌	0	0	0	0
サルモネラ	0	0	0	0
カンピロバクター	0	0	0	0
プレジオモナス	0	1	0	1
エロモナス	0	0	0	0

(2) 散発下痢症からの病原菌分離状況について

神奈川県衛生研究所

神奈川県における感染症発生動向調査の一環として、県内小児科医院一般検査定点の外来患者を対象に、感染性下痢症が疑われる患者の便材料について腸管系病原菌の検索を行った。平成13年1～12月の間に実施した128件の直接培養法での検索結果を表に示した。

腸炎起炎菌として推定し得た症例および不確実ながらその疑いがある菌を検出した症例は、128症例中42症例(32.8%)であり、86症例(67.2%)は既知腸管系病原菌を検出できなかった。推定原因菌別の検出頻度は、腸管病原性大腸菌(EPEC): 30症例、クレブジエラ・オキシトーカ: 7症例、

カンピロバクター・ジェジュニ: 4症例、エロモナス・キャピエ: 2症例、サルモネラ(血清型Livingston)、エロモナス・ハイドロフィラおよびソブリア: 各1症例であった。

検出菌に占めるEPECの割合は昨年に続き本年も顕著に高率(65.2%)であった。EPECの主な血清型はO1、O25およびO6で各々14株、7株、3株であった。また、これら分離株の志賀毒素(Stx)遺伝子保持について検索したところ、いずれの株もStx遺伝子は保持していなかった。EPECは病原性の試験方法が未だ確立されておらず、分離菌株に関する病原因子の検索が必要であると思われる。

(沖津 忠行 鈴木理恵子)

表 散発下痢症における病原菌分離状況(平成13年)

推定原因菌	症例	(%)
腸管病原性大腸菌(EPEC)	30 <sup>abc</sup>	23.4
クレブジエラ・オキシトーカ	7 <sup>d</sup>	5.5
カンピロバクター・ジェジュニ	4 <sup>ab</sup>	3.1
エロモナス・キャピエ	2 <sup>cd</sup>	1.6
サルモネラ	1	0.8
エロモナス・ハイドロフィラ	1	0.8
エロモナス・ソブリア	1	0.8
不明	86	67.2

a, b, c, d: 同時検出各1例

(3) 相模原市内小学校における腸管出血性大腸菌（O157:H7）感染症の集団発生例

相模原市衛生試験所

平成13年5月末～6月にかけて、市内A小学校6年児童に腸管出血性大腸菌（O157:H7）感染症の集団発生がみられた。

6年生は5月25～27日にN市へ修学旅行に行き、28・29日は代休、30日から6月1日にかけて欠席者が増加したとのことであった。他学年の欠席状況は通常と変わらなかったことから、相模原市保健所において6年生178名について発症状況調査をしたところ、有症者は82名（腹痛・下痢・血便・発熱等）で、そのうち6名が入院した。

発症者82名について検便を実施したところ、24名からO157:H7（VT1・VT2陽性）が分離され、症状のなかった児童、教師及び添乗員105名の検便では12名からO157:H7（VT1・VT2陽性）が分離された。

また、O157の感染が確認された児童の家族303名について検便を実施したところ、2名からO157:H7（VT1・VT2陽性）が分離され、合計38名の感染者が確認された。

発生が小学校児童であったことから、6年生が

食べた5月21～24日の給食の検食56検体、給食施設のふきとり10検体についてO157の検索を行ったが、全て陰性であった。

修学旅行中に発症者が見られたことから、修学旅行先のT県に調査を依頼したところ、ホテルの検食53検体、施設ふきとり（調理場及び器具機材等）19検体は、すべてO157陰性であったが、従業員の検便9名のうち2名からO157が分離されたとの報告があった。

市内A小学校児童から分離されたO157:H7について、国立感染症研究所にDNA解析を依頼したところ、T県の従業員から分離されたO157と同一パターンが得られた。

このことから、今回の集団発生は修学旅行先のホテルで感染した可能性が考えられた。

また、感染した児童の家族検便でO157が分離されたことから、家庭内での二次感染が起こったものと考えられた。

なお、相模原市保健所では、事件発生から約1ヵ月後の6月28日までに患者等38名の除菌を確認した。

（清水寿美子、田向 香織）  
（山本 陽子、小野 彰）

#### (4) 淋菌の薬剤感受性について

神奈川県衛生研究所

平成13年1月から12月の期間に淋菌感染症患者から分離された淋菌91株について薬剤感受性を調査した。

##### 1 調査対象

県内の医療機関で分離され、薬剤感受性調査のため分与を受けた57株、県単独事業で行っている発生動向調査事業で収集された34株、合わせて91株を対象とした。

##### 2 検査方法

薬剤感受性の調査は、NCCLS (National Committee for Clinical Laboratory Standards) の方法に基づき寒天平板希釈法で行った。使用薬剤は、PCG、CXM、CFIX、CTRX、NFLX、CPFX、SPFX、TC、SPCMの9薬剤とした。

##### 3 結果とまとめ

各薬剤に対する測定結果を集計し、薬剤感受性値をMICで表し、耐性値、耐性率を表に示した。なお、耐性値の判定は、NCCLSの基準に従い、SPFXは記載がないためCPFXの値を参考に $\geq 1 \mu\text{g}/\text{ml}$ とした。

今回の調査では、使用した薬剤全てに感受性を

示した株は20株で全体の22%であった。他の71株(78%)については1~7剤に耐性があり、6剤(PCG、CXM、NFLX、CPFX、SPFX、TC)耐性株は23株(25%)と最も多かった。また、性感染症学会(1999年)で淋菌性尿道炎の第1選択剤として推奨しているCFIX、CTRX、SPCMの内、CFIXに耐性を示す株を初めて4株検出した。この株は全てPCG、CXM、NFLX、CPFX、SPFX、TCにも耐性を示した。さらに、耐性値の一段階低い濃度であるMIC  $0.25 \mu\text{g}/\text{ml}$ を示す株が26株(29%)あり、今後MICの動向が注目される。なお、CTRXは推奨されているが国内では淋菌の適応薬剤ではないため、使用頻度は少ないと推察される。SPCMは、国内で1986年に1例の耐性株の報告があるもののMICに大きな変動はない。PCGについては、 $\beta$ ラクタマーゼ産生淋菌は数年間0~1株の検出であったが、4株検出された(4%)。ニューキノロン系薬剤のNFLX、CPFX、SPFXいずれかに耐性の株は、71株(78%)を示した。TCでは、プラスミッド性高度耐性株(MIC:  $\geq 16 \mu\text{g}/\text{ml}$ )が4株検出された。淋菌は急激に多剤耐性化が進んでおり今後とも耐性菌の動向については継続的な監視が必要と考えられる。

(渡辺 祐子、浅井 良夫)

表 薬剤感受性測定結果

単位: $\mu\text{g}/\text{ml}$						
薬剤	範囲	MIC <sup>50</sup>	MIC <sup>90</sup>	NCCLS 耐性値	耐性率	
PCG	0.031 ~ 64	2	4	$\geq 2$	66%	
CXM	0.063 ~ 32	1	16	$\geq 4$	38%	
CFIX	$\leq 0.008$ ~ 0.5	0.031	0.25	$\geq 0.5$	4%	
CTRX	$\leq 0.016$ ~ 0.125	0.031	0.125	$\geq 0.5$		
NFLX	0.016 ~ 128	32	128	$\geq 1$	78%	
CPFX	0.008 ~ 64	4	64	$\geq 1$	65%	
SPFX	0.008 ~ 32	2	16	( $\geq 1$ )	54%	
TC	0.031 ~ 32	2	4	$\geq 2$	57%	
SPCM	4 ~ 32	8	16	$\geq 128$		

(5) 川崎市の下痢症患者からの腸管病原菌検出状況（平成 13 年）

川崎市衛生研究所

川崎市内の開業医師依頼の下痢症患者を対象にして腸管系病原菌検査を実施しているが、今回は平成 13 年 1 ～ 12 月までの検査成績について報告する。

1. 材料と検査方法

材料は、市内医療機関に Cary - Blair の輸送培地を配布し、医療機関を訪れた下痢症患者から大便を採取し、保健所を経由して搬入された検体について検査を行った。

検査方法は、既報と同様に行った。

2. 結果及び考察

1) 病原菌検出状況

病原菌検出状況は表 1 に示すとおり、検体数 668 件中腸管病原菌陽性数 80 件（12.0%）であり、そのうち赤痢菌 1 件（0.1%）、サルモネラ 10 件（1.5%）、腸管病原性大腸菌（EPEC）7 件（1.0%）、腸管出血性大腸菌（EHEC）2 件（0.3%）、腸炎ビブリオ 10 件（1.5%）、カンピロバクター・ジェジュニ 48 件（7.2%）、ナグビブリオ 1 件（0.1%）、エロモナス・ソブリア 1 件（0.1%）、プレシオモナス・シゲロイデス 1 件（0.1%）、の検出であり、検出病原菌のうちカンピロバクター・ジェジュニ

が 60.0% を占め、下痢症患者の主要病原菌であった。同一患者から 2 菌種の病原菌が検出された事例は 1 事例みられた。

2) 検出病原菌の血清型

検出病原菌の血清型は表 2 に示すとおりである。

サルモネラは 10 株分離され、5 血清型に型別された。*S. Infantis* が 4 株、*S. Enteritidis* 3 株、*S. Thompson*、*S. Newport*、*S. Braenderup* がそれぞれ 1 株ずつであった。EPEC は 3 血清型に型別され、O126 が 5 株、O26、O55 がそれぞれ 1 株ずつであった。EHEC は O157:H7 が 1 株と O111 が 1 株であり、毒素型は、O157 が VT 2 単独産生株、O111 が VT 1 単独産生株であった。

腸炎ビブリオは 10 株分離され、2 抗原型に型別され、O3:K6 が 9 株、O4:K8 が 1 株であり、分離菌株の耐熱性溶血毒はすべて陽性であった。

以上のように本市内の下痢症患者から腸管系病原菌が 12.0% 検出され、カンピロバクター・ジェジュニが 7.2% と最も多く検出され、検出病原菌の 60.0% を占めた。その他の食中毒菌も低率ながら分離されていることから今後も細菌性下痢症の原因菌追求のため検査を強化していく必要があると思われる。

（小嶋 由香、須藤 始代）  
（赤木 英則、小川 正之）



表1 散発下痢症患者からの病原菌検出状況（平成13年）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
検体数	52	51	56	57	42	63	69	54	66	47	60	51	668
陽性数	4	2	5	7	2	7*	11	13	9	9	7	4	80*
(%)	(7.7)	(3.9)	(8.9)	(12.3)	(4.8)	(11.1)	(15.9)	(24.1)	(13.6)	(19.1)	(11.7)	(7.8)	(12.0)
赤痢菌				1									1(0.1)
サルモネラ	1			2		1*	1	1	2	2			10(1.5)*
腸管病原性大腸菌	1		2		1	1		1	1				7(1.0)
腸管出血性大腸菌			1			1							2(0.3)
腸炎ビブリオ							2	5	2	1			10(1.5)
カンピロバクター・ジェジュニ	2	2	2	4	1	5*	8	4	4	6	6	4	48(7.2)*
ナグビブリオ								1					1(0.1)
エロモナス・ソブリア								1					1(0.1)
プレシオモナス・シゲロイデス											1		1(0.1)

備考：\*印は、同一人から2菌種の病原菌が検出された事例（1事例）

表2 検出病原菌の血清型（平成13年）

病原菌	株数	菌種および血清型
赤痢菌	1	<i>S. sonnei</i> (1)
サルモネラ	10	<i>S. Infantis</i> (4)、 <i>S. Enteritidis</i> (3)、 <i>S. Thompson</i> (1)、 <i>S. Newport</i> (1)、 <i>S. Braenderup</i> (1)
腸管病原性大腸菌	7	O126 (5)、O26 (1)、O55 (1)
腸管出血性大腸菌	2	O157:H7 (1)、(VT2)、O111:H-(VT1)
腸炎ビブリオ	10	O3:K6 (9)、O4:K8 (1)

(6) 横須賀市の散発下痢症からの腸管系病原菌  
検出状況

横須賀市衛生試験所

昨年に引続き本市では、市内各医療機関の下痢・腹痛を主症状とする患者糞便及び菌株材料について、既知腸管系病原菌の検索を行った。今回は、平成13年1月から13年12月までの検査結果について報告する。

1. 材料と方法

材料は糞便材料72件、菌株材料64件の合計136件である。検査方法は定法により従来どおり行った。

2. 結果

病原菌検出状況は表1に示すとおり、被検者数は136件、陽性例は34件(25.0%)であった。内訳は、腸管出血性大腸菌(EHEC) O157が12株、次いで腸管病原性大腸菌(EPEC)が9株、

毒素原性大腸菌(ETEC)が6株、EHEC O157以外が5株、プレジオモナス・シゲロイデスが2株、赤痢菌とカンピロバクターが各々1株であった。検出病原菌の血清型は表2に示すとおりである。赤痢菌は*S.flexneri* 3aが1株、EHECはO157:H7が11株、O26:H11が4株、O157:NM及びO26:NMが各々1株、ETECはO25:NMが4株、O6:H16及びO27:H7が各々1株、またEPECはO126:H27及びO128:H12が各々3株、O26:NM、O55:H7及びO126:NMが各々1株であった。

以上、今回の調査では、昨年同様EHECとEPECの検出例は多く、また、重篤な病気の原因菌とされるEHECについては最も多い検出例を示した。今後ともEHECを始め他の種々腸管系病原菌について引続き検査を行っていく予定です。

( 蛭田 徳昭、山口 純子 )  
( 片倉 孝子、増山 亨 )

表1 散発下痢症からの病原菌検出状況(平成13年1月~13年12月)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
検体件数	10(0)	13(0)	12(4)*	7(2)	13(1)*	5(0)	12(1)	42(0)	4(1)	13(4)	3(0)	2(0)	136+(0)*
陽性数	2(0)	3(0)	4(3)*	2(0)	2(1)*	0	3(0)	13(0)	1(1)	3(1)	0	1(0)	34(6)*
(%)	(20.0)	(23.1)	(33.3)	(28.6)	(15.4)	(0.0)	(25.0)	(31.0)	(25.0)	(23.1)	(0.0)	(50.0)	(25.0)
病原菌													
赤痢菌											1(1)		1(1)
サルモネラ													
腸管出血性大腸菌 O157	1(0)	2(0)					2(0)	7(0)					12(0)
” O157以外								5(0)					5(0)
毒素原性大腸菌			3(3)*		1(1)*		1(0)		1(1)				6(5)*
腸管病原性大腸菌	1(0)	1(0)	1(0)	2(0)	1(0)			1(0)		1(0)		1(0)	9(0)
腸炎ピブリオ													
プレジオモナス・シゲロイデス			1(1)*		1(1)*								2(2)*
カンピロバクター・ジェジュニ/コリ										1(0)			1(0)

備考：+印の内訳(菌株64件、糞便72件)

\*印は、同一人からの複数金、複数血清型検出例(2例)

( )は海外渡航者由来

表2 検出病原菌の血清型（平成13年1月～13年12月）

病原菌	株数	菌種および血清型
赤痢菌	(1)	<i>S. flexneri</i> 3a (1)
腸管出血性大腸菌 O157	(12)	O157 : H7 (11)、O157 : NM (1)
” O157以外	(5)	O26 : H11 (4)、O26 : NM (1)
毒素原性大腸菌	(6)	O6 : H16 (1)、O25 : NM (4)、O27 : H7 (1)
腸管病原性大腸菌	(9)	O26 : NM (1)、O55 : H7 (1)、O126 : NM (1)、O126 : H27 (3)、 O128 : H12 (3)

備考：( ) は菌株数

### (7) 河川水腸管系病原菌調査

神奈川県衛生研究所

昭和54年度より行われてきたコレラ菌を対象とした河川水の定点調査は、コレラ菌の防疫措置に関する変更（昭和63年厚生省通知）にともない平成元年より河川水腸管系病原菌調査として実施されている。本稿では平成13年1月から12月までの調査成績について報告する。

#### 1. 材料および方法

県内（政令三市所管区域を除く）の一級および二級河川の河口等の10調査地点において、毎月1回定期的に河川水を採取し、以下の腸管系病原菌の検索を行った。

検索対象菌種は、コレラ菌 O1.O139、チフス菌、パラチフス A 菌、赤痢菌、腸管出血性大腸菌の2類および3類感染症原因菌とサルモネラ、*Vibrio cholerae* nonO1,O139 および厚生省指定の食中毒菌としたが、4月以降は調査事業の変更に伴い食中毒菌を対象菌種から除外した。

1月から3月は、河川水500mlを7,000rpm / 20min 遠心分離後、沈渣を10mlに再浮遊したものを検水とし、各増菌培地10mlに検水1mlを接種し培養した。4月以降は各増菌培地50mlごとに河川水500mlを濾過したメンブランフィルターを接種し培養した。また、赤痢菌およびエルシニアの検索は

再浮遊液を分離培地に直接塗抹し、腸管出血性大腸菌 O157 は37℃ 8時間増菌後、免疫磁気ビーズ法を用い分離を行った。各病原菌の検索方法の概要と調査項目（対象菌）ごとに使用した増菌および分離培地を表1に示した。分離培地上に発育した疑わしい集落は、各々の病原菌に応じた確認試験を行い、生化学的性状、血清学的性状および毒素産生性等を確認し、菌種および菌型を同定した。

#### 2. 結果および考察

河川水120検体からの病原菌分離状況を表2に示した。本調査期間中、2類および3類感染症原因菌は分離されなかったが、コレラ毒素非産生コレラ菌 O1 が1検体（0.8%）より分離された。

*V.cholerae* nonO1.O139 は、66検体（55.0%）から分離され、調査期間中全定点から検出された。

チフス菌およびパラチフス A 菌以外のサルモネラは24検体（20.0%）から25株分離され、主な血清型は Typhimurium（3株）、Infantis（3株）であった（表3）。

本年の調査では、防疫措置の対象となる菌種は分離されなかったが、年間を通して腸管系病原菌による経常的な汚染が認められることから、河川水の衛生状態の的確な把握と監視を継続していく必要があると思われる。

（鈴木理恵子、佐多 辰）

表1 調査項目および使用培地

調査項目	増菌培地	分離培地
1. コレラ菌 O1,O139	アルカリ性ペプトン水	TCBS・PMT SS・DHL
2. <i>Vibrio cholerae</i> nonO1,O139		
3. <i>Vibrio mimicus</i>		
4. <i>Aeromonas hydrophila/sobria</i>		
5. <i>Plesiomonas shigelloides</i>		
6. チフス菌	セレナイトシスチン	SS・BS
7. パラチフス A 菌		
8. <i>Salmonella</i>	ハーナ・テトラチオン酸塩基礎培地	DHL・BG
9. 腸管出血性大腸菌 (O157)	Buffered peptone Water (8hr, IMS 法)	CT - SMAC
10. 病原血清型大腸菌	EC 培地	DHL
11. 腸炎ビブリオ	4%NaCl 加アルカリ性ペプトン水	TCBS・VA
12. <i>Vibrio fluvialis/furnissii</i>		
13. <i>Campylobacter jejuni/coli</i>	プレストン	Skirrow
14. 赤痢菌	(遠心沈渣を直接塗抹)	SS・DHL
15. <i>Yersinia enterocolitica</i>	(遠心沈渣を直接塗抹)	CIN

表2 腸管系病原菌検出状況 (平成 13 年)

2001 年 1 月～ 12 月

検出菌	月												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
コレラ菌 O1,O139	0	0	0	0	0	0	0	1*	0	0	0	0	1
チフス菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
パラチフス菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
赤痢菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
腸管出血性大腸菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
<i>Vibrio cholerae</i> nonO1,O139	5	0	2	5	3	7	9	8	9	9	5	4	66
腸炎ビブリオ	0	0	0	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	0
<i>Vibrio mimicus</i>	0	1	0	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	1
<i>Vibrio fluvialis/furnissii</i>	1	1	0	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	2
<i>Aeromonas hydrophila/sobria</i>	9	8	8	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	25
<i>Plesiomonas shigelloides</i>	1	2	0	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	3
<i>Salmonella</i>	0	0	0	1	2	3	4	2	2	3	4	3	24
<i>Campylobacter jejuni/coli</i>	0	0	0	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	0
<i>Yersinia enterocolitica</i>	0	0	0	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	0
病原血清型大腸菌	4	2	1	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	7

\*：エルトール小川型、コレラ毒素非産生

NT：検査未実施

表3 分離されたサルモネラの血清型

血 清 型	分離菌株数	血 清 型	分離菌株数
Agona	2	Ohio	1
Bareilly	1	Orion	1
Braenderup	1	Tennessee	1
Derby	2	Typhimurium	3
Haardt	1	O4 群	2
Hadar	1	O7 群	1
Infantis	3	O18 群	1
Manchester	1	O 群別不能	2
Newport	1		
		計	25

## 河川等の環境調査

### －腸管系病原菌検索－

横浜市衛生研究所

河川水の細菌学的定点観測は昭和53年より継続しており、現在は鶴見川水系が2定点、これ以外は各水系ともすべて1定点で計8定点において観測を行っている。検査対象菌はコレラ菌、コレラ菌O1以外、腸炎ビブリオ、赤痢菌、チフス菌およびパラチフス菌を含むサルモネラである。今回は平成13年1月から12月までの検査成績について報告する。

#### 1. 材料および方法

上記8定点の河川水、臨港鶴見川橋定点の底泥について毎月1回検体採取を行い、菌検索は従来と同様の方法で行った。

#### 2. 結果および考察

##### (1) 河川水からの病原菌の検出状況

河川水からの病原菌の検出状況を表1に示した。赤痢菌、チフス菌およびパラチフス菌は今年も、いずれの定点からも検出されなかったが、コレラ菌は6月に1定点から検出された。コレラ菌O1以外は、延べ57定点(59.4%)で検出され、例年とほぼ同様の検出率であった。チフス、パラチフス菌以外のサルモネラは延べ21定点(21.9%)で26菌種分離された。

##### (2) 定点別コレラ菌O1以外の検出状況

河川水および底泥中のコレラ菌O1以外の検出状況を表2、3に示した。各河川とも前年同様年間を通じて各調査地点で検出されている。底泥中のコレラ菌O1以外の菌数は、平成6年からと同様に年間を通しては低い値を示していたが、本年は2月に高い値を示した。

##### (3) 定点別腸炎ビブリオの検出状況

表4に示したとおり、底泥中の腸炎ビブリオは年間を通して検出された。また、河川水からの腸炎ビブリオも28定点より検出された。しかし、2月、3月は検出されなかった。

##### (4) 定点別サルモネラの検出状況

河川水からのサルモネラの検出状況を表5に示した。チフス菌およびパラチフス菌以外のサルモネラは、4月を除き年間を通じて、東西橋を除きいずれかの地点で検出された。検出されたサルモネラの血清型は表6に示した。O4群、O9群が多く特にS.Enteritidis(4株)、S.Saintpaul(5株)、S.Typhimurium(3株)が多く分離された。

河川の環境調査は、今後の問題として病原菌の分離だけでなく、患者からの病原菌分離状況等の情報と併せて流行菌型の予測、集団発生の予測、また患者および保菌者の追跡等の疫学的な解析が必要である。

( 武藤 哲典 松本 裕子 山田三紀子 )  
( 鈴木 正樹 北爪 晴恵 )

表1 河川水からの病原菌検出状況（平成13年）

病原菌	月												計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
赤痢菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
コレラ菌	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
コレラ菌O1以外	3	2	2	2	5	7	8	8	7	7	3	3	57	
腸炎ビブリオ	1	0	0	3	5	3	3	5	2	2	3	1	28	
サルモネラ														
チフス菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
パラチフス菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
その他	1	1	4	0	1	5	2	6	2	2	1	1	26	

表2 河川水中のコレラ菌O1以外（平成13年）

採取地点	月											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 臨港鶴見川橋	+	+	+	-	-	-	+	+	+	+	+	-
2. 川向橋	-	-	-	+	-	+	+	+	+	-	+	+
3. 水道橋	-	+	-	-	+	+	+	+	+	+	-	+
4. 清水橋	-	-	+	-	+	+	+	+	+	+	-	+
5. 小泉橋	+	-	-	-	+	+	+	+	+	+	-	-
6. 侍従橋	+	-	-	-	-	+	+	+	+	+	-	-
7. 鷹匠橋	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	-
8. 東西橋	-	-	-	-	+	+	+	+	-	+	-	-

表3 臨港鶴見川橋底泥中のコレラ菌O1以外のMPN（平成13年）

採取地点	月											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
コレラ菌O1以外	2.3	79	<0.2	3.3	<0.2	2	2	22	11	<0.2	<0.2	<0.2

(個/100ml)

表4 河川水中および底泥中の腸炎ビブリオ (平成13年)

採取地点	月											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 臨港鶴見川橋	+(+)	-(+)	-(+)	+(+)	+(+)	+(+)	+(+)	+(+)	-(+)	+(+)	+(+)	-(+)
2. 川向橋	-	-	-	-	+	-	-	+	-	-	-	-
3. 水道橋	-	-	-	+	-	-	-	+	-	-	-	-
4. 清水橋	-	-	-	+	+	+	+	+	-	-	+	+
5. 小泉橋	-	-	-	-	+	-	+	-	-	+	+	-
6. 侍従橋	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-
7. 鷹匠橋	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-
8. 東西橋	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-

( ) 内は底泥中の腸炎ビブリオ

表5 河川水のサルモネラ (平成13年)

採取地点	月											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 臨港鶴見川橋	-	-	+	-	-	+	-	+	+	-	-	-
2. 川向橋	+	+	-	-	+	+	+	+	-	-	-	-
3. 水道橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+
4. 清水橋	-	-	+	-	-	-	-	+	-	-	+	-
5. 小泉橋	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-
6. 侍従橋	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-
7. 鷹匠橋	-	-	+	-	-	+	-	+	+	+	-	-
8. 東西橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

表6 分離されたサルモネラの血清型 (平成13年)

	血 清 型	分離菌株数
O 4 群	Saintpaul	5
	Typhimurum	3
	Schleissheim	1
	Tsevic	1
	Abony	1
	Paratyhi B	1
	UT	1
	O 7 群	Thompson
Braenderup		1
Infantis		1
Livingstone		1
O 8 群	Narashino	2
	Newport	2
O 9 群	Enteritidis	4
計		26

## 河川等の環境調査

### 一腸管系病原菌検索一

川崎市衛生研究所

本市では、昭和53年5月から河川等において、コレラ菌を中心に、赤痢菌、コレラ菌O1以外、腸炎ビブリオ、サルモネラ（腸・パラチフスを含む）、等の腸管系病原菌について定点観測を実施している。

また、平成11年からは、腸管出血性大腸菌検索も行っている。今回は平成13年の結果について報告する。

#### 1 定点及び検査方法

定点は、既報と同様に本市内の全域を把握する目的で、河川13ヶ所及び港湾1ヶ所を設定した。

検査方法は、既報と同様に行った。

#### 2 結果及び考察

##### (1) 病原菌検出状況

河川水及び海水からの病原菌検出状況は表1に示すとおり、総検体数168検体中、コレラ菌O1以外55検体（32.7%）、腸炎ビブリオ27検体（16.1%）、サルモネラは44検体（26.2%）より検出された。

赤痢菌、コレラ菌、腸チフス・パラチフス、腸管出血性大腸菌は検出されなかった。

##### (2) 定点別による病原菌検出状況

###### 1) コレラ菌O1以外

コレラ菌O1以外の検出状況は表2に示すとおり、河川水では156検体中55検体（35.3%）より検出された。また13定点全てより検出され、夏期に多く検出された。海水からは検出されなかった。

###### 2) 腸炎ビブリオ

腸炎ビブリオの検出状況は表3に示すとおり、河川水156検体中19検体（12.2%）、海水12検体中8検体（66.7%）より検出された。夏期に多く検出され、河川水では、河口付近より多く検出された。

###### 3) サルモネラ

サルモネラの検出状況は表4に示すとおり、河川水156検体44検体（28.2%）より検出された。海水からは検出されなかった。

##### (3) 検出病原菌の血清型

検出病原菌の血清型は表5に示すとおり、腸炎ビブリオは27株分離され、4K抗原型に型別されたが、型別不能株が22株（81.5%）で最も多く検出された。分離菌株の耐熱性溶血毒はすべて陰性であった。サルモネラは45株、22血清型に型別され、*S.Agona* 6株（13.3%）、*S.Hadar* 3株（6.7%）、*S.Typhimurium* 3株（6.7%）が多く分離された。

河川水からはコレラ菌O1以外、サルモネラ、海水からは腸炎ビブリオが高率に検出され、これら腸管系病原菌の環境汚染が広がっていることを示していた。

（本間 幸子 植田 葉子）  
（岡田 京子 小川 正之）



表1 河川水から分離した病原菌検出状況（平成13年）

病原菌	月												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
赤痢菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
コレラ菌 (CT +)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(CT -)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
コレラ菌O1以外	1	0	6	6	5	4	8	10	7	3	3	2	55 (32.7)
腸炎ビブリオ	0	0	1	3	3	4	4	3	3	2	1	3	27 (16.1)
サルモネラ													
腸チフス	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
バラチフス	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	2	3	2	1	6	2	3	4	8	9	2	2	44 (26.2)
腸管出血性大腸菌O157	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
検体数	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	168

CT：コレラエンテロトキシン  
 ( ) 内は%を表す

表2 定点別コレラ菌O1以外の検出状況（平成13年）

定 点	月												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1 六 郷 橋 (多摩川)	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
2 末 吉 橋 (鶴見川)	-	-	+	-	-	-	+	-	-	-	-	-	2
河 3 一 本 橋 (矢上川)	-	-	-	+	+	-	+	+	+	-	+	-	6
4 渋 川 橋 (渋川)	-	-	+	+	+	+	-	+	+	-	-	-	6
5 上 家 内 橋 (二ヶ領用水)	-	-	+	+	-	+	+	+	+	+	-	-	7
6 井 田 橋 (江川)	-	-	-	-	+	-	+	+	+	+	-	+	6 55/156
川 7 上 野 川 橋 (矢上川)	-	-	+	-	-	+	+	+	-	-	-	-	4 (35.3)
8 美 里 橋 (有馬川)	-	-	-	-	+	-	-	+	+	-	+	-	4
9 新 平 瀬 橋 (平瀬川)	+	-	-	+	+	+	+	+	+	-	-	-	7
10 大 道 橋 (五反田川)	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	2
水 11 子ノ神社前の橋 (早野川)	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	1
12 宿 地 橋 (真福寺川)	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	6
13 仲 村 橋 (麻生川)	-	-	+	+	-	-	-	+	-	-	-	-	3
海 水 14 川崎港廃油処理場 岸 壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0 0/12

( ) 内は%を表す。

表3 定点別腸炎ビブリオの検出状況（平成13年）

定 点	月												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1 六 郷 橋 (多摩川)	-	-	-	+	+	+	+	+	+	-	-	+	7
2 末 吉 橋 (鶴見川)	-	-	-	+	+	+	-	+	+	-	+	+	7
河 3 一 本 橋 (矢上川)	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	1
4 渋 川 橋 (渋川)	-	-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	-	2
5 上 家 内 橋 (二ヶ領用水)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
6 井 田 橋 (江川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0 19/156
川 7 上 野 川 橋 (矢上川)	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	1 (12.2)
8 美 里 橋 (有馬川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
9 新 平 瀬 橋 (平瀬川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
10 大 道 橋 (五反田川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
水 11 子ノ神社前の橋 (早野川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	1
12 宿 地 橋 (真福寺川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
13 仲 村 橋 (麻生川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
海 水 14 川崎港廃油処理場 岸 壁	-	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	+	8 8/12(66.7)

( ) 内は%を表す。

表4 定点別サルモネラの検出状況（平成13年）

定 点	月												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1 六 郷 橋 (多摩川)	-	-	-	-	+	-	+	+	+	+	-	-	5
2 末 吉 橋 (鶴見川)	+	+	-	-	+	+	-	+	+	+	+	-	8
河 3 一 本 橋 (矢上川)	-	-	+	-	+	-	+	+	+	+	+	-	7
4 渋 川 橋 (渋川)	-	-	-	-	+	-	-	-	+	+	-	-	3
5 上 家 内 橋 (二ヶ領用水)	-	-	+	-	+	-	-	-	+	+	-	-	4
6 井 田 橋 (江川)	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	2 44/156
川 7 上 野 川 橋 (矢上川)	-	-	-	+	-	-	-	-	+	-	-	+	3 (28.2)
8 美 里 橋 (有馬川)	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	1
9 新 平 瀬 橋 (平瀬川)	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	-	+	4
10 大 道 橋 (五反田川)	+	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	2
水 11 子ノ神社前の橋 (早野川)	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	1
12 宿 地 橋 (真福寺川)	-	+	-	-	-	-	+	-	-	+	-	-	3
13 仲 村 橋 (麻生川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	1
海 水 14 川崎港廃油処理場 岸 壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0 0/12

( ) 内は%を表す。

表5 検出病原菌の血清型 (平成13年)

病原菌	株数	血清型
腸炎ビブリオ	27 4血清型	K20 : 2 (7.4)、K17 : 1 (3.7)、K29 : 1 (3.7)、K37 : 1 (3.7) KUT : 22 (81.5)
サルモネラ	45 22血清型	<i>S. Agona</i> : 6 (13.3)、 <i>S. Hadar</i> : 3 (6.7)、 <i>S. Typhimurium</i> : 3 (6.7) <i>S. Bareilly</i> : 2 (4.4)、 <i>S. Enteritidis</i> : 2 (4.4)、 <i>S. Infantis</i> : 2 (4.4) <i>S. Muenster</i> : 2 (4.4)、 <i>S. Nagoya</i> : 2 (4.4)、 <i>S. London</i> : 2 (4.4) <i>S. Oranienburg</i> : 2 (4.4)、 <i>S. Saintpaul</i> : 2 (4.4) <i>S. Thompson</i> : 2 (4.4)、 <i>S. Augustenborg</i> : 1 (2.2) <i>S. Cerro</i> : 1 (2.2)、 <i>S. Derby</i> : 1 (2.2)、 <i>S. Mbandaka</i> : 1 (2.2) <i>S. Montevideo</i> : 1 (2.2)、 <i>S. Newlands</i> : 1 (2.2) <i>S. Potsdam</i> : 1 (2.2)、 <i>S. Senftenberg</i> : 1 (2.2) <i>S. Singapore</i> : 1 (2.2)、 <i>S. Tennessee</i> : 1 (2.2)、検査中 : 5 (11.1)

備考：( ) は菌株数

## 一河川水腸管系病原菌検索一

横須賀市衛生試験所

平成13年1月から13年12月まで実施した河川水のコレラ菌、コレラ菌O1以外、ビブリオ・ミキス、腸炎ビブリオ、赤痢菌、腸チフス菌、パラチフスA菌、その他のサルモネラ、腸管出血性大腸菌など、腸管系病原菌の検査結果について報告する。

### 1. 定点と検査方法

平成13年における調査定点は市内10河川10定点であり、採水は2月、5月、8月、11月の年4回実施した。また、検査は昨年と同様の方法により行った。

### 2. 結果及び考察

#### (1) 河川水からの病原菌検出状況

平成13年1月から12月の河川水の病原菌検出状況は表1に示した。本年はコレラ菌O1以外が延べ28定点(70.0%)、エロモナス・ヒドロフィラ/ソブリアは27定点(67.5%)、ビブリオ・ミキスは9定点(22.5%)、腸炎ビブリオは8定点(20.0%)、腸管病原性大腸菌は3定点(7.5%)、カンピロバクター・ジェジュニ/コリは2定点(5.0%)、プレジオモナス・シゲロイデス及びエルシニア・エンテロコリチカがそれぞれ1定点(2.5%)から検出された。しかし、コレラ菌O1、赤痢菌、腸チフス菌、パラチフスA菌、その他のサルモネラ、腸管出血性大腸菌及びビブリオ・フルビアリス/ファーニシイ、はいずれも検出されなかった。

#### (2) コレラ菌O1以外の検出状況

コレラ菌O1以外の検出状況を表2に示した。コレラ菌O1以外は8月には全ての定点から検出されるなど、本菌は定点別延べ件数において全ての定点で検出された。

#### (3) 定点別腸炎ビブリオの検出状況

腸炎ビブリオの検出状況は表3に示した。腸炎ビブリオは2月にはいずれの定点からも検出されなかったが、5月は1定点、8月は3定点、11月は4定点から検出された。

以上、今回の調査における河川水からの腸管系病原菌はコレラ菌O1以外をはじめ、腸炎ビブリオ、ビブリオ・ミキス、エロモナス・ヒドロフィラ/ソブリア、プレジオモナス・シゲロイデス、腸管病原性大腸菌、カンピロバクター、エルシニア・エンテロコリチカと種々検出された。今後もこれら病原菌の定点観測については引続き実施していく予定です。

( 蛭田 徳昭、山口 純子 )  
( 片倉 孝子、増山 亨 )

表1 河川水から検出した病原菌（平成13年1月～13年12月）

病 原 菌	月				計 (%)
	2	5	8	11	
コレラ菌 (CT +)	0	0	0	0	0
コレラ菌 (CT -)	0	0	0	0	0
コレラ菌 O1 以外	4	8	10	6	28 (70.0)
腸炎ビブリオ	0	1	3	4	8 (20.0)
ビブリオ・ミミクス	0	4	5	0	9 (22.5)
ビブリオ・フルビアース/ファーニシイ	0	0	0	0	0
エロモナス・ヒドロフィラ/ソブリア	9	8	4	6	27 (67.5)
プレジオモナス・シゲロイデス	0	0	1	0	1 ( 2.5)
赤痢菌	0	0	0	0	0
腸チフス菌	0	0	0	0	0
パラチフス A 菌	0	0	0	0	0
その他のサルモネラ	0	0	0	0	0
腸管出血性大腸菌 O157	0	0	0	0	0
腸管出血性大腸菌 O157 以外	0	0	0	0	0
腸管病原性大腸菌	1	1	1	0	3 ( 7.5)
カンピロバクター・ジェジュニ/コリ	0	0	1	1	2 ( 5.0)
エルシニア・エンテロコリチカ	0	1	0	0	1 ( 2.5)
検体数	10	10	10	10	40

表2 定点別コレラ菌 O 1 以外の検出状況（平成13年1月～13年12月）

定 点	月				計
	2	5	8	11	
鷹 取 川 (追 浜 橋)	-	-	+	+	2
平 作 川 (夫 婦 橋)	-	+	+	-	2
松 越 川 (竹川合流後)	+	+	+	-	3
野 比 川 (野 比 橋)	-	+	+	+	3
長 沢 川 (長 沢 橋)	+	+	+	-	3
津 久 井 川 (新津久井橋)	-	-	+	+	2
川 間 川 (新川間橋)	-	+	+	+	3
芦 名 川 (芦 名 橋)	+	+	+	-	3
前 田 川 (前田中橋)	+	+	+	+	4
関 根 川 (粒 石 橋)	-	+	+	+	3

表3 定点別腸炎ビブリオの検出状況（平成13年1月～13年12月）

定	点	月				計	
		2	5	8	11		
鷹	取	川(追浜橋)	-	-	+	+	2
平	作	川(夫婦橋)	-	+	+	+	3
松	越	川(竹川合流後)	-	-	+	+	2
野	比	川(野比橋)	-	-	-	-	0
長	沢	川(長沢橋)	-	-	-	-	0
津	久井	川(新津久井橋)	-	-	-	-	0
川	間	川(新川間橋)	-	-	-	+	1
芦	名	川(芦名橋)	-	-	-	-	0
前	田	川(前田中橋)	-	-	-	-	0
関	根	川(粒石橋)	-	-	-	-	0

(8) バイオテロに伴う炭疽菌検査について

平成13年9月11日の米国における同時多発テロ事件直後、炭疽菌を加工したいわゆる“白い粉”によるバイオテロが米国内で発生した。我が国でも“白い粉”によるバイオテロの発生が懸念され、厚生労働省は「炭疽菌等の汚染のおそれのある郵便物等の取扱いについて（平成13年10月18日付）」および「炭疽菌等の汚染のおそれのある場合の対応について（平成13年11月16日付）」の通知で、警察が扱う不審物“白い粉”の炭疽菌の検査は地方衛生研究所等で行うこととした。以下、神奈川県下の各衛生研究所で実施した炭疽菌等の汚染のおそれのある不審物に対する検査について報告する。

神奈川県衛生研究所

平成13年10月18日、神奈川県内で最初に不審物の“白い粉”が発見され、炭疽菌検査が依頼された。当初より24時間対応の緊急体制を敷き、顕微鏡による鏡検、PCR法による遺伝子検査および培養検査を実施した。12月以降は、リアルタイムPCR機の導入を図り、より迅速な検査成績の提供を行うことで、炭疽菌の汚染や被害の拡大防止、県民の不安をいち早く取り除いた。

平成13年12月31日までに県警本部または警察署（24カ所）から51件の依頼を受け、計66検体が持ち込まれた。このうち検査可能であった59検体について炭疽菌検査を実施した結果、すべて陰性であった。

（鈴木理恵子、沖津 忠行）

横浜市衛生研究所

横浜市内では、平成13年10月16日に白い粉の入った不審郵便物が最初に発見され、それ以降年内は特に多く発生した。衛生研究所としては、危機管理対応として位置づけ、全所対応の体制で取り組んだ。

グローブボックスを早急に設置して炭疽菌検査を開始し、並行してバイオハザード安全室（BSL

-3）の再整備も進めた。その後、リアルタイムPCR器の導入により、検査時間の大幅な短縮が図れ、迅速な検査結果の提供に対応できた。

検査体制も「不審物（炭疽菌等）の夜間及び休日受け入れ体制」に基づいて24時間の受け入れ体制で実施し、全て保健所からの依頼で対応した。不審物の発見場所としては、個人宅が最も多く、次に地下鉄やバス等の交通機関（車内や施設内）、3番目に区役所や民間の施設と続き、これらの場所が大半を占めた。

平成13年12月31日までに保健所からの依頼で、45事例、61検体を受け付けた。検査可能な58検体について炭疽菌検査を実施した結果、全て陰性であった。

（藤井 菊茂）

川崎市衛生研究所

川崎市内で最初に“白い粉”による不審物の届出があったのは、平成13年10月23日である。車内で“白い粉”が付着したと思われる帽子である。顕微鏡による鏡検は即対応し、その後PCR法による遺伝子検査および培養検査を実施した。夜間発生については神奈川県衛生研究所の協力を得ながら、休日においても即対応し、市民の不安を取り除いた。

平成13年12月4日までに市内警察署から9件の依頼があり、延べ10検体が搬入された。電車内・駅構内によるものが3件、不審郵便物関係4件、その他2件であった。それらについて炭疽菌検査を実施した結果すべて陰性であった。

（岡田 京子）

### Ⅲ ウイルス性感染症



### Ⅲ ウイルス性感染症

#### 1 日本脳炎

##### (1) 日本脳炎の感染源調査結果

～と畜場ブタの抗体保有状況～

神奈川県衛生研究所

近年におけるわが国の日本脳炎の発生は、西日本を中心に流行が見られる。日本脳炎ウイルス（以下 JEV と略）の侵淫度を追跡し流行予測を行うため、豚の JEV 抗体保有状況を調査した。

平塚市食肉センターに持ち込まれた生後 5 ～ 8 ヶ月齢の県内産の豚を対象に、平成 13 年 7 月から平成 13 年 9 月までの期間に、8 回、20 検体ずつ、計 160 検体について採血し、血中の JaGAR01 株に対する血球凝集抑制（以下 III）抗体及び 2-ME 感受性抗体をそれぞれ測定した。

その結果、9 月の 4 検体から HI 抗体が検出され、そのうちの 3 検体から 2-ME 感受性抗体も検出された。県内の調査結果から JEV の侵淫度は低いと考えられた。神奈川県では平成 13 年度も平成 12 年度と同様に、患者発生はなかった。

（佐藤 利明、今井 光信）

##### (2) 日本脳炎ウイルス（JEV）調査

横浜市衛生研究所

日本脳炎ウイルス（JEV）の生態学的調査の一環として、横浜市内の牛舎においてコガタアカイエカを捕集し、JEV の保有状況を調べた。平成 13 年 8 月 16 日から 9 月 6 日の約 1 ヶ月間に 4 回のコガタアカイエカ捕集を実施し、ネットによる方法により合計 191 匹のコガタアカイエカを捕集した。捕集したコガタアカイエカは捕集日ごとに 9 プールの試料とした。蚊乳剤を乳のみマウス脳内に接種し JEV 分離を試みた。

JEV は分離されなかった。この成績は 14 年間続いている。市内畜産数の減少とともに家畜衛生状態の向上によりこの成績が維持されていると考ええる。

JEV の増幅動物はブタである。昨年度までは豚舎での捕集を実施したが、本年は豚舎の都合がつかず、牛舎での捕集となった。昨年以上の蚊の捕集が期待されたが、結果的に捕集された蚊数は減少した。これは採集地である牛舎およびその周辺の衛生状態が改善され、発生した蚊数が少なかった為であると考えられた。

地球温暖化が進む中、外国からのアルボウイルスの侵入と定着の危険が指摘されている。今後も日本脳炎の再流行の監視と発見の体制を維持していくとともに他のアルボウイルス感染症の侵入の監視も含めた調査体制への変換が求められる。

（宗村 徹也、宇宿 秀三、小曾根恵子）  
（川上 千春、金山 彰宏、野口 有三）  
（露木 和徳）

コガタアカイエカからの日本脳炎ウイルス分離成績

（平成 13 年：横浜市）

捕 集 日	捕 集 蚊 数	プ ー ル 数	ウ イ ル ス 分 離 数
8 / 16	3 6	1	0
8 / 23	1 5 0	6	0
8 / 30	2	1	0
9 / 6	3	1	0
計	1 9 1	9	0

## 2 インフルエンザ

### (1) 神奈川県が発生状況

神奈川県衛生部保健予防課  
インフルエンザについては、その実数をつかむことが困難なため、学校等における集団発生状況を参考とする。

平成13年11月から平成14年3月にかけて発生した集団かぜは、ウイルス分離状況から、Aソ連型とA香港型によるものと考えられた。

平成元年以降の集団かぜの発生に伴うウイルスの分離状況は、表1のとおりである。今期の集団かぜによる欠席者数は、791施設、12,336人となった。施設別の発生状況は、表2のとおりである。

表1 集団かぜ発生状況

年度	区分	発成年月日	終息年月日	発生施設数	学級閉鎖数	欠席者数	ウイルス型
元		元.11.13	2.3.12	2,168	5,138	52,483	A(H3N2) B
2		2.12.13	3.3.11	1,138	2,125	20,227	A(H3N2)
3		3.11.25	4.3.16	832	1,485	17,721	A(H1N1)
4		4.11.25	5.3.17	1,316	1,875	20,308	A(H3N2) B
5		5.11.24	6.3.17	336	444	4,792	A(H1N1)
6		6.11.10	7.3.16	990	1,272	14,424	A(H3N2)
7		7.11.30	8.3.18	381	451	5,628	A(H1N1)
8		8.11.26	3.3.17	410	495	5,219	A(H3N2)
9		9.12.3	10.3.19	1,794	3,293	37,782	A(H3N2)
10		10.11.6	11.3.18	1,938	2,949	33,370	A(H3N2) B
11		11.11.19	12.3.17	1,070	1,498	18,778	A(H1N1) A(H3N2)
12		12.12.12	13.3.19	143	144	1,535	A(H1N1) B
13		13.11.16	14.3.19	791	1,059	12,336	A(H1N1) A(H3N2)

A(H1N1)は、Aソ連型 A(H3N2)は、A香港型 Bは、B型

表2 集団かぜ発生状況(平成13年)

	施設数	学級閉鎖数	欠席者数	学年閉鎖数	学校閉鎖数
保育園・幼稚園	20	20	384	1	4
小学校	620	835	9,212	58	0
中学校	150	204	2,736	22	0
その他	1	0	4	1	0
計	791	1,059	12,336	82	4

(2) 神奈川県域のインフルエンザの動向

神奈川県衛生研究所

平成13年度冬季の県域でのインフルエンザ流行は1月から3月にかけて起こり、感染症発生動向調査による患者発生のピークは2月上旬(14年6週、定点あたり罹患数26.18人)にあった(図1)。また、学校等における集団かぜの発生状況は、初発(13年46週)から最終報告(14年12週)までの欠席者数累計が12,336名となり、ごく小さな流行であった昨年度と比較して約8倍増となった。

横須賀市、相模原市および県域の各保健所管内初発集団かぜ(11集団52名)について、病原体検索を行った。11月および12月に発生した7集団(34名)は、単純ヘルペスウイルスが分離された(49週)1名を除き、インフルエンザ、アデノ、エンテロ等のウイルス分離は陰性となり、血清抗体検査でもインフルエンザの感染は否定された。これらの集団には、胃腸炎症状を呈した患者が多く含まれていたことから、小型球形ウイルスの一種のノーウォークウイルスについてELISA法で血清抗体検査を行った。その結果、6集団で抗体価の有意上昇が認められた(28名中25名)ため、これらの集団かぜは、ノーウォークウイルスに起因するものであると考えられた。14年1月および2月に発生した4集団(18名)は、インフルエンザウイルスを起因としており、いずれも、A香港(H3)型によるものであった。

感染症発生動向調査病原体定点で採取された

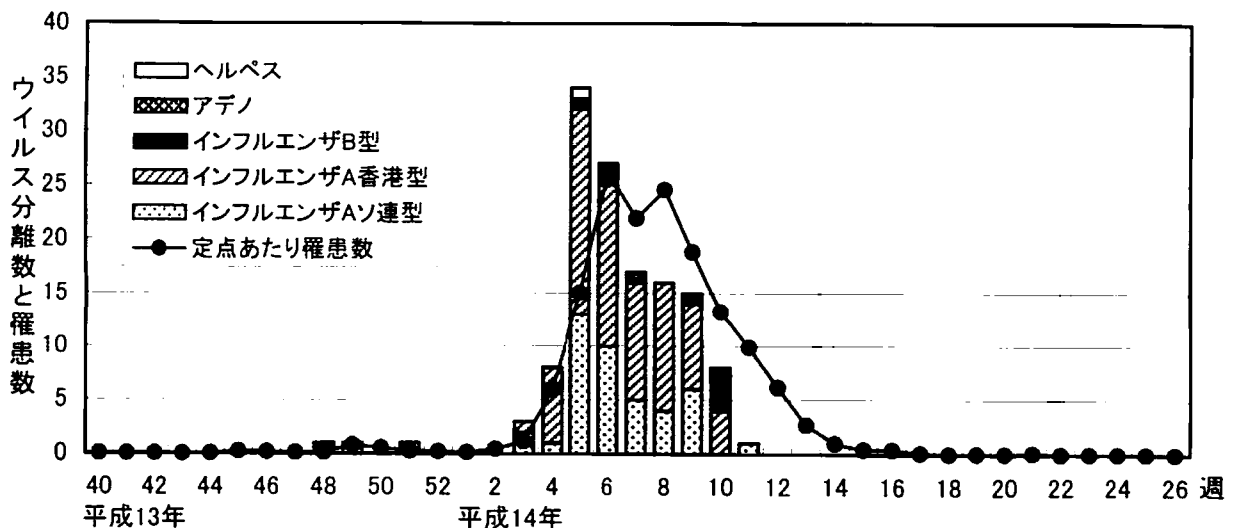
217検体(採取時期42週~25週)の咽頭拭い液についてウイルス分離を実施した。シーズン初期にはインフルエンザウイルスは分離されなかったが、アデノウイルス(48週)やヘルペスウイルス(51週)が分離された。インフルエンザウイルスが分離されたのは、3週以降であった。分離ウイルスの内訳は、インフルエンザウイルスA香港(H3)型68株、Aソ連(H1)型46株、B型7株、アデノウイルス3型2株、6型1株、単純ヘルペスウイルス1型2株であった。

インフルエンザ分離株のHI試験による抗原性は、Aソ連(H1)型、A香港(H3)型ともに、ほとんどがワクチン株(A/ニューカレドニア/20/99(H1N1)およびA/パナマ/2007/99(H3N2))類似株であった。B型はワクチン株(B/ヨハネスバーグ/5/99、山形系統株)とB/秋田/27/2001(ビクトリア系統株)の両方のフェレット抗血清に対して低HI価であったため、分離株がどちらの系統に属するかは特定できなかった。

以上のように、平成13年度の神奈川県域のインフルエンザの流行は、ワクチン株類似のA香港(H3)型が主流となり、Aソ連(H1)型との混合流行であった。B型の県域における流行は確認されなかった。また、流行終息後の再流行や集団発生は確認されなかった。

( 渡邊 寿美、斎藤 隆行、古屋由美子 )  
( 原 みゆき、今井 光信 )

図1 インフルエンザ様疾患流行状況



### (3) 横浜市のインフルエンザの動向

横浜市衛生研究所

横浜市結核・感染症発生動向調査による平成13年10月から平成14年4月までのインフルエンザ様疾患患者数は13,451人と昨シーズン同期間における患者数6,495人の約2倍であった。定点あたり患者数は2月(第8週)に20.0人とピークを示し、その後急激に患者数は減少した(図1)。

集団かぜの初発は平成14年1月23日に港北区の幼稚園から報告され、終息までの発生数は8施設24学級であった(表1)。集団かぜ発生の届出のうち、検査依頼のあった5集団の21人についてウイルス学的検査を行なった結果、2集団からAH3型ウイルスが分離され、1集団は血清抗体検査からAH3型ウイルスに対する有意な抗体上昇が認められた。また、AH1型ウイルスが分離された2集団のうち、1集団はNAの検査によりAH1N2型ウイルスであることが確認された。一方、4月に泉区の小学校医から集団発生疑いの連絡があり、5検体についてウイルス分離を行ったところ、B型ウイルスが分離された。

定点ウイルス調査においては平成13年10月から平成14年4月までの7カ月間に採取した咽頭ぬぐい液394検体よりAH1N1型23株、AH3型62株、B型8株、合計93株のウイルスを分離した。また、RT-PCRによる遺伝子検索では分離以外にAH1N1型1件、AH3型6件が検出された。このうちAH1N1型ウイルスについては平成14年1月第2週に瀬谷区の定点検体からはじめて分離され、第4週以降2月第12週まで分離された。AH3型ウイルスについては平成13年12月第52週に瀬谷区の定点検体から分離され、1月以降第6週をピークとして第14週まで毎週分離された。一方、B型ウイルスは平成14年2月第9週に港南区の定点から1シーズンぶりに分離され、流行後期の4月第15週まで分離された(図2)。

分離株についてHA抗原の性状を調べたところ、AH3型ウイルス66株の抗原性状はA/Panama/2007/99(ワクチン株)に類似していた(表2)。また、AH1N1型ウイルス25株とAH1N2型

ウイルス2株の抗原性状はA/NewCaledonia/20/99(ワクチン株)ウイルスと類似していた(表3)。一方、B型ウイルスの抗原性状はワクチン株に代表される山梨系統のB/Johannesbrug/5/99様ウイルスとワクチン株とは抗原性の異なるVictoria系統のウイルスが混在し(表4)、Victoria系統の株が12株中8株を占めた。

今シーズン、国内で初めて分離されたAH1N2型ウイルスの遺伝子解析を行ったところ、この新型ウイルスはAH1N1型のHA遺伝子とAH3N2型のNA遺伝子を引き継いだ遺伝子再集合体であることがわかった。また、世界各国で分離されたAH1N2型と系統樹上で同じ枝に属していたが、今シーズンの分離株や過去の分離株とは別の枝であった(図3)。

以上のように横浜市における2001/2002シーズンにおけるインフルエンザの流行は中規模なものであった。主流となったのはAH3型ウイルスとAH1N1型ウイルスで、新型のAH1N2型ウイルスも分離された。また、抗原性の異なる2種類のB型ウイルスも共存する混合流行であった。

(川上 千春, 宗村 徹也, 七種美和子)  
(野口 有三, 藤井 菊茂, 渡邊 哲)

表1 集団かぜ発生数

区分	施設数	学級閉鎖数	在籍者数	患者数	欠席者数
幼稚園・保育園	3	6	56	68	148
小学校	3	6	81	113	200
中学校	2	12	165	321	478
高等学校	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0
計	8	24	302	502	826

平成14年1月23日～2月19日（衛生局保健部感染症・難病対策課資料）

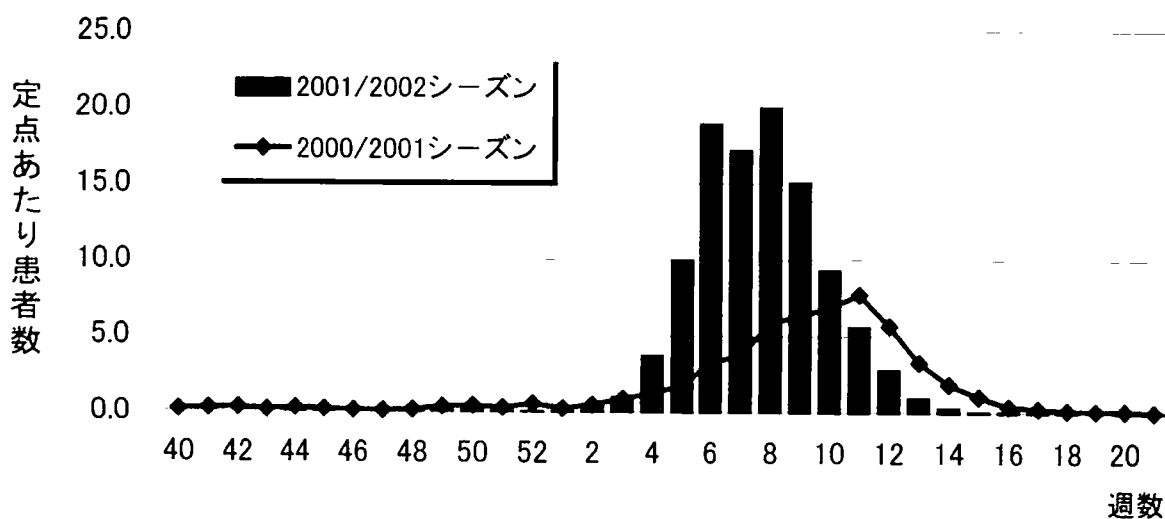


図1 定点あたり患者数

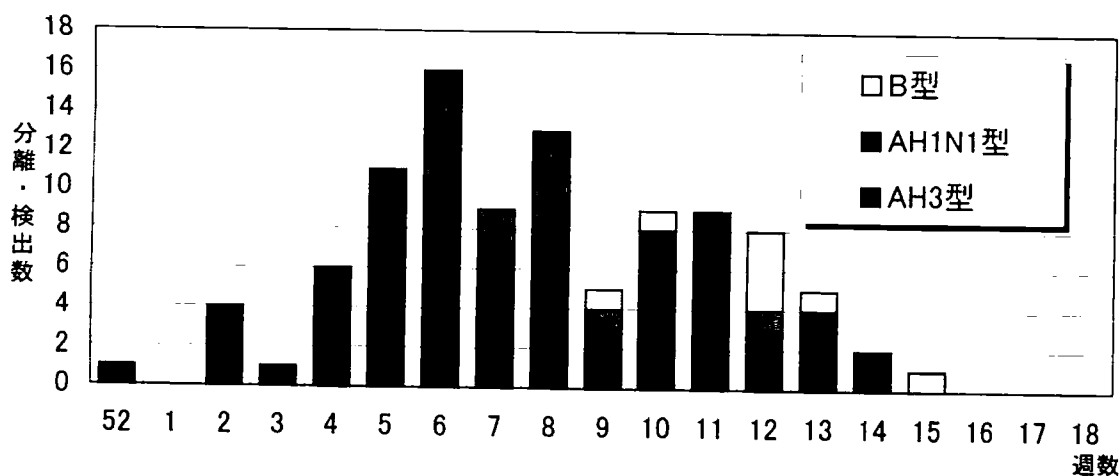


図2 分離・検出数

表2 AH 3型ウイルスの抗原性状

抗原	フェレットまたはマウスで免疫した抗血清			
	A/Panama/2007/99	A/Sydney/05/97	A/横浜/96/2000	A/横浜/111/99
	(1280)	(640)	(320)	(640)
A/横浜/1/2002	640	1280	320	640
A/横浜/25/2002	2560	1280	320	640
A/横浜/65/2002	1280	2560	320	640
A/横浜/84/2002	1280	640	320	320

表3 AH 1型ウイルスの抗原性状

抗原	フェレットまたはマウスで免疫した抗血清			
	A/NewCaledonia/20/99	A/Moscow/13/98	A/横浜/9/2001	A/横浜/18/2000
	(640)	(1280)	(320)	(320)
A/横浜/22/2002(H1N2)	1280	40	80	160
A/横浜/17/2002(H1N2)	640	20	80	160
A/横浜/2/2002(H1N1)	640	20	320	320
A/横浜/73/2002(H1N1)	640	40	320	640

表4 B型ウイルスの抗原性状

抗原	フェレットまたはマウスで免疫した抗血清				
	B/Johannesburg/5/99	B/山梨/166/98	B/秋田/27/2001	B/山東/7/97	B/横浜/1/2001
	(640)	(1280)	(80)	(40)	(160)
B/横浜/1/2002	320	80	10	< 10	40
B/横浜/6/2002	320	80	20	< 10	160
B/横浜/3/2002	< 10	< 10	40	20	< 10
B/横浜/9/2002	< 10	< 10	40	20	< 10

( ) 内は免疫抗原と同じウイルスを用いて測定した抗体価

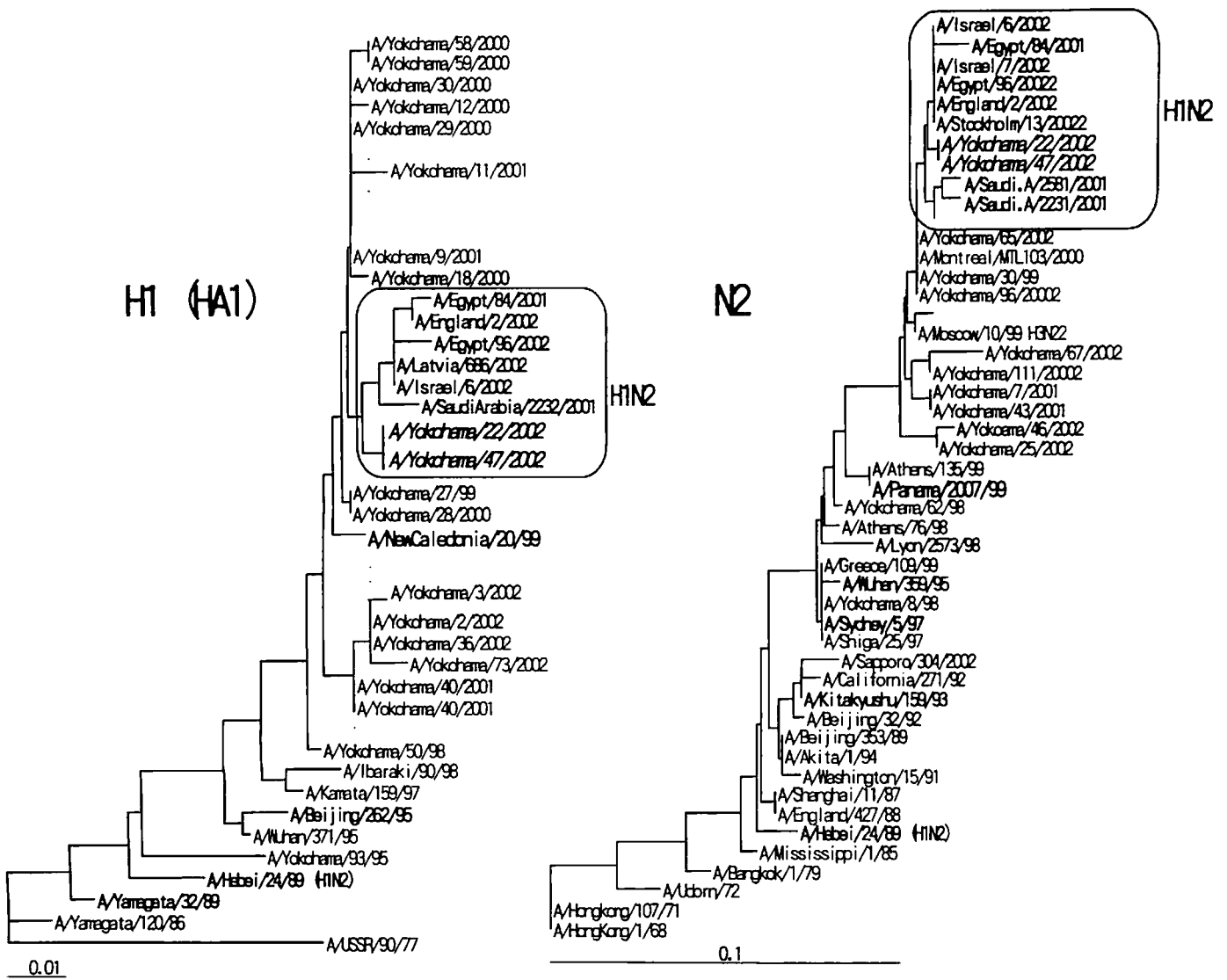


図3 H1・N2ポリペプチド進化系統樹

(4) 川崎市のインフルエンザの動向

川崎市衛生研究所

川崎市感染症発生動向調査におけるインフルエンザ様疾患患者の発生状況（図1）によると、患者発生が初めて確認されたのが平成13年12月の第1週（49週）であったが、患者数は少なく流行には至らなかった。1月の4週に入り定点あたりの患者数が429となり、流行の兆しがみられはじめ患者数は急速に増加し、2月の4週（8週）で20.11とピークとなった。その後患者数は減少し4月の第1週（18週）に終息した。

一方、集団かぜは平成14年2月13日に1施設1学級で発生したのみであり、3名についてウイルス分離を行ったところ、うがい液から1名においてB型インフルエンザウイルスが分離された。

平成13年4月から平成14年3月にかけて、定点医療機関で採取されたインフルエンザ様疾患患者

者の咽頭ぬぐい液120例についてウイルス分離を行った。そのうち63例（52.5%）からインフルエンザウイルスが分離され、その内訳はAソ連型19株、A香港型39株、B型5株であった。はじめてインフルエンザウイルスが分離されたのは1月9日でA香港型が分離された。1月の分離数はAソ連型6株、A香港型17株であった。2月にはいると分離数は増加し、Aソ連型13株、A香港型19株、B型1株分離された。3月にはいると分離数は減少し、A香港型が2株、B型3株分離された。4月はA香港型1株とB型1株が分離され、最後に分離されたのはB型の4月25日であった。なお、今期のインフルエンザ様疾患患者からは3血清型が分離されたが、A香港型、Aソ連型が主流で、B型は2月の末から4月の末まで散発的にみられるに終わった（図2）。

（清水英明、平位芳江）

図1 インフルエンザ様疾患患者数

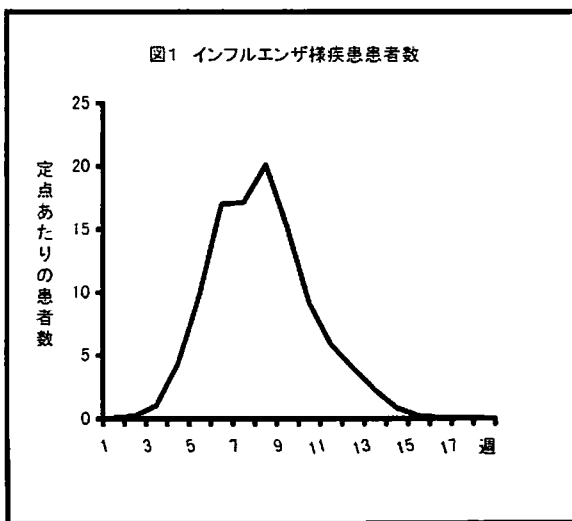
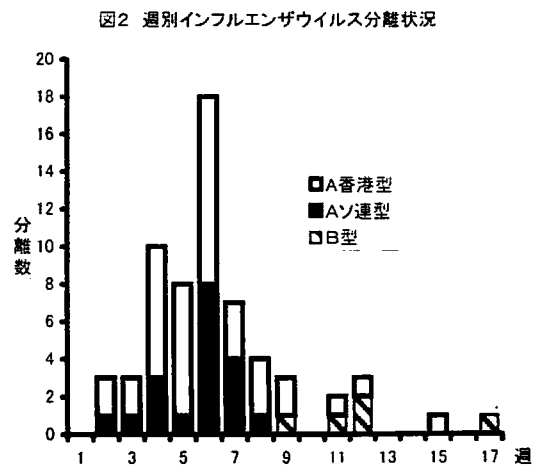


図2 週別インフルエンザウイルス分離状況





## (5) インフルエンザ感受性調査

神奈川県衛生研究所

平成13年7月から9月の間に採取された0歳以上の県民255名(0～4、5～9、10～14、15～19、20～29、30～39、40～49、50～59、60歳以上の9区分年齢群各25～30名ずつ)の血清について、インフルエンザ各型に対する年齢別抗体保有状況を調査した。使用抗原は、A/ニューカレドニア/20/99(H1N1)、A/パナマ/2007/99(H3N2)、B/ヨハネスバーグ/05/99、B/秋田/15/2001の4種類である。抗体保有率は、最低血清希釈倍数の10HI価と、感染防御能があるとされている40HI価の2点で集計した(図1)。

A/ニューカレドニア/20/99(H1N1)は、12年度と13年度のワクチン使用株である。本株に対する抗体保有率は、10HI価でみると0～4歳で38.5%、5～19歳では65.4～96%、20歳以上では13.3～26.7%であった。40HI価でみると10～14歳では44%であったが、15～19歳では26.9%、0～9歳では14.3～15.4%、20歳以上では0～3.3%であった(図1. a)。前年度と比較して全体的に抗体価が上昇しており、昨年度の流行を反映した結果であると考えられた。

A/パナマ/2007/99(H3N2)は、12年度と13年度のワクチン使用株である。本株に対する抗体保有率は、10HI価でみると5～19歳で100%、20～29歳で83.3%、30歳代以上で50～63.3%であり、最も抗体保有率が低かったのは0～4歳の30.8%であった。40HI価でみると5～19歳で69.2～76%、0～4歳では23.1%、20～29歳で16.7%、30～59歳では3.3～6.7%、60歳以上では13.3%であった(図1. b)。前年度と比較して全体的に抗体価が上昇しており、Aソ連(H1N1)型と同様に昨年度の流行を反映した結果であると考えられた。

B/ヨハネスバーグ/05/99は、13年度のワクチン使用株である。本株に対する抗体保有率は、10HI価でみると5～19歳では67.9～96.2%、30～39歳で66.7%、20～29歳および40～49歳で

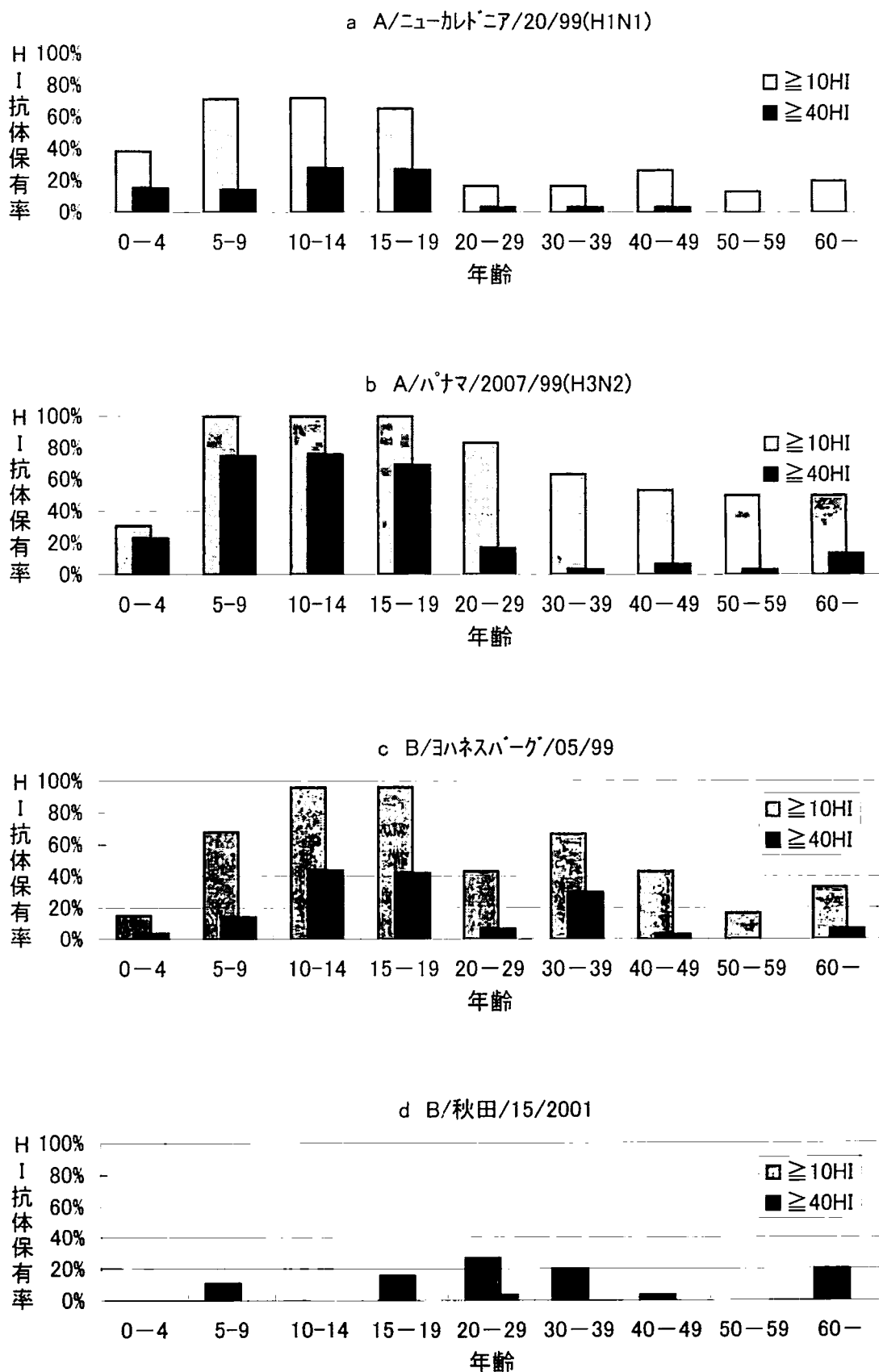
43.3%、60歳以上で33.3%、0～4歳および50～59歳では15.4～16.7%であった。40HI価でみると10～19歳で42.3～44%、30～39歳で30%、5～9歳で14.3%、0～4歳、20～29歳および40歳以上では0～6.7%であった(図1. c)。前年度(同系統に属する別の株に対する調査結果)と比較して、若干の抗体価の上昇がみられた。

B/秋田/15/2001は、ワクチン使用株(B/ヨハネスバーグ株)とは抗原的に別の系統に属する株である。本株に対する抗体保有率は、10HI価でみると20～39歳および60歳以上で20～26.7%、15～19歳で15.4%、5～9歳で10.7%、他の年齢群は0～3.3%であった。40HI価でみると20～29歳で3.3%、他の各年齢群では0%であった(図1. d)。前年度(同系統に属する別の株に対する調査結果)と比較して大きな変化はみられなかった。

以上の結果から、Aソ連(H1N1)型とB型に対しては全年齢群で、A香港(H3N2)型に対しては5～19歳を除く各年齢群で、抗体獲得が十分では無いことがわかった。これらの年齢群ではインフルエンザに対する警戒が必要であると考えられた。

(渡邊 寿美、今井 光信)

図1 インフルエンザ感受性調査



### 3 その他の感染症

#### (1) 神奈川県（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く）における麻疹抗体保有状況

神奈川県衛生研究所

昭和53年から義務接種として始まった、わが国の麻疹ワクチンの接種は、平成6年10月の予防接種法改正にともない勧奨性に変った。小児の麻疹ウイルスに対する免疫状態を把握しておくことが必要なことから、昭和54年以降、赤血球凝集抑制（HI）抗体の保有状況について調査を行ってきた。しかしHI抗体の測定に必要なミドリザル血球の入手が困難になったため、今年度より麻疹ウイルスが吸着してあるゼラチン粒子による凝集反

応法（PA）により抗体の保有状況調査を行った。

平成13年8月から12月の間に神奈川県立足柄上病院で採取された小児の血清72例についてPA法で麻疹ウイルスに対する抗体の測定を行った。

年齢別の抗体保有率は1歳以下が42.9%、他の年齢層（2～14歳）は86.7～100%を示し、平均抗体保有率は80.6%であった。

現在の予防接種が個人接種法で行われていることから、予防接種率の低下が予想される。今後も継続して麻疹に対する抗体保有状況の把握を行うとともに、予防接種の必要性和麻疹に関する適切な知識を普及してゆくことが大切と思われる。

（原 みゆき、古屋由美子、今井 光信）

#### 麻疹抗体保有状況

（採血 平成13年8月～12月）

年齢 (歳)	PA 抗体価 (血清希釈倍数)									検査数	陽性率 (%)
	< 8	8	16	32	64	128	256	512	≥ 1024		
0-1	8			1		3	1		1	14	42.9
2-3					2		1	2	1	6	100.0
4-5	1	1		1	1	2	2	2		10	90.0
6-9	3			2	3	2	4	4	6	24	88.9
10-14	2				3		6	2	5	18	86.7
合計	14	1		4	9	7	14	10	13	72	80.6
(%)	(19.4)	(1.4)		(5.6)	(12.5)	(9.7)	(19.4)	(13.9)	(18.1)		

(2) 神奈川県（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く）における風疹抗体保有状況

神奈川県衛生研究所

風疹流行の予測とその推移を知るため、住民の風疹ウイルスに対する感受性の実態を把握しておくことは重要である。

平成13年においては、一般健康人男女184名を対象として、風疹ウイルスに対する赤血球凝集抑制（HI）抗体の測定を行った。

結果は年齢別抗体保有状況を陰性率で見ると、1歳以下100.0%、1～4歳45.0%、5～9歳45.0%、10～14歳30.0%、15歳以上0～25.0%

となり平均陰性率は25.0%であった。

次にHI抗体価をみると32～128倍が50.0%を占め、平均抗体価は2<sup>5.2</sup>であった。

以上の成績より、1歳以下で抗体保有率が特に低いことがわかった。この年齢層が今後の感染と流行の主体になると考えられる。現在生後12～90か月と中学生を対象にワクチン接種が実施されているが、これらの年齢層の抗体保有状況の推移を監視するとともに、妊娠前および妊娠可能年齢層への風疹ワクチン接種は継続して奨励する必要があると思われる。

（古屋由美子、原 みゆき、今井 光信）

風 疹 抗 体 保 有 状 況

（採血 平成13年7月～8月）

年齢 (歳)	HI 抗体価									検査数	陰性率 (%)
	< 8	8	16	32	64	128	256	512	≥ 1024		
< 1	4									4	100.0
1-4	9		2	5	3		1			20	45.0
5-9	9		2	7	2					20	45.0
10-14	6	1	5	6	2					20	30.0
15-19	3	1	4	4	5	2	1			20	15.0
20-24	1		3	3	3	1				11	9.1
25-29	3		2	7	4	2	1			19	15.8
30-34	4		6	5	4	1				20	20.0
35-39		1	5	2	1	1				10	0.0
40-49	5	1	4	2	5	3				20	25.0
≥ 50	2	3	2	6	5	1	1			20	10.0
合計	46	7	35	47	34	11	4			184	25.0
(%)	25.0	3.8	19.0	25.5	18.5	6.0	2.2				100.0

(3) HIV 患者・感染者の状況について

神奈川県衛生部保健予防課

# 世界の患者・感染者状況

(2001年11月25日現在)

・1981年 6月に世界で初めての症例が報告されて以来、2001年11月25日現在でWHO(世界保健機関)に報告されたエイズ患者数は2,784,317人であり、この1年で471,457人(20.4%)増加している。UNAIDS(国連合同エイズ計画)及びWHOでは2001年末までにHIV/AIDSと共に生きている成人及び小児は4,000万人に達し、同時に2001年だけで見ると500万人が新たにHIVに感染したであろうと推計している。

・また、これまでの累積死亡者数は2,480万人に達し、2001年だけでも300万人が死亡したものと推計されている。

世界のエイズ患者の状況(2001年11月25日 WHO報告)

世界の患者の公式報告数の推移

▽1994年 6月.....985,119人

↓1994年 12月.....1,025,073人

↓1995年12月.....1,291,810人

↓1996年11月.....1,544,067人

↓1997年11月.....1,736,958人

↓1998年11月.....1,987,217人

↓1999年11月.....2,201,461人

↓2000年11月.....2,312,860人

↓2001年11月.....2,784,317人

地 域	患者発生状況(人)	患者数(人)
アフリカ地域	タンザニア	130,386
	エチオピア	100,353
	コンゴ	85,058
アメリカ地域	アメリカ合衆国	806,157
	ブラジル	215,799
	メキシコ	47,840
東地中海地域	スーダン	4,004
	ジブチ	1,783
ヨーロッパ地域	スペイン	61,028
	フランス	53,879
	イタリア	48,488
南東アジア地域	タイ	128,606
	インド	8,438
西太平洋地域	カンボジア	9,318
	オーストラリア	8,570
	マレーシア	5,204
	ベトナム	5,332
	日本	2,548
	2,784,317	

# 日本の患者・感染者状況

(2001年12月31日現在)

・1985年に初めて患者が確認されて以来、2001年12月31日現在の累積では、HIV感染者4,526件、AIDS患者2,248件の合計6,774件が報告されている。

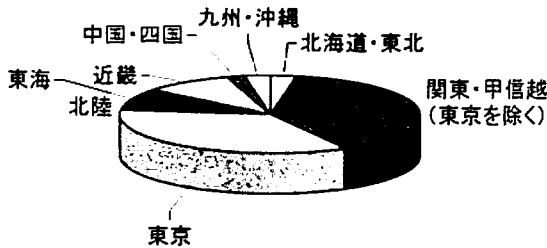
・平成13年(2001)では、HIV感染者621件、AIDS患者332件の報告があった。年次推移で見ると、平成13年には平成12年に比しHIV感染者数は159件、AIDS患者数は3件増加が認められ、HIV感染者・AIDS患者総数は過去最多となっている。

・平成13年12月までの患者・感染者(累積6,774件)の都道府県別報告数では、東京都2,383件、神奈川県592件、千葉県532件の順になっており、関東甲信越地区が5,005件(73.9%)を占めている。男女比は5:2、日本人男性4,052件(59.8%)、外国人男性961件(14.2%)、日本人女性517件(7.6%)、外国人女性1,244件(18.4%)となっている。感染経路別では異性間性的接触3,016件(44.5%)、同性間性的接触1,969件(29.1%)、静注薬物濫用41件(0.6%)、母子感染41件(0.6%)、その他不明1,707件(25.2%)となっている。年齢別では20歳代32.5%、30歳代29.1%、40歳代17.8%の順となっている。

・平成13年12月末までの累積死亡者数は1,248名であった。

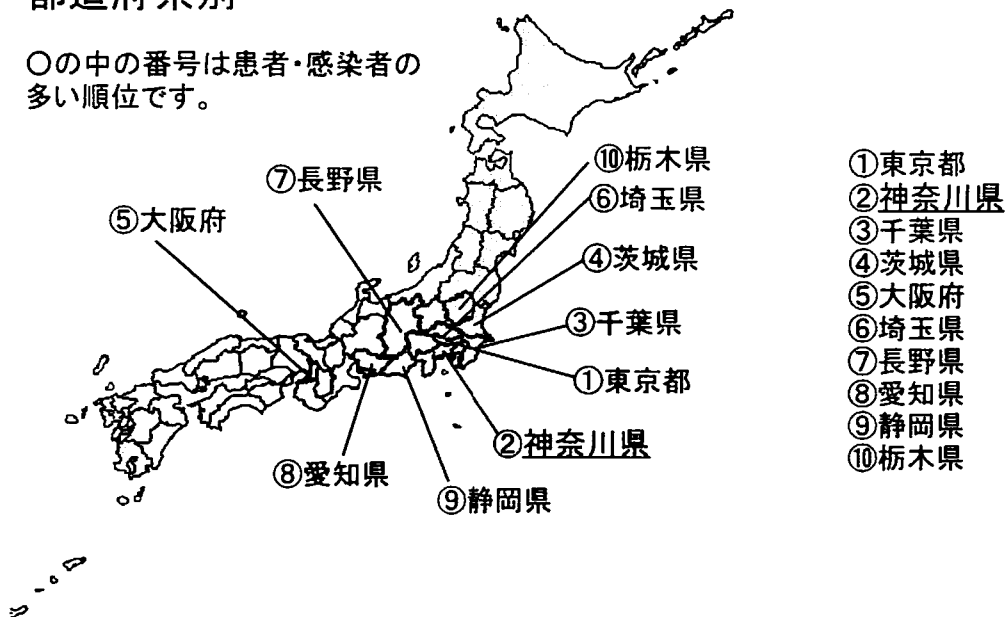
・なお、血液凝固因子製剤による感染者の1,430名(内患者150名)は含まれていない。

## ブロック別の患者・感染者割合



## 都道府県別

○の中の番号は患者・感染者の多い順位です。



都道府県別エイズ患者・感染者

(2001年12月31日現在)

順位	都道府県別	患者・感染者 報告件数(件)	構成割合 (%)	ブロック別患者・感染 者数報告件数(件)	構成割合 (%)
	1 北海道	67( 6)	1	北海道・東北 198	2.9
	2 青森県	18( 5)	0.3		
	3 岩手県	15( 3)	0.2		
	4 宮城県	36( 4)	0.5		
	5 秋田県	10( 2)	0.1		
	6 山形県	13( 2)	0.2		
	7 福島県	39( 10)	0.6		
④	8 茨城県	502( 28)	7.4	関東・甲信越 5005	73.9
⑩	9 栃木県	170( 17)	2.5		
	10 群馬県	115( 8)	1.7		
⑥	11 埼玉県	318( 36)	4.7		
③	12 千葉県	532( 59)	7.9		
①	13 東京都	2383(376)	35.2		
②	14 神奈川県	592( 83)	8.7		
	15 新潟県	64( 2)	0.9		
	16 山梨県	80( 10)	1.2		
⑦	17 長野県	249( 22)	3.7		
	18 富山県	18( 2)	0.3	北 陸 52	0.8
	19 石川県	11( 4)	0.2		
	20 福井県	23( 1)	0.3		
⑨	21 岐阜県	46( 4)	0.7	東 海 544	8
	22 静岡県	176( 26)	2.6		
⑧	23 愛知県	234( 48)	3.4		
	24 三重県	88( 11)	1.3		
	25 滋賀県	21( 5)	0.3	近 畿 659	9.7
⑤	26 京都府	74( 8)	1.1		
	27 大阪府	410( 87)	6.1		
	28 兵庫県	95( 20)	1.4		
	29 奈良県	35( 6)	0.5		
	30 和歌山県	24( 4)	0.4		
	31 鳥取県	3( 0)	0	中国・四国 121	1.8
	32 島根県	5( 0)	0.1		
	33 岡山県	14( 5)	0.2		
	34 広島県	32( 3)	0.5		
	35 山口県	14( 3)	0.2		
	36 徳島県	4( 0)	0.1		
	37 香川県	10( 2)	0.1		
	38 愛媛県	26( 7)	0.4		
	39 高知県	13( 2)	0.2		
	40 福岡県	84( 13)	1.2	九州・沖縄 195	2.9
	41 佐賀県	3( 1)	0		
	42 長崎県	18( 2)	0.3		
	43 熊本県	21( 5)	0.3		
	44 大分県	6( 0)	0.1		
	45 宮崎県	5( 2)	0.1		
	46 鹿児島県	21( 2)	0.3		
	47 沖縄県	37( 6)	0.5		
		6774(953)	100%	6774件	100

注1血液凝固因子製剤による感染者は除いています。○数字は感染者数の多い順です。  
( )内は平成13年中(13年12月31日まで)の報告数です。

■一全国のエイズ患者・感染者年次推移一

(2001年12月31日現在)

		平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	累計
男性	総数	352	202	207	290	335	455	492	519	676	669	816	5013
	患者	117	49	72	119	141	201	209	200	258	280	282	1928
女性	総数	201	291	156	144	111	155	155	134	155	122	137	1761
	患者	12	2	14	17	28	33	41	31	43	49	50	320
合計	総数	553	493	363	434	446	610	647	653	831	791	953	6774
	患者	129	51	86	136	169	234	250	231	301	329	332	2248

\*平成3年の欄は、昭和60年からの累計数。

■一全国のエイズ患者・感染者 感染原因別一

(2001年12月31日現在)

		異性間性的接触	同性間性的接触	その他・不明	合計
男性	総数	1924	1967	1122	5013
	患者	846	527	555	1928
女性	総数	1092	2	667	1761
	患者	181	1	138	320
合計	総数	3016	1969	1789	6774
	患者	1027	528	693	2248

\*その他・不明には、静注薬物濫用や母子感染が含まれています。

\*同性間性的接触には、両性間性的接触も含まれています。

■一全国のエイズ患者・感染者 国籍別一

(2001年12月31日現在)

		日本人	外国人	合計
男性	総数	4052	961	5013
	患者	1524	404	1928
女性	総数	517	1244	1761
	患者	130	190	320
合計	総数	4569	2205	6774
	患者	1654	594	2248

■一全国のエイズ患者・感染者 年齢区分別一

(2001年12月31日現在)

		20歳未満	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50歳以上	不明	合計
男性	総数	42	1209	1643	1147	968	4	5013
	患者	9	239	583	560	537	0	1928
女性	総数	124	1034	400	100	96	7	1761
	患者	9	114	117	40	40	0	320
合計	総数	166	2243	2043	1247	1064	11	6774
	患者	18	353	700	600	577	0	2248

\*総数には、患者・感染者が含まれています。

\*血液凝固因子製剤による患者・感染者は除いてあります。



■一神奈川県のエイズ患者・感染者 年次推移一

(2001年12月31日現在)

		平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	累計
男性	総数	25	19	16	33	34	42	44	58	64	50	65	450
	患者	7	4	8	10	16	19	17	22	25	18	29	175
女性	総数	12	7	10	12	7	13	24	12	15	12	18	142
	患者	0	0	1	1	1	3	11	2	0	3	8	30
合計	総数	37	26	26	45	41	55	68	70	79	62	83	592
	患者	7	4	9	11	17	22	28	24	25	21	37	205

■一神奈川県のエイズ患者・感染者 感染原因別一

(2001年12月31日現在)

		異性間性的接触	同性間性的接触	その他・不明	合計
男性	総数	187	170	93	450
	患者	75	50	50	175
女性	総数	90	0	52	142
	患者	15	0	15	30
合計	総数	277	170	145	592
	患者	90	50	65	205

\* その他・不明には、静注薬物濫用や母子感染が含まれています。

■一神奈川県のエイズ患者・感染者 国籍別一

(2001年12月31日現在)

		日本人	外国人	合計
男性	総数	374	76	450
	患者	144	31	175
女性	総数	53	89	142
	患者	12	18	30
合計	総数	427	165	592
	患者	156	49	205

■一神奈川県のエイズ患者・感染者 年齢区分別一

(2001年12月31日現在)

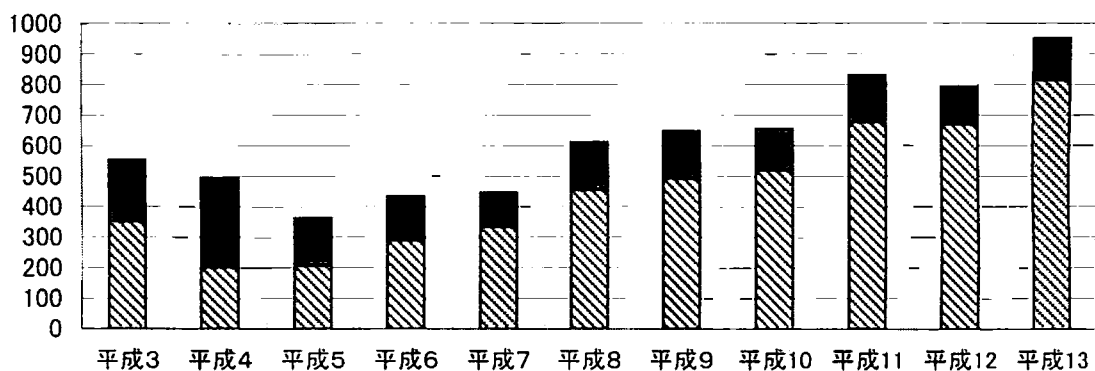
		20歳未満	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50歳以上	合計
男性	総数	6	116	130	98	100	450
	患者	1	23	42	50	59	175
女性	総数	7	72	40	14	9	142
	患者	0	8	15	6	1	30
合計	総数	13	188	170	112	109	592
	患者	1	31	57	56	60	205

\* 総数には、患者・感染者が含まれています。

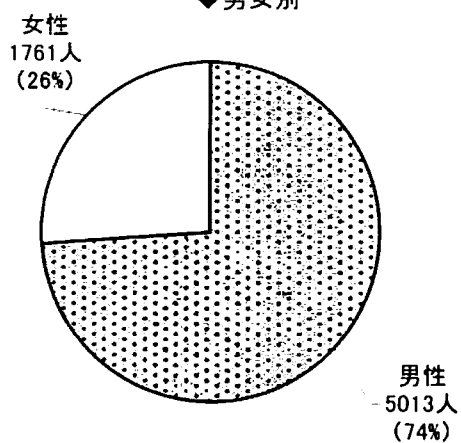
\* 血液凝固因子製剤による患者・感染者は除いてあります。

◆全国のエイズ患者・感染者 年次推移

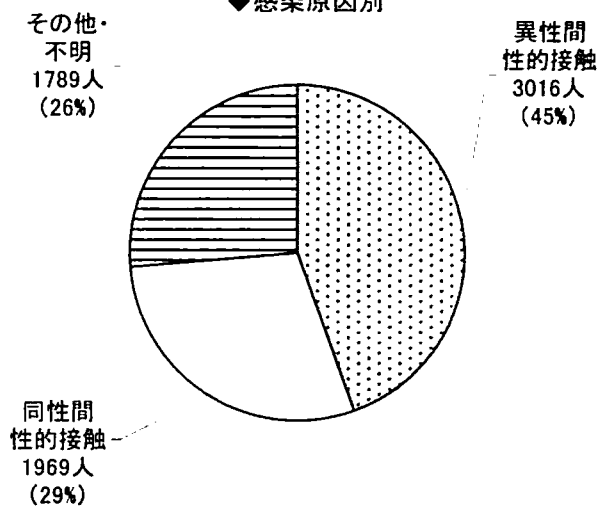
■女性  
▨男性



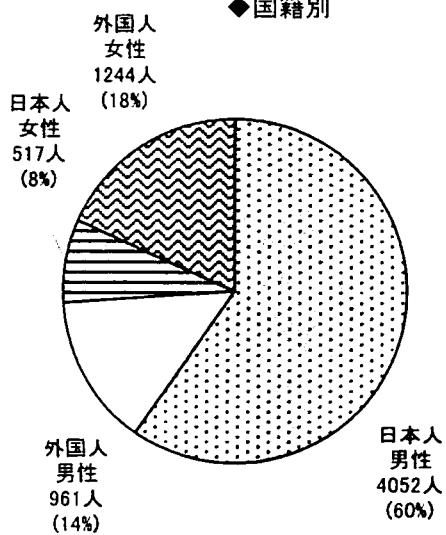
◆男女別



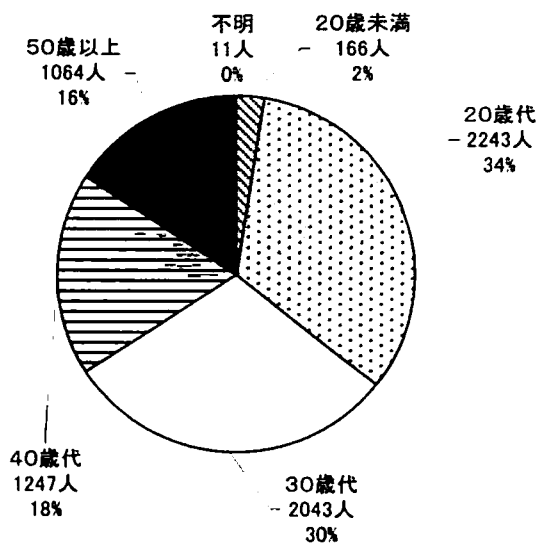
◆感染原因別



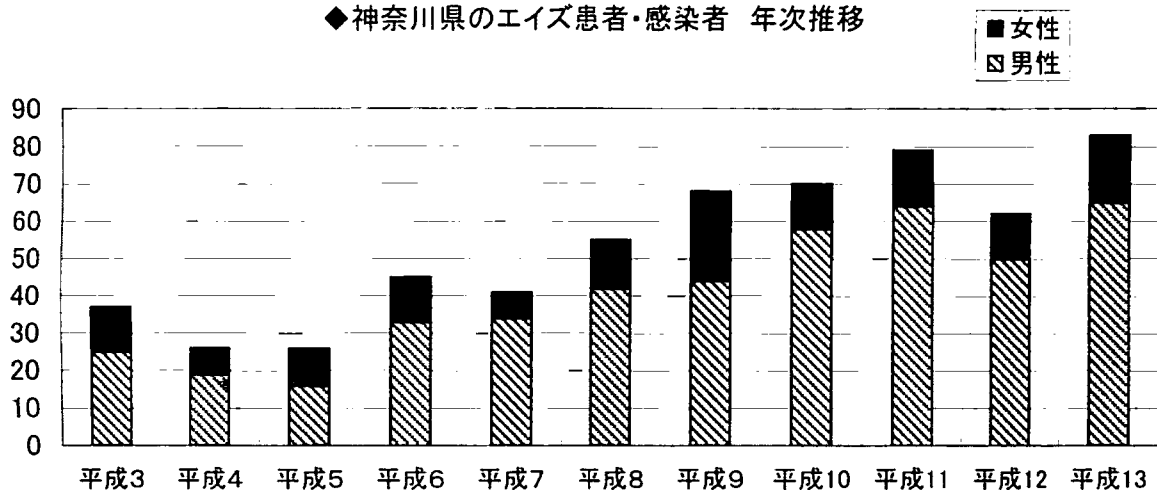
◆国籍別



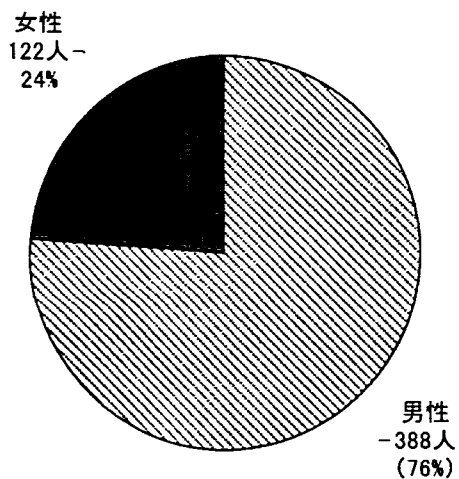
◆年齢区分別



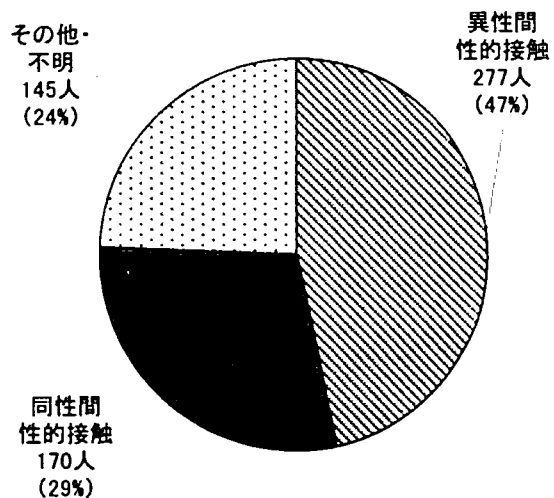
◆神奈川県のエイズ患者・感染者 年次推移



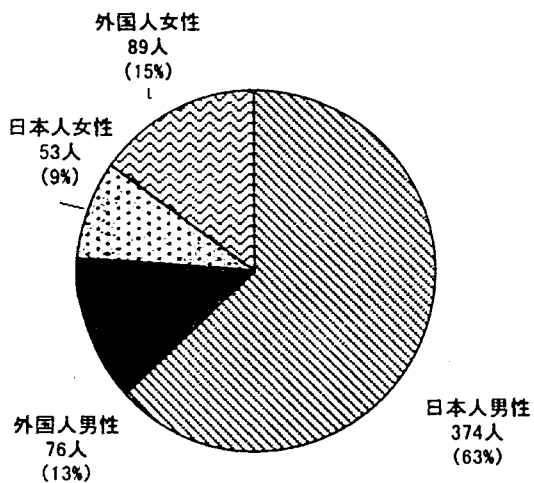
◆男女別



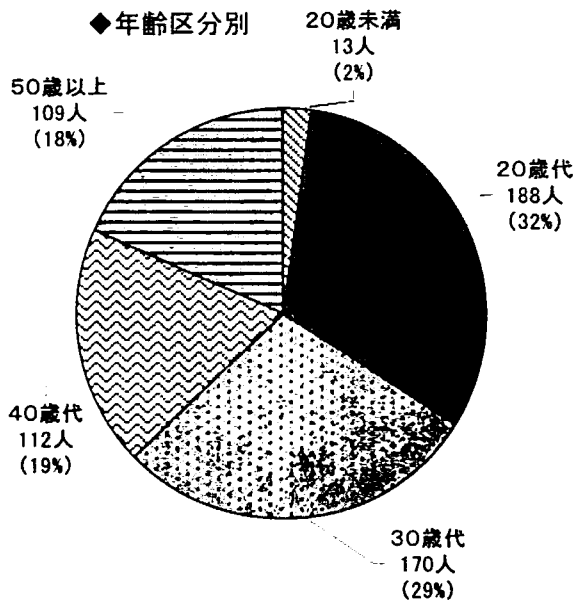
◆感染原因別



◆男女別



◆年齢区分別



■日本のエイズ患者・感染者の年次推移(感染原因別)

(2001年12月31日現在)

	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	累計
異性間性的接触	235	253	170	194	227	287	312	283	372	331	352	3016
同性間性的接触	180	58	61	122	108	151	157	180	256	291	405	1969
その他・不明	138	182	132	118	111	172	178	190	203	169	196	1789
(内母子感染)	4	1	4	4	3	9	4	2	3	5	2	41
合計	553	493	363	434	446	610	647	653	831	791	953	6774

\* その他・不明には、静注薬物濫用や母子感染が含まれています。

\* 平成3の欄は、昭和60年からの累計です。

■日本のエイズ患者・感染者の年次推移(男女国籍別)

(2001年12月31日現在)

	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	累計
日本人男性	243	144	155	225	255	345	404	419	591	575	696	4052
外国人男性	109	58	52	65	80	110	88	100	85	94	120	961
日本人女性	70	17	27	41	30	56	46	46	57	53	74	517
外国人女性	131	274	129	103	81	99	109	88	98	69	63	1244
合計	553	493	363	434	446	610	647	653	831	791	953	6774

\* 平成3の欄は、昭和60年からの累計です。

■神奈川県のエイズ患者・感染者の年次推移(感染原因別)

(2001年12月31日現在)

	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	累 計
異性間性的接触	20	11	17	16	17	25	42	27	41	29	32	277
同性間性的接触	6	8	2	18	13	18	16	20	24	19	26	170
その他・不明	11	7	7	11	11	12	10	23	14	14	25	145
(内母子感染)	2	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	5
合 計	37	26	26	45	41	55	68	70	79	62	83	592

\* 平成3の欄は、昭和60年からの累計です。

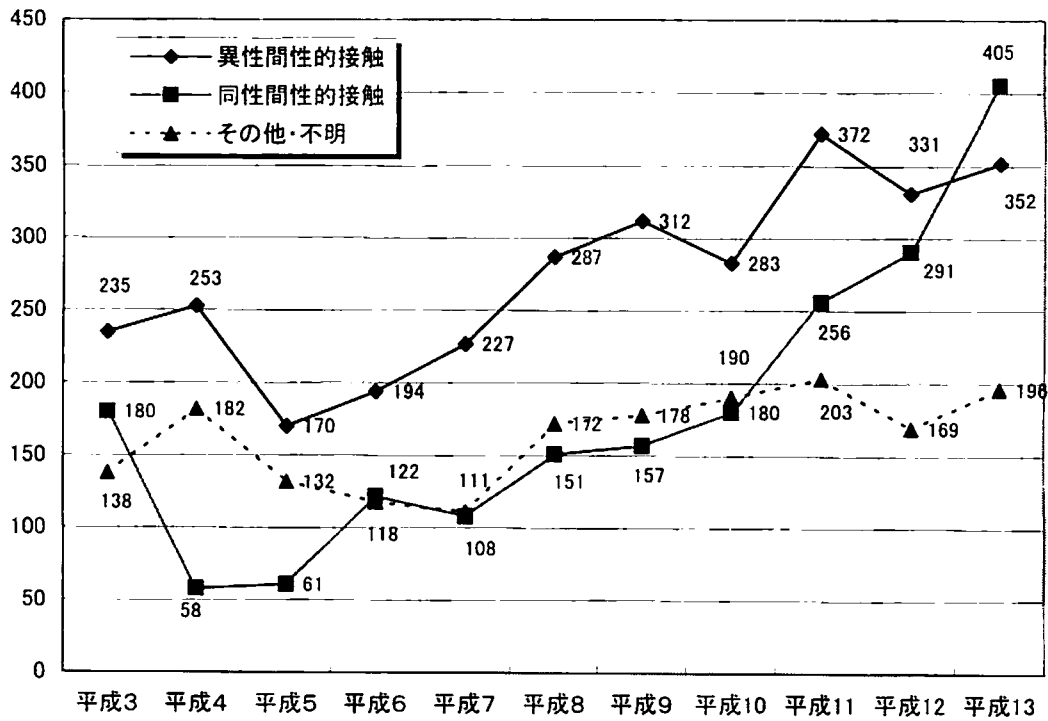
■神奈川県のエイズ患者・感染者の年次推移(男女国籍別)

(2001年12月31日現在)

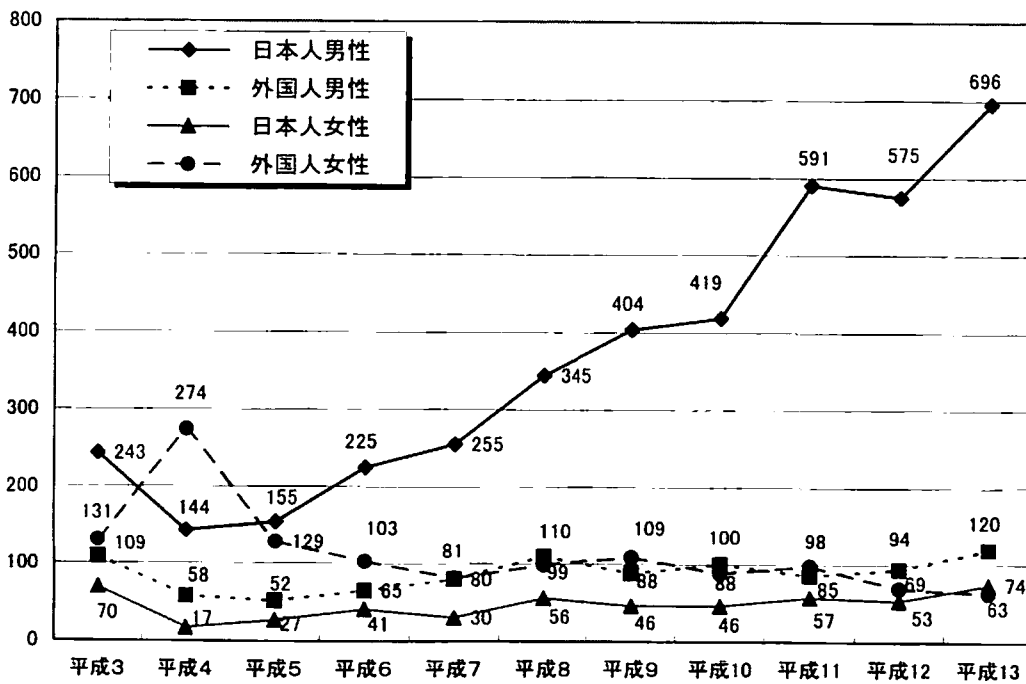
	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	累 計
日本人男性	20	15	15	28	32	30	34	46	57	43	54	374
外国人男性	5	4	1	5	2	12	10	12	7	7	11	76
日本人女性	6	0	0	3	1	4	11	6	9	3	10	53
外国人女性	6	7	10	9	6	9	13	6	6	9	8	89
合 計	37	26	26	45	41	55	68	70	79	62	83	592

\* 平成3の欄は、昭和60年からの累計です。

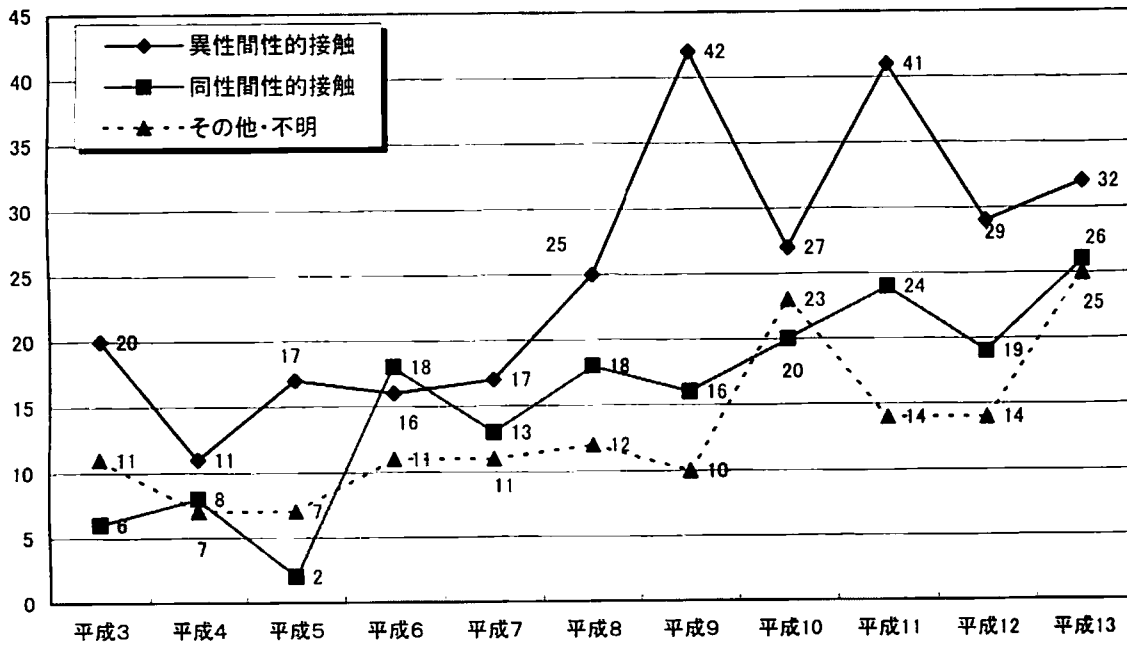
●日本のエイズ患者・感染者の年次推移(感染原因別)



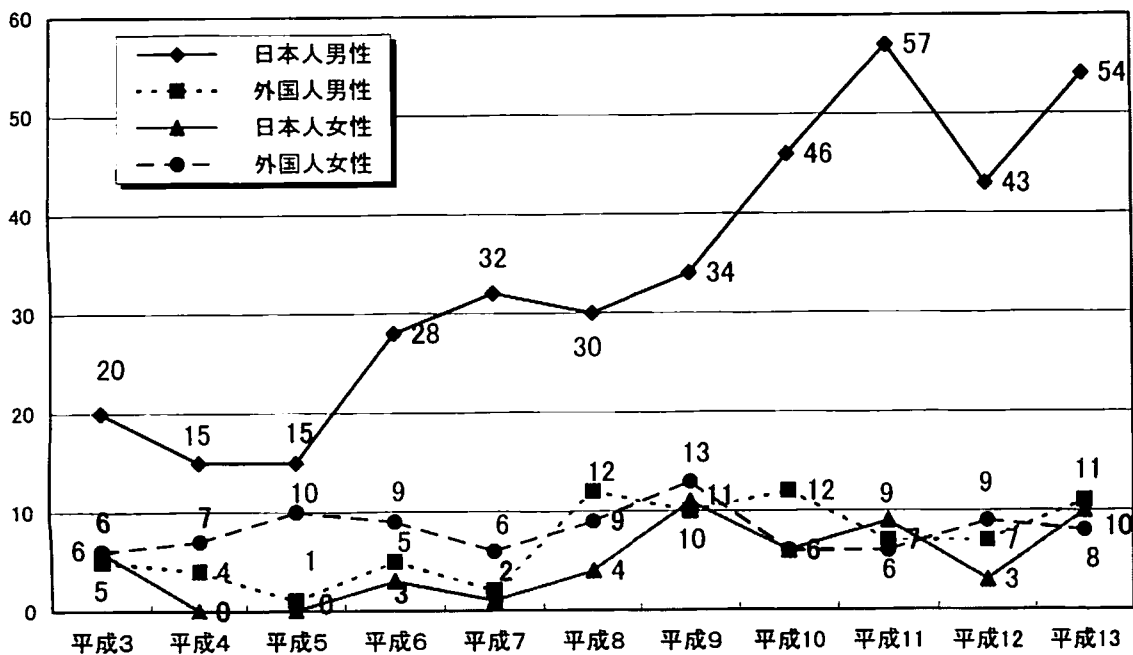
●日本のエイズ患者・感染者の年次推移(男女国籍別)



■神奈川県のエイズ患者・感染者の年次推移(感染原因別)



■神奈川県のエイズ患者・感染者の年次推移(男女国籍別)

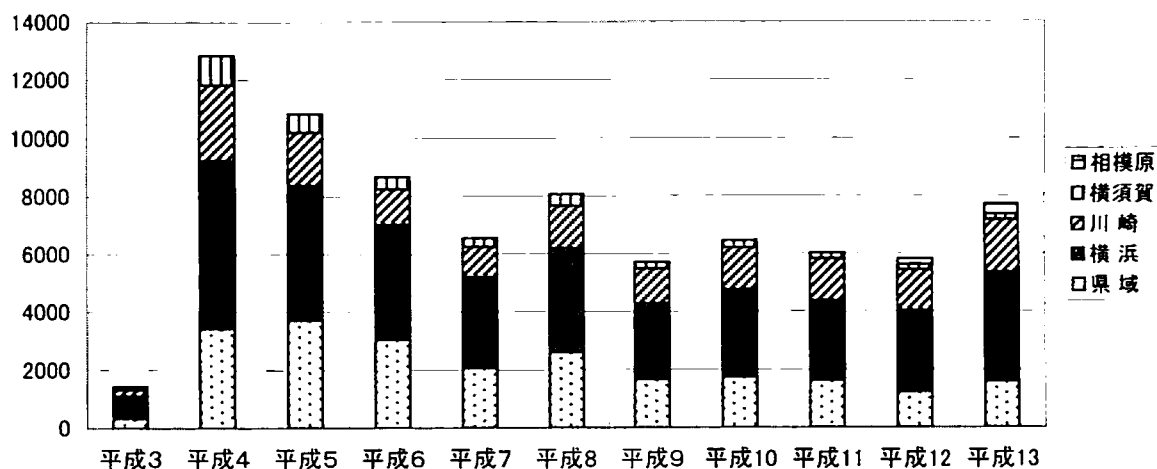


■神奈川県一検査実施年次推移一

(2001年12月31日現在)

	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13
県域	345	3439	3715	3054	2057	2614	1663	1756	1630	1235	1583
横浜	759	5800	4669	3963	3135	3580	2619	2994	2740	2787	3759
川崎	221	2572	1810	1225	1044	1463	1192	1459	1451	1405	1817
横須賀	113	1035	646	435	317	409	233	253	211	195	201
相模原										193	357
合計	1438	12846	10840	8677	6553	8066	5707	6462	6032	5815	7717

\* 相模原は平成12年4月から保健所政令市

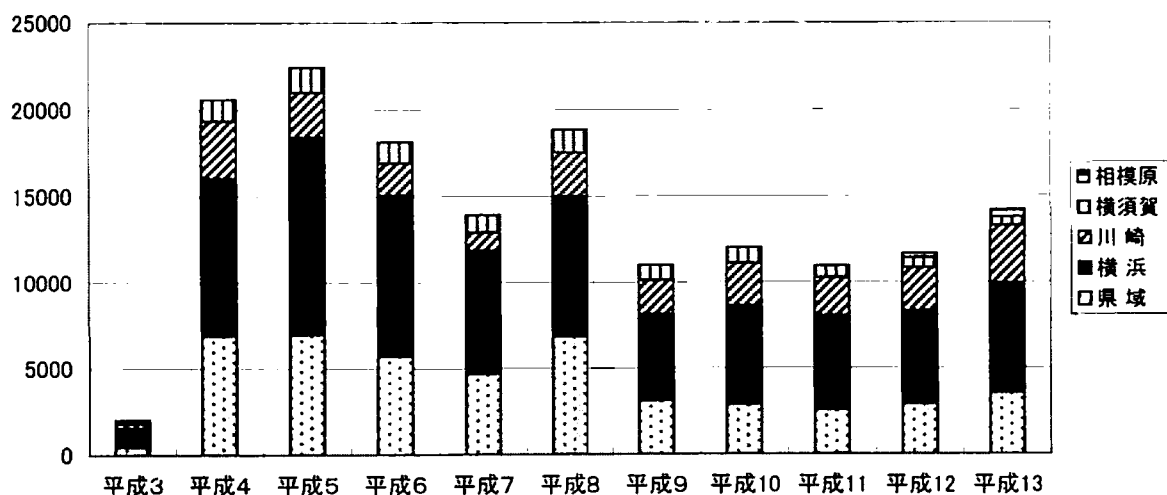


■神奈川県一相談年次推移一

(2001年12月31日現在)

	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13
県域	508	6905	6965	5723	4698	6854	3124	2916	2567	2923	3582
横浜	1022	9123	11433	9304	7139	8109	5021	5729	5483	5425	6316
川崎	295	3325	2626	1870	1066	2544	1982	2455	2219	2475	3361
横須賀	187	1256	1441	1239	1012	1313	873	906	679	581	484
相模原										248	436
合計	2012	20609	22465	18136	13915	18820	11000	12006	10948	11652	14179

\* 相模原は平成12年4月から保健所政令市





## IV その他の感染症

## IV その他の感染症

### 1 神奈川県で発生した

#### 恙虫病（つつが虫病）について

神奈川県衛生研究所

昭和58年から平成10年までの恙虫病患者発生数を年次別にみると、昭和58年から昭和63年までは2～33名の届出（確定患者2～19名）で推移し、その後平成元年110名（81名）、平成2年140名（112名）と増加したが、平成3年からは110名（65名）、平成4年92名（52名：含む紅斑熱患者2名）、平成5年41名（24名）、平成6年53名（39名）、平成7年41名（22名）、平成8年14名（9名）、平成9年17名（9名）と減少した。しかし、平成10年21名（14名）、平成11年43名（31名）、平成12年48（42名）と僅かながらであるが増加したが、平成13年度には再び12名（7名）と減少した（表1）。

また恙虫病患者発生を季節別にみると、昭和58年から平成12年の18年間すべての毎年秋期（9～11月）に患者が多く、平成13年についても、10月5名、11月1名、12月1名であり、秋期に患者のほとんどが発生した。さらに患者の感染場所（聞き取り調査により推定できたもの）を検討すると、県外で感染して本県で届出されたと思われるものを除いて、平成13年では山北町と秦野市であった。

また、平成13年の恙虫病感染時の行動も、昨年と同様に畑、田圃など平地での農作業が多く、日常生活での感染の機会が多いことが判明した。

（片山 丘、古屋由美子）  
（原 みゆき、今井 光信）

表1 神奈川県における恙虫病患者発生状況

年	届出患者数	確定患者数*
昭和58年	2	2
59	16	14
60	15	10
61	17	15
62	33	19
63	24	19
平成元年	110	81
2	140	112
3	110	65
4	92	52**
5	41	24
6	53	39
7	41	22
8	14	9
9	17	9
10	21	14
11	43	31
12	48	42
13	12	7

\* : 血清学的確認患者数

\*\* : 紅斑熱患者を含む

# 資 料

1 平成 13 年分 1～3 類及び全数把握

保健所名	感染症名																					
	エボ ラ 出 血 熱	ク リ ミ ア ・ コ ン ゴ 出 血 熱	ベ ル ス ト 病	マ ル ブ ル サ グ 病	ラ ツ サ 熱	コ レ ラ	細 菌 性 赤 痢	腸 チ フ ス	腸 チ フ ス	急 性 灰 白 髄 炎	ジ フ テ リ ア	腸 管 出 血 性 大 腸 菌 感 染 症	ア メ ー バ 赤 痢	エ キ ノ コ ク ス 症	黄 熱	オ ウ ム 病	回 帰 熱	急 性 ウ イ ル ス 性 肝 炎	Q 熱	狂 犬 病	ク リ ブ ト ス ポ リ ジ ウ ム 症	ク ロ イ ツ フ エ ル ト ヤ コ ブ 病
神奈川県	0	0	0	0	0	2	51	5	3	0	0	300	43	0	0	5	0	59	1	0	4	7
川崎市	0	0	0	0	0	1	19	2	1	0	0	89	28	0	0	0	0	26	1	0	3	3
見川							1					7										
神奈川								1				2	3									
西												1	6									
中南							4					2						2				
南							4					3							1			1
港							1					7	3					1				1
土ヶ谷												8	8					1			3	
旭							1					3	2					1				1
磯子							1					2						1				1
金沢							1					5	1									
北							1					10	1									
緑							1					1										
戸塚							1					12	2					16				
栄							1					5										
泉							1					3						4				
青												7										
都							4					5	1									
築												7										
川崎市	0	0	0	0	0	0	14	1	1	0	0	31	8	0	0	5	0	3	0	0	1	2
川崎							3					12	2									
幸							1					3				5						
中原							3		1			6	3					2				1
高津							2	1				6						1			1	
宮前							2					1	3									1
多摩							1					2										
麻生							2					1										
川崎市	0	0	0	0	0	1	18	2	1	0	0	180	7	0	0	0	0	30	0	0	0	2
須賀							3	1				16	2					1				
平塚							2		1			9										
鎌倉							7					6						4				
藤沢												10	1					6				
小田原												15						1				1
相模原												46	1					6				1
三原																						
厚木						1	3					17	1					2				
足柄上							1					8	2									
津久井												1										
秦野							1					35						4				
大和												5						4				
茅ヶ崎							1					12						2				

対象の4類感染症 保健所別報告数

劇症型溶血性レンサ球菌感染症	後天性免疫不全症候群	コクシジオイデス症	ジアルジア症	腎症候性出血熱	髄膜炎性髄膜炎	先天性風疹症候群	炭疽	ツツガムシ	デング熱	日本紅斑熱	日本脳炎	乳児ボツリヌス症	梅毒	破傷風	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	ハンタウイルス肺症候群	B型肝炎	ブドウ球菌	発疹チフス	マラリア	レジオネラ	保健所別計	
2	82	0	13	0	1	0	0	9	7	0	0	0	17	5	8	0	0	0	0	7	0	2	633
1	35	0	8	0	0	0	0	0	4	0	0	0	2	0	3	0	0	0	0	5	0	0	231
																							9
																							5
																1							9
	5																						9
	3																						12
	4																						17
	9		7						4							1					5		47
	1																						9
																							4
1	5															1							15
	2												2										16
	1																						3
	1		1																				34
																							6
																							8
																							7
	3																						13
	1																						8
0	23	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1	1	0	0	0	0	1	0	1	99
	6												1	1	1					1			27
																							9
	5																						21
	5												1										17
	6		1										1									1	16
													2										5
	1																						4
1	24	0	4	0	1	0	0	9	3	0	0	0	10	4	4	0	0	0	0	1	0	1	303
1	1		3										5	1									34
	3																						15
								1						1	1								20
													1										18
	1							1					1										20
	2				1								2	2	1								63
																							0
	7		1												2								34
								6															17
								1														1	2
																							41
	9												1							1			20
	1								3														19

## 2 細菌検出状況

横浜市衛生研究所

(平成13年1月～12月)

菌種・群・型	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	
<i>Escherichia coli</i> (Total)*		9											9
<i>Shigella</i> (Total)		2											2
<i>Salmonella</i> Typhi							1			1			2
<i>Salmonella</i> Paratyphi A										1			1
<i>Salmonella</i> O4 (B)					1		2					1	4
<i>Salmonella</i> O7 (C1,C4)							1	1	2	2	1		7
<i>Salmonella</i> O9 (D1)						35						3	38
<i>Salmonella</i> O13 (G1,G2)			1										1
<i>Salmonella</i> その他										1			1
<i>Vibrio parahaemolyticus</i>							5	6	16				27
<i>Plesiomonas shigelloides</i>			1				1						2
<i>Campylobacter jejuni</i>			4	11		4			1	12	10	1	43
<i>Clostridium perfringens</i> *							5			1			6
<i>Streptococcus</i> , A				2			1		1				4
合計		11	6	13	1	39	16	7	20	18	11	5	147

[注] \* :急性胃腸炎の原因菌と考えられるもののみ記載

<i>Escherichia coli</i> の内訳 (再掲)	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	
<i>Escherichia coli</i> 毒素原性			1	4	1	16		12					34
<i>Escherichia coli</i> 病原大腸菌血清型		6	1			1		1			1		10
<i>Escherichia coli</i> EHEC/VTEC		3	5	2	9	10	14	32	10	1	1	1	88
合計		9	7	6	10	27	14	45	10	1	2	1	132

<i>Shigella</i> の型別 (再掲)	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	
<i>Shigella flexneri</i> 2a						1	1						2
<i>Shigella sonnei</i>		2						3	3		1		9
合計		2				1	1	3	3		1		11

# 細菌検出状況

川崎市衛生研究所

(平成13年1月～12月)

菌種・群・型	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	
<i>Escherichia coli</i> (Total)*	1		3		1	2		1	1				9
<i>Shigella</i> (Total)				1									1
<i>Salmonella</i> 04 (B)								1					1
<i>Salmonella</i> 07 (C1,C4)	1			1		1	1		1				5
<i>Salmonella</i> 08 (C2,C3)									1				1
<i>Salmonella</i> 09 (D1)				1						2			3
<i>Vibrio cholerae</i> 01 & 0139 以外								1					1
<i>Vibrio parahaemolyticus</i>							2	5	2	1			10
<i>Aeromonas sobria</i>								1					1
<i>Plesiomonas shigelloides</i>											1		1
<i>Campylobacter jejuni</i>	2	2	2	4	1	5	8	4	4	6	6	4	48
合計	4	2	5	7	2	8	11	13	9	9	7	4	81

【注】 \* : 急性胃腸炎の原因菌と考えられるもののみ記載

<i>Escherichia coli</i> の内訳 (再掲)	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	
<i>Escherichia coli</i> 病変大腸菌血清型	1		2		1	1		1	1				7
<i>Escherichia coli</i> EHEC/VTEC			1			1							2
合計	1		3		1	2		1	1				9

<i>Shigella</i> の型別 (再掲)	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	
<i>Shigella sonnei</i>				1									1
合計				1									1

# 細菌検出状況

横須賀市衛生試験所

(平成13年1月～12月)

菌種・群・型	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	
<i>Escherichia coli</i> (Total)*	2	3	4	2	2		3	13	1	1		1	32
<i>Shigella</i> (Total)										1	1		1
<i>Salmonella</i> 07 (C1,C4)									1				1
<i>Salmonella</i> 08 (C2,C3)							1						1
<i>Salmonella</i> 09 (D1)						3							3
<i>Vibrio parahaemolyticus</i>							1	1	1				3
<i>Plesiomonas shigelloides</i>			1	1	1	1							2
<i>Campylobacter jejuni/coli</i> 種別せず						2				1			3
<i>Staphylococcus aureus</i> *							2	4				4	10
合計	2	3	5	2	3	5	7	18	2	4		5	56

【注】 \* : 急性胃腸炎の原因菌と考えられるもののみ記載

<i>Escherichia coli</i> の内訳 (再掲)	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	
<i>Escherichia coli</i> 組織侵入性													
<i>Escherichia coli</i> 毒素原性			3		1		1		1				6
<i>Escherichia coli</i> 病原大腸菌血清型	1	1	1	2	1			1		1		1	9
<i>Escherichia coli</i> EHEC/VTEC	1	1					2	12					17
<i>Escherichia coli</i> その他・不明													
合計	2	3	4	2	2		3	13	1	1		1	32

<i>Shigella</i> の型別 (再掲)	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	
<i>Shigella flexneri</i> 3a										1	1		1
合計										1	1		1



# 細菌検出状況

相模原市保健所  
(平成13年1月～12月)

菌種・群・型	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	
<i>Escherichia coli</i> (Total)*						38		1			5		44
<i>Salmonella</i> 07 (C1,C4)								2				1	3
<i>Salmonella</i> 09 (D1)									11				11
<i>Vibrio parahaemolyticus</i>								2	1	3			6
<i>Streptococcus</i> . A	2	1			2	1						2	8
合計	2	1			2	39		5	12	3	5	3	72

【注】 \* : 急性胃腸炎の原因菌と考えられるもののみ記載

<i>Escherichia coli</i> の内訳 (再掲)	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	
<i>Escherichia coli</i> 病原大腸菌血清型											5		5
<i>Escherichia coli</i> EHEC/VTEC						38		1					39
合計						38		1			5		44

表1 菌種・菌型別病原菌検出状況（ヒト由来）

神奈川県衛生研究所

（平成13年1月～12月）

菌種・群・型	採取月												計	
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数		総数
<i>Escherichia coli</i> (Total)*	2	10	4	12	4	5	2	10	19	2		2	72	
<i>Shigella</i> (Total)			1	1									1	1
<i>Salmonella</i> 04 (B)								1					1	
<i>Salmonella</i> 07 (C1,C4)						2		1			2		5	
<i>Salmonella</i> 09 (D1)						24	7		6	3	28		68	
<i>Salmonella</i> 03,10 (E1,E2,E3)									1				1	
<i>Vibrio parahaemolyticus</i>								4	2				6	
<i>Aeromonas hydrophila</i>						1							1	
<i>Aeromonas sobria</i>	1												1	
<i>Campylobacter jejuni</i>			2	2		24				5		2	35	
<i>Clostridium perfringens</i> *	3					3							6	
<i>Neisseria gonorrhoeae</i>	6	1	1	9	1	3	7	4	2	4	5	5	48	
<i>Neisseria meningitidis</i>							2						2	
<i>Streptococcus</i> , A			4	1		2				1	3	3	14	
<i>Klebsiella oxytoca</i>	2		1			3				1			7	
<i>Mycoplasma pneumoniae</i>												1	1	
<i>Aeromonas caviae</i>	1	1											2	
合計	15	12	13	24	5	67	18	20	30	16	38	13	271	

[注] \*：急性胃腸炎の原因菌と考えられるもののみ記載

<i>Escherichia coli</i> の内訳（再掲）	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	
<i>Escherichia coli</i> 毒素産性									14				14
<i>Escherichia coli</i> 病原大腸菌の異型	2	10	4	5				4	3	2		2	32
<i>Escherichia coli</i> EHEC/VTEC				7	4	5	2	6	2				26
合計	2	10	4	12	4	5	2	10	19	2		2	72

<i>Shigella</i> の型別（再掲）	採取月												計	
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数		総数
<i>Shigella sonnei</i>			1	1									1	1
合計			1	1									1	1

3 ウイルス検出状況（ヒト由来）

横浜市衛生研究所

（平成13年1月～12月）

（月 別）

検出ウイルス	採取月												計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
インフルエンザ AH1		16	16	1										33
インフルエンザ AH3	1	1	3	3								1		9
インフルエンザ B	3	8	16	6										33
コクサッキー A2						1	7							8
コクサッキー A4							1	1						2
コクサッキー A5						2	6							8
コクサッキー A6							1							1
コクサッキー A8								1						1
コクサッキー B2							1							1
コクサッキー B3	1													1
コクサッキー B5						2	1	1						4
エコー 3									1	1				2
エコー 7						1								1
エコー 11										1				1
エコー 12		1												1
エコー 21	1													1
エコー 25		1												1
エコー 30		1												1
ムンプス	1													1
アデノ 1	1	1											1	3
アデノ 2	1	1	1		1					1	1			6
アデノ 3	3	1	5		2	2	3	1						17
アデノ 4	1	1												2
アデノ 6		1												1
アデノ 8										1				1
アデノ 19									1	1				2
アデノ（型未決定）	1						1		1					3
単純ヘルペス 1		1			2				1					4
口 夕			2											2
小 型 球 形												1		1
パラインフルエンザ 2	4			1										5
パラインフルエンザ 3					1		1		1					3
RS	5	2	1		1	1	2	1	1	3	14	18		49
ライノ	1	1		1	1	1	1		1	2				9
未同定	1			2		4	2		1			1		11
合 計	25	37	44	14	8	14	27	5	8	10	15	22		229

ウイルス検出状況 (ヒト由来)

川崎市衛生研究所

(平成 13 年 1 月～ 12 月)

(月 別)

検出ウイルス	採取月												計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
インフルエンザ AH1	1	7	5											13
インフルエンザ AH3			3	4										7
インフルエンザ B		5	9	1	1	1								17
コクサッキー A16						1	2	1						4
エコー 11													1	1
エンテロ 71								1						1
アデノ 2						1								1
アデノ 3			1	2	2	3	2	2						12
アデノ 8			1		1					1				3
アデノ 11						1								1
単純ヘルペス 1							1						1	2
口 夕		1	1	1										3
小 型 球 形	2	12		5										19
エンテロ 型不明							2							2
エコー14	2													2
合 計	5	28	21	9	4	7	7	4		1		2		88

ウイルス検出状況

(疾 患 別)

疾患名	麻疹様疾患	流行性耳下腺炎	感染性胃腸炎	手足口病	ヘルパンギーナ	インフルエンザ様	咽頭結膜熱	流行性角結膜炎	急性出血性結膜炎	無菌性髄膜炎	急性脳炎	食中毒	その他	合 計
インフルエンザ AH1						13								13
インフルエンザ AH3						7								7
インフルエンザ B						15	2							17
コクサッキー A16				4										4
エコー 11						1								1
エコー 14									2					2
エンテロ 71				1										1
エンテロ 型不明							2							2
アデノ 2							1							1
アデノ 3						1	6	5						12
アデノ 8								3						3
アデノ 11													1	1
単純ヘルペス 1						1	1							2
口 夕			3											3
小 型 球 形												19		19
合 計		3	5			38	12	8		2		19	1	88

ウイルス検出状況（ヒト由来）

横須賀市衛生試験所

（平成13年1月～12月）

（月別）

検出ウイルス	採取月												計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
コクサッキー A2							1							1
コクサッキー A4							4							4
コクサッキー A5							2							2
単純ヘルペス 1					1									1
ノーウォーク様疾患	8												5	13
合計	8				1		7						5	21

ウイルス検出状況

（疾患別）

疾患名 検出ウイルス	麻疹	流行性耳下腺炎	感染性胃腸炎	手足口病	ヘルパンギーナ	インフルエンザ様	咽頭結膜熱	流行性角結膜炎	急性出血性結膜炎	急性性脳炎	食中毒	その他	合計
コクサッキー A2					1								1
コクサッキー A4					4								4
コクサッキー A5					2								2
単純ヘルペス 1							1						1
ノーウォーク様疾患											8	5	13
合計					7		1				8	5	21

ウイルス検出状況（ヒト由来）

相模原市保健所  
(平成13年1月～12月)

(月 別)

検出ウイルス	採取月												計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
インフルエンザ AH3		1	1											2
アデノ 3	6	1				1	2		1					11
アデノ 8	1													1
アデノ 19									1	1				2
アデノ (型未決定)	1													1
小 型 球 形	3	5											14	22
合 計	11	7	1			1	2		2	1		14	39	

ウイルス検出状況

(疾 患 別)

疾患名	麻疹	流行性耳下腺炎	感染性胃腸炎	手足口病	ヘルパンギーナ	インフルエンザ様	咽頭結膜熱	流行性角結膜炎	急性出血性結膜炎	無菌性髄膜炎	急性脳炎	食中毒	その他	合計
インフルエンザ AH3						2								2
アデノ 3						7		4						11
アデノ 8								1						1
アデノ 19							1	1						2
アデノ (型未決定)								1						1
小 型 球 形		14										8		22
合 計		14				9	1	7				8		39

ウイルス検出状況（ヒト由来）

神奈川県衛生研究所

（平成13年1月～12月）

（月 別）

検出ウイルス	採取月												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
インフルエンザ AH1	10	17	2	1									30
インフルエンザ AH3	1	1	3										5
インフルエンザ B		2	6										8
パラインフルエンザ 1						1							1
ポリオ 1				1									1
ポリオ 2				1									1
コクサッキー A2			1			4	3						8
コクサッキー A4							7						7
コクサッキー A5					1	3	3						7
コクサッキー A16						2	1	2		5	3	1	14
コクサッキー B5						1	5	2	1				9
エコー 22							1						1
ムンプス			1			1	1		1	1			5
アデノ 1	1												1
アデノ 2		1											1
アデノ 3		3	4		2		1	1			1		12
アデノ 4			1										1
アデノ 19								1					1
単純ヘルペス 1			1		1							2	4
小型球形 ノーウォーク	1			1								1	3
デング	15			11							1	1	28
未同定								2					2
未同定											1		1
合計	28	24	19	15	4	12	22	8	2	6	6	5	151

ウイルス検出状況

神奈川県衛生研究所

(平成13年1月～12月)

(疾患別)

疾患名 検出ウイルス	麻疹	流行性 性 耳 下 腺 炎	感染性 胃 腸 炎	手足 口 病	ヘル パ ン ギ ー ナ	イン フ ル エ ン ザ 様	咽 頭 結 膜 熱	流 行 性 角 結 膜 炎	急 性 出 血 性 結 膜 炎	無 菌 性 髄 膜 炎	急 性 脳 炎	食 中 毒	デ ン グ 熱	そ の 他	合 計
インフルエンザ AH1						30									30
インフルエンザ AH3						5									5
インフルエンザ B						8									8
パラインフルエンザ 1										1					1
ポリオ 1					1										1
ポリオ 2					1										1
コクサッキー A2				1	6					1					8
コクサッキー A4					7										7
コクサッキー A5					7										7
コクサッキー A16				14											14
コクサッキー B5					4					5					9
エコー 22											1				1
ムンプス										5					5
アデノ 1						1									1
アデノ 2						1									1
アデノ 3						7	4							1	12
アデノ 4						1									1
アデノ 19							1								1
単純ヘルペス 1					2	2									4
小型球形 ノーウォーク様												3			3
デング												24	4		28
未同定													2		2
未同定														1	1
合計				15	28	55	5			12	1	27	2	6	151



#### 4 予防接種実施状況

##### (1) ジフテリア・百日せき・破傷風（1期、2期）

区分 \ 年度	10 (年度)	11 (年度)	12 (年度)	13 (年度)	13年度内訳	
					第1期	第2期
接種者数	277,642 人	208,531 人	359,497 人	360,402 人	320,837 人	39,565 人

##### (2) 急性灰白髄炎

年度 \ 区分	対象者数	接種者数	接種率	
10	126,054 人	124,536 人	98.8 %	
11	159,110	163,413	102.7	
12	162,776	148,994	91.5	
13	163,048	166,398	102.1	
内訳	第1回	81,559	83,830	102.8
	第2回	81,489	82,568	101.3

##### (3) 麻しん

年度 \ 区分	対象者数	接種者数	接種率
10	81,670 人	77,713 人	95.2 %
11	82,413	82,749	100.4
12	82,606	79,161	95.8
13	82,732	87,541	105.8

##### (4) 風しん

年度 \ 区分	対象者数	接種者数	接種率	
10	210,297 人	110,196 人	52.4 %	
11	196,014	120,259	61.4	
12	165,081	103,792	62.9	
13	158,305	76,102	48.1	
内訳	定期分	82,445	57,285	69.5
	経過措置分	75,850	18,817	24.8

## (5) 日本脳炎

年度		区分	対象者数	接種者数	接種率
10			369,112 人	227,789 人	61.7 %
11			319,338	209,662	65.7
12			399,338	264,629	66.3
13			408,106	274,578	67.3
13 年 度 内 訳	幼児初回接種 (1期初回第1回)		85,727	75,435	88.0
	幼児初回接種 (1期初回第2回)		85,727	72,182	84.2
	幼 児 (1期追加)		79,848	57,755	72.3
	小 学 生 (2期)		76,405	44,984	58.9
	中 学 生 (3期)		80,399	24,222	30.1

## (6) インフルエンザ

年度		区分	対象者数	接種者数	接種率
13			1,196,075 人	315,562 人	26.4 %
内 訳	65 歳 以 上		1,191,741	315,289	26.5
	予防接種法施行令で定める 60歳以上65歳未満の者		4,334	273	6.3

# 8 神奈川県感染症機関分布図

(番号は、次頁に掲げる一覧表を参照のこと)



## 9 神奈川県感染症機関一覧表

(※印は合同庁舎)

分布図 番 号	機 関 名	所 在 地	電 話
—	横浜市衛生局保健部感染症・難病対策課	横浜市中区港町1-1	045 (671) 2462
1	横浜市 鶴見福祉保健センター	” 鶴見区中央3-20-1	045 (503) 1212 ※
2	” 神奈川福祉保健センター	” 神奈川区広台太田町3-8	045 (323) 1212 ※
3	” 西福祉保健センター	” 西区中央1-5-10	045 (322) 1212 ※
4	” 中福祉保健センター	” 中区山下町116	045 (681) 6231
5	” 南福祉保健センター	” 南区花ノ木町3-48-1	045 (742) 1212 ※
6	” 港南福祉保健センター	” 港南区中央通10-1	045 (841) 1212 ※
7	” 保土ヶ谷福祉保健センター	” 保土ヶ谷区川辺町2-9	045 (334) 6341 ※
8	” 旭福祉保健センター	” 旭区鶴ヶ峰1-4-12	045 (952) 1212 ※
9	” 磯子福祉保健センター	” 磯子区磯子3-5-1	045 (753) 2443 ※
10	” 金沢福祉保健センター	” 金沢区泥亀2-9-1	045 (782) 1212 ※
11	” 港北福祉保健センター	” 港北区大豆戸町26-1	045 (543) 1212 ※
12	” 緑福祉保健センター	” 緑区寺山町118	045 (933) 1212 ※
13	” 青葉福祉保健センター	” 青葉区市ヶ尾町31-4	045 (978) 2345
14	” 都筑福祉保健センター	” 都筑区茅ヶ崎中央32-1	045 (948) 2344
15	” 戸塚福祉保健センター	” 戸塚区戸塚町157-3	045 (881) 1212 ※
16	” 栄福祉保健センター	” 栄区桂町303-19	045 (894) 6963 ※
17	” 泉福祉保健センター	” 泉区和泉町4636-2	045 (863) 2444 ※
18	” 瀬谷福祉保健センター	” 瀬谷区二ツ橋町190	045 (362) 1212 ※
19	横浜市 衛生 研 究 所	” 磯子区滝頭1-2-17	045 (754) 9800
—	川崎市健康福祉局健康部疾病対策課	川崎市川崎区宮本町1	044 (200) 2441
20	川 崎 市 川 崎 区 保 健 所	” 川崎区東田町8	044 (201) 3111 ※
21	” 幸 区 保 健 所	” 幸区戸手2-12-11	044 (522) 7315
22	” 中 原 区 保 健 所	” 中原区小杉町3-245	044 (744) 3111 ※
23	” 高 津 区 保 健 所	” 高津区下作延274-2	044 (861) 3111 ※
24	” 宮 前 区 保 健 所	” 宮前区宮前平2-20-5	044 (856) 3111 ※

分布図 番号	機 関 名	所 在 地	電 話
25	川 崎 市 多 摩 区 保 健 所	川崎市多摩区登戸 1775 - 1	044 (935) 3111 ※
26	" 麻 生 区 保 健 所	" 麻生区万福寺 1 - 5 - 1	044 (953) 3111 ※
27	川 崎 市 衛 生 研 究 所	" 川崎区大島 5 - 13 - 10	044 (244) 4985
28	横 須 賀 市 保 健 所	横須賀市西逸見町 1 - 38 - 11	046 (822) 4300
29	横 須 賀 市 衛 生 試 験 所	" 米が浜通 2 - 7	046 (822) 4257
30	相 模 原 市 保 健 所	相模原市富士見 6 - 1 - 1	042 (769) 8346 ※
31	相 模 原 市 衛 生 試 験 所	" 富士見 6 - 5 - 8	042 (769) 8348 ※
-	神 奈 川 県 衛 生 部 保 健 予 防 課	横浜市中区日本大通 1	045 (210) 5117 ※
32	神奈川県 平塚保健福祉事務所	平塚市豊原町 6 - 21	0463 (32) 0130
33	" 鎌倉保健福祉事務所	鎌倉市由比ヶ浜 2 - 16 - 13	0467 (24) 3900
34	" 藤沢保健福祉事務所	藤沢市鵠沼石上 2 - 7 - 1	0466 (26) 2111 ※
35	" 茅ヶ崎保健福祉事務所	茅ヶ崎市茅ヶ崎 1 - 8 - 7	0467 (85) 1171
36	" 大和保健福祉事務所	大和市中央 1 - 5 - 26	046 (261) 2948
37	" 小田原保健福祉事務所	小田原市南町 2 - 4 - 45	0465 (22) 3135
38	" 三崎保健福祉事務所	三浦市三崎町六合 32	0468 (82) 6811 ※
39	" 秦野保健福祉事務所	秦野市曾屋 2 - 9 - 9	0463 (82) 1428
40	" 厚木保健福祉事務所	厚木市水引 2 - 3 - 1	046 (224) 1111 ※
41	" 足柄上保健福祉事務所	足柄上郡開成町吉田島 2489 - 2	0465 (83) 5111 ※
42	" 津久井保健福祉事務所	津久井郡津久井町中野 937 - 2	042 (784) 1111 ※
43	神 奈 川 県 衛 生 研 究 所	横浜市旭区中尾 1 - 1 - 1	045 (363) 1030
44	横 浜 検 疫 所	" 中区海岸通 1 - 1	045 (201) 4456
45	東 京 検 疫 所 川 崎 支 所	川崎市川崎区千鳥町 8 - 1	044 (277) 0025
46	東 京 検 疫 所 横 須 賀 出 張 所	横須賀市田浦港町 1 - 49	0468 (61) 6550
47	東 京 検 疫 所 三 崎 出 張 所	三浦市向ヶ崎 8 - 48	0468 (81) 3805
48	輸 入 食 品 ・ 検 疫 検 査 セ ン タ ー	横浜市金沢区長浜 107 - 8	045 (701) 9502
49	横 浜 市 立 市 民 病 院	" 保土ヶ谷区岡沢町 56	045 (331) 1961

分布図 番号	機 関 名	所 在 地	電 話
50	川 崎 市 立 川 崎 病 院	川崎市川崎区新川通 12 - 1	044 (233) 5521
51	横 須 賀 市 立 市 民 病 院	横須賀市長坂 1 - 3 - 2	0468 (56) 3136
52	藤 沢 市 民 病 院	藤沢市藤沢 2 - 6 - 1	0466 (25) 3111
53	平 塚 市 民 病 院	平塚市南原 1 - 19 - 1	0463 (32) 0015
54	相 模 原 協 同 病 院	相模原市橋本 2 - 8 - 18	042 (772) 4291
55	神 奈 川 県 立 厚 木 病 院	厚木市水引 1 - 16 - 36	046 (221) 1570
56	神 奈 川 県 立 足 柄 上 病 院	足柄上郡松田町松田惣領 866 - 1	0465 (83) 0351

平成13年 神奈川県感染症

平成15年2月 発行

発行者 神奈川県感染症情報センター

(神奈川県衛生研究所)

印刷所 有限会社 関内印刷



資源を大切に この本は 再生紙(古紙70%含有)を使用しています



神奈川県

衛生研究所

横浜市旭区中尾1-1-1 〒241-0815 電話(045)363-1030